どと言ひながら、いよいよ歸る時まで散々からかつて行きました。やがて、たうとう行つてしまつた。今までこの一滴が足りなかつた、私の盃はこの一滴によつて溢れてしまひました。私はいくたびか部屋の中を歩きまはつて、鏡の前に立ちどまり、いつまでも、いつまでも途方に暮れた顏を見まもり、ゆるゆると舌を出して、苦笑ひをしながら頭を振りました。眼の曇りはすつかり晴れてしまひました。私ははつきりと、鏡にうつる自分の顏よりもはつきりと、自分がどんなに淺薄な、取るにも足らない、役にも立たない、獨創のない人間であつたかが分かつたのです！』

話し手はしばらく口を噤んだ。

『ヴォルテールのある悲劇の中に、』と、彼はがつかりしたやうな調子で話しつづけた、『或る紳士が極度の不幸に陷つたことを喜ぶところがありますね。私の運命には悲劇的なところは、ちつともありませんが、私はありのままに申すと、やはりそれに似たやうなものを經驗しました。私は冷やかな絶望の毒々しい法悅を知りました。朝のうち、ずつと床の中に落ち着いて、横になりながら、自分の生れた日と時とを呪ふことが何んなに心地のよいものかを經驗しました、――私は一いきに諦めをつけることは能きませんでした。しかし實際のところ、まあ御察し下さい、私はお金がなかつたばつかりに憎むべき田舍へ閉

ぢこもらなければならなかつたのです。土地の經營も、勤めも、文學も――何もかも身には附かなかつた。地主たちとは遠ざかり、本を讀むのも厭やになつた。捲毛をふり立てて、熱病やみのやうに「人生」といふ言葉を繰りかへしてゐる水ぶくれしたやうな、病的に感傷的なお孃さま方にも、私がお喋りをしたり有頂天になつたりしなくなつてからといふものは、さつぱり興味を感じなくなつた。さうかといつて全く孤獨になることも忍びがたく、能きもしなかつたのです……。私は始めました、一體、何を始めたとお思ひになります？私は近所の人たちのところを、ぶらつき始めたのです。まるで自分といふものを全く輕蔑し切つたかのやうに、私は故意にあらゆる人々のけちな凌辱を招いたのです。食卓に就けば讒謗せられ、人からは冷やかに横柄な態度で迎へられ、遂には見向きもされなくなつて、世間話の相手にさへもされなくなりました。そこで私は莫斯科にゐた時分には私の足の塵にも、外套の端にも接吻しかねないほど私を有難がつてゐた或る極めて馬鹿なお喋りに、わざと隅の方から「然り、然り、」と言つてやりました……。それにしても、自分はこんな皮肉なことをして苦い滿足に耽つてゐるのだとは夢にも思へなかつたのです……。まあ、考へて見て下さい、獨りぼつちでゐるのに、何の皮肉ぞやです！　まあ、こんな工合で何年かを相も變らず身過ぎをして來ました。そして今に到るまで、こんな工合にやつてゐる

譯です……』

『いや、どうも聞いちやゐられねえ。』と隣りの部屋からカンタグリューヒン氏が睡さうな聲でぶつぶつ言ふのが聞こえる、『なんて馬鹿だらう？　夜よなかに話をするなんて。』

話し手は大いそぎで毛布の中へもぐり込んで、おどおどと外を覗きながら、指を出して私をおどかした。

『しっ……しっ……、』と、囁やいて、恰も謝るかのやうに、カンタグリューヒンの聲のした方へお辭儀をしながら、恭々しく言つた、『畏まりました、畏まりました、どうも相濟みませんで御座います……。彼もやつと眠れるんです、眠らなきやなりません。』と、又ひそひそ聲になつて話しつづける、『あの男も元氣をつけなくちやなりません、まあ、明日の食事をうまく食ふためにでも。私どもはあの男を邪魔する權利はありません。それに私は言ひたいだけの事はみんなお話したやうな氣がしますし、貴方もきつとお寢みになりたいでせう。お寢みなさい。』

彼はひよいと熱病やみのやうに素早く向うを向いて、枕に頭を埋めた。

『せめて貴方の』と、私は訊ねた、『お名前だけでも聞かして戴きたいものですが……。』

彼はすぐに頭をあげた。

『いや、どうぞ後生ですから、』と、私を遮つた、『私にも、他の人にも私の名だけは訊かないで下さい。ただ、運命に傷められた見知らぬ男、ワシリイ・ワシリキッチとして憶えてゐて下さい。それにまた獨創のない人間ですから、自分だけの名をもつ値打なんかありませんし……。それでも是非、何とか呼び名をつけたいと仰つしやるんでしたら……、シチーグロフ郡のハムレットといつて下さい。かういふハムレットはどこの郡にもたくさん居ります、尤も貴方は恐らくほかの連中にはぶつからなかつたでせうね……では御機嫌よく。』

彼はまた羽毛布團の中にもぐり込んだ。翌くる朝、人が來て私を起こした時、彼はもう部屋の中にはゐなかつた。夜の明ける前に彼は去つたのである。

譯者附記……「學會」（五六四頁）について……一八二五年十二月、いはゆる「デカブリスト」（十二月黨）の反亂があつてから、最も進歩的な思想を論ずる者には大斷壓が加へられた。にも拘はらず、暴力的壓迫によつて新しい智識階級の理智生活を破壞することは能きなかつた。三十年代になると、その當時の新しい思想の中心地たるモスクワの大學には各種の學會が現はれた。特に注目すべきはスタンケーキッチを中心とするスタンケーキッチ會とゲルツエンを中心とするゲルツエン會であつた。前者は獨逸觀念哲學（殊にシエリング、後にはヘーゲルの）に共鳴し、獨逸ロマンチクの「藝術をとほしての自我と世界精神との融合」――との思想を奉じて、主觀的な自己完成を念とする大學生によつて形づくられ、後者は佛蘭西の空想的社會主義者サン・シモンの思想に動かされて、多數のものの共存共榮を望み、全く露

西亞の現實を觀念的に否定して、空想的社會主義者のかぎりない社會理想に燃えてゐた青年學生によつて成り立つてゐた。ツルゲェネフはかなり後にではあつたが前者に加はつてゐた。（後者は三四年に解散を命ぜられた）。そこでこのハムレットの言葉を見ると、彼が嘗てはスタンケーキッチ會に屬し、審美的な理想主義的傾向と舊西亞の現實との背馳に超望した四十年代の尖端的な貴族であつたことが窺はれる。

チェルトプハーノフとネドピュースキン

ある夏の暑い日に、私は馬車に乘つて獵から歸るところであつた。エルモライは私のわきに坐つて微睡（まどろ）んだり、船を漕いだりしてゐた。ぐつすり睡りこんだ犬は私たちの足もとに、まるで死んででもゐるかのやうに跳びあがつてゐた。馭者は馬にたかる牛蠅を絶えず鞭で追ひ拂つてゐた。白い埃が輕い雲のやうに馬車のあとから趨つて來る。私たちは叢林（しげみ）の中へ入つた。道はいよいよ凹凸がはげしくなつて、車の輪が小枝に引つかかり出した。エルモライはぶるぶると身慄ひをして、あたりを見まはした……。『やあ！』と、彼は口を切つた、『ここらに松鷄（えぞやまどり）がゐるに違えねえ。降りて見やんせう。』私たちは馬車を停めて、「原つぱ」へ入つて行つた。犬が一群れの雛鳥に行きあたつた。私は一發うつて、また裝塡しかかつてゐた、すると、出し抜けにがさがさといふ音が後ろの方に高く聞こえて、馬に乘つた男が兩手で繁みを押しわけながら、私の方へやつて來た。やがて『ええ、

一寸おたづねしますが、』と彼は横柄な聲でいひ出した、『一體、何の權利あつて此處で獵なさる、貴方？』この見知らぬ男は、非常に早口に、きれぎれに鼻にかかる聲でいつた。私は彼の顏を見たが、生れてこの方、こんな顏を見たことがない。親愛なる讀者諸君よ、つやつやしい髮の毛に、上を向いた赤い鼻と極めて長い人蔘いろの口髭をもつた背の小さい人を想像していただきたい。さきの方に眞赤な羅紗がついてゐる尖つた波斯帽が、眉のきはまでもずつと額にかぶさつてゐる。着物はと見れば黃いろい擦り切れた袖無しで、胸には黑い綿天鵞絨の藥筒さしがついてゐて、縫目といふ縫目には色あせた銀の飾紐がついてゐる。肩越しに角笛が下がり、腰帶には短劍が見える。痩せ衰へた鈎鼻の栗毛の馬は、氣でも狂つたかのやうに、この人を乘せてよろめき、二匹の痩せて、足のまがつた獵犬がその馬の脚もとを驅け廻つてゐる。顏といひ、眼つきといひ、聲といひ、すべての動作といひ、見知らぬ男の全體が、氣違ひじみた大膽さと奔放不覇な驚ろくべき傲慢さを感じさせる。その薄靑い、硝子のやうな眼は醉ひどれの眼のやうに落ち着かず、横目で物を見てゐる。ぐつと反り身になつて、頰をふくらし、鼻息を荒くして、はちきれさうな威嚴を示すかのやうに、身體ぢゆうを慄はせたところは、どう見ても七面鳥そつくりであつた。彼は同じ質問を繰り返した。

『ここで擊つてはいけないついふことを知らなかつたもんですから。』と、私は答へた。『ここは貴方、』と、彼は續ける、『私の地內ですよ。』

『それは失禮しました。そんなら早速、出て行きませう。』

『ですけど、一寸おたづねします、』と、彼は言ひ返した、『あなたは若しや貴族ぢや御座いませんか？』

私は自分の名を名乘つた。

『それではどうぞ獵をなすつて下さい。私はやつぱり貴族ですから、貴族のお役に立つのは何より嬉しいです……。時に私の名はパンテレェ・チェルトプ*・ハーノフと申します。』

彼は身を屈めて、大聲に呼び立てながら馬の頸に太鞭をくれた。馬は頭を振りたて、後脚で立ちあがり、脇道へそれて、犬の足を踏みつけた。犬は刺し通すやうな悲鳴をあげる。チェルトプハーノフは怫然と色をなして、口から泡をとばし、馬の頭の耳の間のところを拳骨でなぐりつけ、稻妻よりも速かに飛び下りた。犬の足をしらべて見て、傷に唾をつけ、鳴くのをとめるために犬の脇腹を足で突いて、しつかりと馬の鬐甲にしがみつき、鐙に足

＊ チェルトプハーノフと續けて言ふべきところを、二つに切つて言つたのである。（譯者註）

をかけた。馬は顔をあげ、尾をふりあげて、横ざまに叢林の中へ入る。彼は片足で跳ねながら、馬について行つた。それでも、たうとう鞍に乘り、我を忘れたかのやうに無暗に太鞭を浴びせかけ、角笛を吹いて駈けて行つた。チェルトプハーノフが思ひがけなく現はれたのに驚ろかされて、私がまだぼんやりしてゐるところへ、又もや不意に殆んど物音もたてずに、かなり肥つた四十恰好の男が小さな黑馬にまたがつて叢林の中から出て來た。彼は立ちどまつて、綠いろの革の縁なし帽子を脫いで、いとも弱々しい、やさしい聲で、栗毛の馬に乘つた人を見かけなかつたかと私に訊ねた。私は見かけたと答へた。

『あのお方はどちらへ行きましたらう?』

と、同じ調子で、帽子を脫つたまま言葉を繼いだ。

『あちらの方です。』

『大きに有難うございました。』

彼は接吻する時のやうに唇を鳴らして、馬の横腹に兩足をあてて、小走りに、——ゆらりゆらりと搖られながら、教へられた方を向いて走らせて行つた。私は角のやうに尖つた帽子が樹枝の蔭に隱れるまで彼の後ろ姿を見送つた。この新しい未知の人は前の人とは樣子がまるで違つてゐた。顏は鞠のやうに圓々と肥えてゐて、內氣な、人の好い、やさしい

謙讓な氣持をあらはしてゐる。やはり圓く肥えて、青い血の筋の縞をなしてゐる鼻は酒色の徒たることを物語つてゐる。頭の前の方には一本の毛もなく、後ろの方にうすい亞麻いろの毛が房のやうに見え、小さな眼は菅の葉ででも切つたやうに切れ長で、人なつこげに瞬き、潤ほひのある赤い唇には、快よい微笑みがうかんでゐる。着てゐるのは立襟に銅の釦のついたフロックで、ひどく着古したものではあるが、さつぱりしたものだ。羅紗のズボンは高く引つぱり上げられ、長靴の黃いろい縁飾りの上には脂ぎつた脹脛が見える。

『あれは誰だい?』と、私はエルモライに訊いて見た。

『あれかね? チホン・イワーヌィチ・ネドビュースキンでさ。チェルトプハーノフんとこにゐますんで。』

『どんな男だね、貧乏人かえ?』

『金持ぢやありましねえ。けんど、チェルトプハーノフにだつて、鐚一文ねえんぢやありませんか。』

『そんならどうして彼んとこへ根付いたんだ?』

『それあ、それ、仲よくしてたもんで。どこへ行くにも一人で行くことたねえんで……いや、本當がですよ、烏の驚眞似つて……』

私たちは叢林の外に出た、すると不意に直き近くで二匹の獵犬が吠え出した。とたんに大きな白兎が、もうかなり伸びてゐる燕麥の中へ駈け込んだ。そのあとを追つて、叢林の緣からボルゾイ*やハウンド、何匹もの獵犬が躍り出た。犬の後ろからチェルトプハーノフ自身も飛び出した。彼は喚きもせず、掛け聲もしない。息を切らして、唾を飲みこんでゐる。とぎれとぎれの、意味もない音聲が大きく開いた口から洩れる。今にも飛び出しさうな眼をして、飛んで行き、可哀さうな馬に太鞭をくれる。獵犬は「あはやといふところへ來た」、白兎は一寸うづくまつて、いきなり後ろへ引き返し、エルモライのわきを、叢林をさして駈け拔ける……獵犬がまた駈け拔ける。『かあ・け・ろ、かあ・け・ろ!』と疲れはてた獵人が吃りのやうに、辛うじていふ、『おうい、氣をつけろ!』エルモライが一發うつ……手傷を負つた白兎は滑らかな枯草の上に獨樂のやうに轉がり、宙に跳り上がる。やがて押しかけた牡犬の齒にかかつて哀しげに鳴き出す。獵犬が直きに下へ轉げ込む。

チェルトプハーノフは宙返りをする鳩のやうに、馬から飛んで下り、短劍を引つ摑んで、大股に犬どもの間へ割りこみ、呶鳴りつけながら食ひ裂かれた兎を引つたくつた。やがて、顏中をしかめながら柄もとほれとばかり喉もとに突き刺した……突き刺して、それから『ほうほう』と、叫び出した。チホン・イワーヌィチは繁みの緣に現はれた。『ほう・ほ

う・ほう・ほう・ほう・ほう・ほう!』と、チェルトプハーノフがもう一度叫び出した……。『ほう・ほう・ほう・ほう、』と、仲間が靜かに繰り返した。

『ですが、夏の間だけは獵をしない方がいいんぢやありませんか。』と、私は踏みつけられた燕麥を指しながらチェルトプハーノフにいつた。

『なあに、自分の畑ですから。』と、やつと息をつきながらチェルトプハーノフが答へる。彼は兎の後脚を切り取つて、からだを鞍に括りつけ、犬どもには脚だけを分けてやつた。『彈丸を借りてる譯だ、君。獵の法式からいふと。』と、彼はエルモライの方を向いて言つた。そして『けど貴方樣には』と、同じやうな、ぶつきら棒な鋭い聲で言ひ足した、『御禮を申し上げます。』

彼は馬に跨つた。

『一寸おたづねします、……忘れましたんで、……あなたの苗字とお名前を……』

私はまた自分の氏名を告げた。

『お近づきになりまして大へん嬉しいです。折もございましたら、どうぞいらして下さい……。ところでチホン・イワーヌィチ・フォームカはどうした』と怒りながら言葉をつ

* ボルゾイもハウンドも共に獵犬の種名。ボルゾイは純露西亞種の獵犬である。(譯者註)

づける、『兎を追つかけて來もしないで。』

『馬がへたばつちやつたんで。』と、チホン・イワーヌィチが微笑みながら答へる。

『へたばつたつて？　オルバッサンがへたばつたつて？　ええ、ちよつ！……あいつ何處にゐる、何處に？』

『あの森の向うに。』

チェルトプハーノフは馬の鼻面に太鞭をくれて、一目散に駈け出した。チホン・イワーヌィチは私にむかつて二度お辭儀をした、つまり一度は私に、一度は私の仲間に。そしてまた叢林のなかへ小刻みに入つて行つた。

この二人の紳士はひどく私の好奇心をそそつた。……一體、何がかくも素性のちがつた二人の人間を、割きがたい友情の絆によつて結びつけたのであらう？　私はいろいろと調べ出した。私が知り得たところのものは次のやうなものであつた。

パンテレェ・エレミキッチ・チェルトプハーノフは近所界隈から、險呑な氣違ひじみた人間で、傲慢な喧嘩好きな男だと評判されてゐた。ほんの暫らくの間、軍隊に入つてゐたが、「芳ばしくないこと」があつて、「*あれでも鳥か」と、世間で考へられてゐる程の位置の時に職を退いた。家柄は嘗ては裕福であつた舊家で、先祖たちは曠野の習はしに從つて

派手に暮らしてゐた――つまり、招いた客、招かなかつた客の區別なく歓待して、たぢたぢになるまで御馳走をし、お客の馭者たちには馬にやるやうにと燕麥をどしどし屆けてやり、家には音樂家や歌うたひ、道化役者や犬などを置き、お祭りの日には誰彼の區別なく麥酒や地酒を振舞ひ、冬になると、自分の馬に重たい大型の馬車をひかせて莫斯科へ出かけた。さうかと思ふと、時には何箇月も一文なしで自分の所でとれるものだけで暮らすこともあつた。領地がパンテレェ・エレミキッチの父の手に入つた頃には既に落ち目になつてゐた。ところが今度は彼の代になると、散々「いい目をした」ので、死んだ時、たつた一人の息子パンテレェに遺したものはベスソノヲといふ低當に入つてゐる小村に、地附きの百姓男三十五人、女七十五人と、コロブロォドワの荒地にあつた役にも立たない十六町三段歩の地面とであつたが、これらの土地に附いてゐる農奴のことは先代の遺言の中には載つてゐなかつた。實をいふと先代は甚だ妙なやり方で身代を滅ぼしたのであつた。いはば「やりくり算段」が彼を臺なしにしたのである。彼の考へでは貴族といふものは商人や町人や、これに類する、彼のいはゆる「强賊」どもと係り合つてはならぬといふので、彼

＊日本で「輜重輸卒が兵隊ならば電信柱に花が咲く、蝶々とんぼも鳥のうち」といふやうに、露西亞では「准尉」のことを「牝鷄が鳥なら准尉も士官」と冗談にいふ。從つて、ここでは士官とは名ばかりの准尉の時代に職を退いたことを意味する。（譯者註）

は自分の地内にありと凡ゆる商賣を始めさせたり、仕事場を設けたりして、『この方が體裁もよく、値段も安い。』と、よく言つてゐた、『これこそ、やりくり上手といふものだ！』彼はこの仕末の惡い考へを死ぬまで振り棄てることが能きなかつた。實にこんな考へがあつたからこそ落ちぶれたのである。しかもその代り何んなに面白い目をしたことか！　彼は一寸した出來心でも滿足させずには置かなかつた。いろんな思ひつきのあつたうちにも、或る時は自分の好み通りに、餘り大きな自家用の箱馬車をこしらへたので、村中の百姓馬を寄せ集めて、持主に手傳はして曳かしては見たものの、勾配にさしかかるや否や引つくり返つて粉々にこはれてしまつた。エレミエ・ルキッチ（パンテレェの父親はエレミエ・ルキッチといつた）は是の勾配のところへ記念碑を立てさせたが、こんなことをしても別に不思議とも思はなかつた。また或る時は教會を、勿論獨力で、建築家の手を借りずに建てようと思ひついた。そこで一つの森をすつかり燒き拂つて煉瓦をこしらへ、縣會議事堂でも建てる時のやうに宏大な土臺を構へて、壁を廻し、圓屋根を造りかかつた。ところが、圓屋根は落ちてしまつた。もう一度やり直しをした――圓屋根はまた崩れてしまつた、三たびやり直した――が、圓屋根は三たび崩壞してしまつた。流石のエレミエ・ルキッチも少々考へ出した。仕事がどうも旨く行かない……。きつと呪はしい魔がさしたのだ。

といふので、忽ち彼は村中の年をとつた農婦*たちを一人殘らず鞭うつやうにといひつけた。農婦たちは鞭うたれた、――しかし、圓屋根は相も變らず上がらなかつた。今度は新しい設計で百姓家を建て直しにかかつた、これもみな例の「やりくり算段」のなせる業であつた。まづ三軒の屋敷を三角形にとつて、その眞ん中に柱をおし立て、それに彩色をした椋鳥の巣箱と旗をとりつけた。毎日毎日、こんな工合で新しい計畫を考へてゐた。ある時は牛蒡のスープをこしらへ、ある時は家隷たちの爲に帽子を作つてやるといふので馬の尻尾を切つた、又ある時は蕁麻**を亞麻の代用品にしようと企てたり、豚を菌で養はうとしたり……。嘗て彼は「莫斯科報知」でハリコフの地主フリャク・フルゥピョルスキイが書いた農民生活に於ける道德の必要といふ論說を讀んで、翌くる日には殘らずの百姓に、このハリコフの地主が書いた論文を直ちに暗記するやうにと、お布令を出した。百姓どもは論文を暗記した。そこで旦那はそこに書いてあることが分かつたかと訊いた。すると執事の答へには、この位わからんでどう致しませう！　とのことであつた。また、その時分のこと

* 年寄りの農婦たちは迷信が深く、よく呪禁ひをするので、何か惡いことであると、よく「どこの婆のせゐだらう？」などといつてゐた。勿論、地方的な風習である。（譯者註）

** いらくさの方がずつと安く手に入る。（譯者註）

である、秩序を保つ爲と、やりくり算段から推して、家來どもに一人のこらず番號をつけて、番號を襟に縫ひつけるやうにと命令した。旦那に會つた時は、誰もが大きい聲で『第何號でございます！』と大きい聲でいふ、すると旦那は優しい聲で、『ああ、よしよし！』と答へることになつてゐた。

然し、秩序も立ち、やりくり算段も巧かつたのにも拘はらず、エレミエ・ルキッチは次第次第に極めて苦しい羽目に立ち到つた。最初のうちは自分の持村を抵當に入れたりなぞしたが、やがて他人の手に渡つてしまつた。後にも先にもない先祖傳來の家も、造りかけの教會のある村も既にお上の手で競賣に附せられてしまつたが、運のいいことには、これはエレミエ・ルキッチの存命中ではなかつた、――彼はこの打擊にはとても堪へられなかつたであらう、――といつても死んでから二週間の後にはもう、こんなことになつてゐたのである。彼は自分の家の、自分の寢床で、家の者にとり圍まれ、抱への醫者に看護されて死ぬことが能きた。けれども可哀さうにパンテレェには僅かにベスソノヲが手に入つただけであつた。

パンテレェが父の病氣のことを知つたのは軍隊に入つてからのことで、例の「芳ばしからぬこと」の起きてゐる眞最中であつた。彼はやつと十九になつたばかりであつた。彼は

子供の頃から生れた家を離れたことがなく、極めて人のいい、そのかはりまるで愚鈍なお母さんのワシリーサ・ワシリエヴナの手で我儘に、お坊つちやんに育つて來た。教育は母親が一手に引き受けた。エレミエ・ルキッチはやりくりの工面に耽つてゐたので、それどころではなかつたのである。尤も實際に或る時、Pを「アルツイ」と發音したといふので、父親みづから手を下して息子を罰したことはあつたが、その日エレミエ・ルキッチは深く人知れず悲しまなければならなかつた。といふのは一番よい犬が樹にぶつつけられて殺されてゐたからである。それにしてもワシリーサ・ワシリエヴナが愛し兒のパンテレェの教育のことに世話を燒いたといふのは、ただやきもきと無駄骨を折つたと言つても良いのである。彼女は先づ汗だくになつてアルサス生れの退職軍人でビルコッフ某といふのを家庭教師に雇つたが、死ぬ時まで、この人の前では樹の葉のやうに慄へてゐた。「さあ、あの人が若し辭退したら、私はもうお仕舞ひだ！　さうなつたら私はどうしよう？　どこで他の先生を見つけよう？　ほんとに、やつとやつとの思ひで近所のお宅からおびき出したんだもの！』と、考へてゐたからである。ビルコッフは悧巧な男であつたから、直きに自分が獨占的な位置にあることにつけこんで、へべれけになるまで酒を飲み、朝から晩まで寢てばかりゐた。「學問の課程」を終了してから、パンテレェは軍隊に入つた。ワシリー

サ・ワシリエヴナはもうこの世にはゐなかつた。彼女はこの重大な事件のある半年前に、恐怖に襲はれて世を去つた。彼女は熊に乘つた白い人を夢に見たのである。エレミエ・ルキッチも間もなく連れ合ひの後を追つた。

パンテレェは父が病氣と知るや否や、後をも見ずに駈けつけたが、たうとう死に目には遭へなかつた。しかもこの御曹子が全く思ひがけなく、今まで考へてゐた裕福な世嗣から、ただの貧乏人に轉化してゐた時の驚きはどんなものであつたか！　大抵の人ならこんな急激な變轉に堪へられるものではない。パンテレェは粗野になり、冷酷になつた。甘やかされて育ち、怒りつぽかつたとは言ふものの、正直で、氣前がよくて、人の好かつた男が、打つてかはつて傲慢な、喧嘩好きな男となり、近所の人とも交際しなくなつた――財産家には引け目を感じ、貧乏人を忌み嫌つてゐた――そして誰にも甚だしく尊大に振舞ひ、地方當局に對してさへもさうであつた。『俺は親代々の貴族だ』といつてゐた。ある時などは、帽子をかぶつたまま彼の部屋へ入つて來たといふので、郡警察分署長をすんでのところで射撃するところであつた。勿論、當局の方でも大目には見てゐなかつた。そして、機會ある毎にその權力のあるところを見せてやつた。しかもなほ彼を煙たがつてゐた。なにしろ恐ろしい癇癪もちで、二言目にはナイフで斬り合ひをしようと申し込むほどだつたか

らである。極めて瑣細な口答へをしてもチェルトプハーノフの眼は眩んで、聲はとぎれる……。『ああ、た・た・た・た・た、』と、彼は口吃る、『こん畜生！』……今にも氣が違ひさうになる！　またその上に正直な人間であつたから、どんなことにも捲き添へを食つたことがなかつた。彼のところへは勿論、誰一人として訪ねて行きはしなかつた。けれども、さういふことがどんなにあつたにしろ、彼は善良な氣質をもち、彼一流の偉大な氣質さへも有つてゐた。不公平とか壓制がましいことは他人事の場合でも我慢が能きなかつた。また自分の百姓の事となると全力をつくして庇つてやつた。『何だと？』と、彼は自分の頭を激しく叩いていふ、『内の者に手をかけるつて、内の者に？　おれがチェルトプハーノフでなけりや……』

チホン・イワーヌィチ・ネドビュースキンはパンテレェ・エレミキッチのやうに、自分の素性を自慢することが能きなかつた。父は貧乏地主の出で、四十年間の勤めをした後で、やつと貴族の身分に上ることが能きた。父のネドビュースキン氏は個人的な憎惡にでも苛まれるかのやうに、冷酷に不幸といふものに逐はれる類ひの人間であつた。生れ落ちてから死ぬまで、まる六十年の間、碌々たる人間につきものの、あらゆる貧苦、病疾、災難と闘つて來た。氷にぶつかる魚のやうに七顛八倒し、寢食も忘れ、平身低頭し、駈けずり廻

つては落膽し、困憊して、一錢一厘のことにも屈託して、職務のことでは全く「無實の罪」を着せられて職を逐はれ、遂には屋根裏か穴藏かで、自分はもとより子供たちに食べさせる日ごとの糧も一向に得ることが能きずに死んで行つた。運命は彼を逐ひ立てられる兎のやうに動きのとれないやうにしてしまつたのである。彼は氣立てのよい、正直な人間であつた。賄賂を取つたとはいふものの高が十哥から二留くらゐのものであつた。ネドビュースキンには瘠せた肺病やみの妻君があつた。子供もあるにはあつたが、仕合せなことに、息子のチホンと娘のミトロドラを除いてはみな夭死(わかじに)してしまつた。その娘は綽名を「商家のハイカラ」といつて、いろんな痛ましい事件、可笑しい事件があつたのちに職をやめてゐる辯護士に嫁いだのであつた。父のネドビュースキン氏は生前に息子のチホンを或る役所の雇員として就職さしてやつた。けれども父親が亡くなると、直ちに彼は職を退いた。限りも知れぬ狼狽や、寒さや饑ゑとの悲痛な鬪ひや、母の愁ひにみちた落膽や、或ひは父の懸念から來る絶望とか、宿の主人や小賣商人の不躾な壓迫とか、これらの毎日の絶え間もない辛勞がチホンのうちにいひ知れぬ臆病さを募らせて行つた。長官の影をちらと見たばかりでも、つかまへられた小鳥のやうに身慄ひして、氣が遠くなつた。こんな工合で彼は職を振り棄てたのである。冷靜な、しかも恐らくは嘲弄することの好きな自然は、

人々に、彼等の社會上の位置とか資産とかには全く一致しない樣々な能力や嗜好を植ゑつける。卽ち、自然は持ち前の心づかひと愛情とをもつて貧乏役人の息子チホンを、多感な、懶惰な、柔和な、物に感じ易い人間に――ただ享樂にのみ適する、嗅覺と味覺のおそしく敏感な人間に形づくり……かういふ風に形づくつて、念入りに仕上げをし、やがて――自身の作品が酸い甘藍と腐つた魚を食べて伸びて行くのに任した。さていよいよ伸びた。この作品は、所謂「人生」をはじめたのである。お慰みが始まつた。あんなにも執拗に、父ネドビュースキンを苦しめた運命は息子にも取りついた。明らかに息子を見込んだのであつた。けれども運命はチホンを別に取扱つた。運命は彼を苦しめはしなかつた――運命はチホンを弄んだのである。運命は一度として彼を驅つて絶望に陷らせることもせず、饑ゑといふ不面目な苦痛を嘗めさせもしなかつた。ただ露西亞中を、ヴェリーキイ・ウスチュークからツァレヲ・コクシャイスクまで引つ張りまはし、それからそれへと卑しい滑稽な世渡りをして歩かせた。或る時は喧嘩の好きな癇癪もちの慈善家の奥樣のところへ「家老(ルドーモ)」として住み込ませ、或る時は金持で守錢奴の商人の家の食客(ふきふたふ)にし、或ひは英國風に髮を刈つた金魚目の旦那の祕書頭に就かせ、或ひは愛犬家のところの家令と道化役とを兼ねたやうな役にも昇らせた……。要するに運命は哀れなチホンを驅つて、寄生生活の苦い

毒汁を、雫も餘さず一滴一滴と飲み乾させたのだ。彼は男盛りの時を有閑な殿方の憂鬱なお慰みや、寢ぼけ顏の、性の惡いお退屈のお相手をして過ごした……。いくたびか、散々に彼をなぶつて樂しんだ大ぜいのお客に『もう行つてもいいよ』といはれて、ただひとり自分の部屋へ歸つて來ては身の恥づかしさに熱くなつて、眼には絶望の冷たい涙をうかべ、明日はこつそり拔け出して、町へ行つて運試しをしよう、たとひ書役の一寸した位置なりとも見つけ出さう、でなければいつそ一思ひに街なかで饑ゑ死をしようと誓つたものであつた。しかし、第一に神樣は彼に力を與へてゐなかつた、第二にいつも臆病がつき纏つた、第三には、自分でどうしてうまい位置が見つけられるのか？　誰に賴んだらよいものか？『とても口は授けてくれまい！』と、不幸な男は寢床の上に寢がへりを打ちながら呟やくのであつた、『とても授けてはくれまい！』さうして次の日になると又もや淺ましい仕事を始める。その上、殆んど滑稽家の商賣になくては適はぬ才能や天禀をよく氣のつく自然さへもほんの芥子粒ほども分けてはやらなかつたので、彼の位置はいよいよ慘めなものであつた。彼は例へば熊の皮の外套を裏返しに着て、へとへとになるまで踊ることも能きず、耳のそばで、ぴしぴしと長い鞭の鳴るのを聞きながら、輕口をいつたり、御機嫌とりをしたりすることも能きなかつた。氷點下二十度の寒さに素裸で出されて風邪を引いたことも

時折あつた。彼の胃の腑はインクやその他の汚いものを混ぜた酒や、細かに刻んで酢をかけた蠅取茸や平茸を消化することは能きなかつた。その後、チホンがどうなつたかは、若し彼の最後の恩人で大分お金を溜めた一手販賣人といふのが、上機嫌の時に思ひ立つて次のやうなことを遺言狀に書き入れなかつたならば、さつぱり分からなかつた筈である。遺言狀には「ジョーザ（チホンに同じ）・ネドピュースキンに永劫末代の所有として拙者の正當に取得せるベズセレンヂェフカ村および一切の附屬地を提供いたすべく候」と書き入れてあつた。それから數日して恩人は鰈鮫のスゥプを喫べたのが原因で卒中を起こして死んでしまつた。大へんな騷ぎになつた。お役人がやつて來て、然るべく財產に封印をした。親類の人達がやつて來て、遺言狀を開けて讀んだ。ネドピュースキンを招びにやつた。ネドピュースキンはやつて來た。集まつた人たちの大部分はチホン・イワーヌィチがこの恩人のところで何んな役割を勤めてゐたかを知つてゐた。彼が來ると、耳も聾せんばかりの叫びごゑと嘲笑的な祝辭を浴びせかけられた。『地主樣だ、ほら、新しい地主樣だぞ！』他の遺產相續人たちが叫んだ。『なるほど、これは全く』と、名高い剽輕者で洒落の名人が口を挾む、『うむ、全くさうだ……ほんとにさうだ……そのその……その通り……その……歷とした相續人だ。』一同はどつと吹き出してしまつた。ネドピュースキンは暫

らくの間、この僥幸を信じようとはしなかつた。人々は遺言狀を見せてやつた、――彼は顏を赧らめ、眼を半ば瞑ぢて、兩手を振つて、はらはらと涙を流して泣き出した。一同の笑ひ聲は忽ちにがやがやと激しい怒號に變つた。ベズセレンヂェフカの村は全部で二十二人の農奴から成り立つてゐたので、誰一人としてそんなに惜しいとは思はなかつた。それならば何うしてこの際、面白がらずにゐられようか？　ペテルブルグ生れの唯一人の相續人で、希臘風の鼻と極めて上品な顏付をしたロスチスラフ・アダームィチ・シュトッペリといふ嚴めしい男だけは我慢がならず、ネドピュースキンのところへ横歩きに寄つて行つて、横柄に彼を見おろした。『貴殿、貴殿は拙者の見たるところでは』と輕蔑したやうに、人を食つたやうに言ひ出した、『貴殿はフョードル・フョードルキッチ殿のところにて氣晴らしの、つまり家僕の役をお勤めになつたのでありませうな？』ペテルブルグ生れの紳士は我慢がならないほど明瞭な、威勢のいい儿帳面な言葉でかういつた。ネドピュースキンは調子が狂つて興奮してゐたので、自分の見も知らない紳士の言葉など耳に入らなかつた。しかし他の連中は一時にひつそりしてしまつた。例の剽輕者が尤もらしく微笑んでゐる。シュトッペル氏は手を摩つて前の質問を繰り返した。ネドピュースキンはどきまぎして眼をあげ、口をあいた。ロスチスラフ・アダームィチは毒ありげに極く靜いた。『おめ

でたう、貴方、おめでたう、』と、彼は續けた、『なるほど、誰だつて、その、こんなことをして日毎の糧を、か・か・か・かせがうとは思ふまいからね、然し de gustibus non est disputandum（趣味のことは兎や角いふもんぢやない。）つまり誰でもそれぞれの趣味といふものがあるんだから……さうぢやないかね？』

誰か後ろの方にゐたのが、早口に、しかも恭々しく、驚ろき且つ狂喜して、高い聲で讃めたたへた。

『一體、』と、シュトッペリ氏は連中全部の笑ひ聲にぐつと乘り氣になつて口を出した、『どんな特別な腕前があつて、こんな好い運にめぐり合はしたんだね？　いや、恥づかしがらなくてもいい、言つてごらんよ、ここにゐるものはみんな、言はば身内の、en famille（内の）ものなんだから。ねえ、諸君、ここにゐる者は en famille（内の）ものぢやありませんか？』

ロスチスラフ・アダームィチが偶然にこの質問の矢を向けた相續人はあいにく佛蘭西語を知らなかつたので、贊成の意を表する微かな唸り聲を出したばかりであつた。そのかはり、も一人の相續人で、額に黃いろい斑點のある若者は急いで、『ああ、ああ、さうですとも。』と、調子を合はせた。

『多分、』とシュトッペリ氏はまた言ひ出した、『貴方は足を、その、天井へ向けて、逆立ちして歩けるでせうね？』

ネドビュースキンは憂鬱さうにあたりを見まはした――顔といふ顔には惡意のある笑ひが浮かんで、眼は悉く嬉し涙に濡れてゐた。

『それから多分、貴方は雄鷄のやうに鬨をつくれるでせうね？』

あたりの人がどつと一度に吹き出したが、直ぐにひつそりして固唾をのんだ。

『それから多分、鼻のさきで……』

『止せ！』と、いきなり鋭い甲高い聲がロスチスラフ・アダームィチを遮つた、『弱い者をいぢめて恥づかしくはないのか！』

誰もが振りかへる。戸口のところにチェルトプハーノフが立つてゐた。亡くなつた一手販賣人の四等親の甥にあたるといふので、彼もまた親族會議の招待狀を受けたのであつた。遺言狀を讀む間は、いつもの通り傲然とかまへて一座の中に加はらなかつた。

『止せ！』と、ぐつと反り身になつて、また言つた。

シュトッペリ氏は急に振り返つて見ると、薄ぎたない、見すぼらしい身なりをした男だつたので、小聲で隣りにゐた人に訊いた（要心深いことは何時も邪魔にはならないもので

ある）、

『あれは誰ですか？』

『チェルトプハーフといつて、大した鳥ぢやありません。』と、訊かれた方が耳打ちした。

ロスチスラフ・アダームィチは横柄な風をした。

『それより、餘計な指し圖をする貴方は誰です？』と、彼は鼻にかかつた聲でいつて、眼を細くした、『貴方はどんな鳥だか、一寸お伺ひしたい。』

チェルトプハーノフは火のついた火藥のやうに爆發した。憤怒のあまり息もとまつた。

『ヅ・ヅ・ヅ・ヅ、』と首でも緊められてゐるかのやうに言つたが、忽ち雷のやうな聲を出した、『誰だと？　誰だと？　俺はパンテレェ・チェルトプハーノフだ。親代々の貴族だ。五代前の先祖は天子様に仕へたんだ。さういふ貴樣こそ何者だ？』

ロスチスラフ・アダームィチは蒼くなつて、後ろに引き退がつた。彼はこんな反抗があらうとは思ひもかけなかつたのである。

『俺あ、鳥だ、俺あ、俺あ鳥だ！……おお、おお、おお！……』

チェルトプハーノフは激しく前へ進んで來た。シュトッペリはひどくまごついて、跳び退いた。お客たちは憤激してゐる地主のところへどつと押しかけた。

『決闘だ、決闘だ、ハンカチだけの距離を置いて決闘だ！』と、激怒したパンテレェは喚き立てた。『それが厭やなら、俺にあやまれ、それから彼にも……』

『あやまんなさい、あやまんなさい、』と、シュトッペリの周圍に驚ろいてゐた相續人達が、もぐもぐ言ひ出した、『あれはあんな狂人だから——惡くすると斬り殺さないとも限らない。』

『濟みませんでした、濟みませんでした、つい存じませんしたので、』と、シュトッペリが口ごもりながら言ひ出した、『つい存じませんで……』

『彼にもあやまれ！』と、腹の蟲の收まらないパンテレェが嗾鳴り立てる。

『あなたにも濟みませんでした。』と、ロスチスラフ・アダームィチは、熱病にでもかかつてゐるかのやうに慄へてゐるネドビューシキンの方を向いて附け足した。

チェルトプハーノフは落ち着いて、チホン・イワーヌィチのところへ近づき、彼の手をとつて、きつとあたりを見まはしたが、誰一人として彼に眼を合はせる者がないので、重々しく、深い沈默の中を部屋の外に出た、正當に手に入れたベズセレンヂェフカの新しい持主と手を携へて。

その日からといふもの、二人は決してまたと離れなかつた。（ベズセレンヂェフカの村

はベズソノヲからたつた八露里しか離れてゐなかつた）。ネドビュースキンの限りもない感謝の念は、やがて奴隷のやうな敬虔な氣持にかはつて行つた。弱い、素直な、相當に正直なチホンは、物に動ぜぬ清廉潔白なパンテレェの前に平身低頭した。『容易なことぢやなからう！』と、時をりは獨りで考へる、『知事樣とお話をしたり、まともに見るなんて……全く大變なことだ、——それがパンテレェには見られるんだからなあ！』

彼は不思議なほど、心が疲れるほどパンテレェに驚嘆し、彼を世に稀れな、聰明な、博學の士だと思つてゐた。たとひチェルトプハーノフの教育がどんなにお粗末であつたにしろ、しかも猶ほチホンの教育に較べたら、素晴らしく見える筈であつた。チェルトプハーノフは實際に露西亞語で書いたものも少しは讀んだ、佛蘭西語も知つてはゐた、尤も嘗つて瑞西生れの家庭教師の『Vous parlez français, Monsieur?（あなたは佛蘭西語をお話しなさいますか？）』といふ質問に答へて、『私（ジェ）、わかりません』と言つて、しばらく考へてから『pa（ぱ）ねえ』と言ひ足したほど拙いものではあつた。が、兎にも角にも、甚だ機智に富んだ作者ヴォルテールがこの世にゐたといふことや、普魯西のフリードリッヒ大王が戰場に臨んでも偉かつたことを覺えてゐた。露西亞の作家ではデルジャーヴィン*を崇拜し、またマルリンスキイ**を愛して、最も優秀な牡犬にアムマラット・ベックといふ名をつけてやつた位であつた……。

この二人の味方に會つてから數日して、私はベスソノヲ村のパンテレェ・エレミキッチのところへ出かけて行つた。遠くから彼の小さい家が見える。その家は樹木もないところで、村から半露里ほど距たつた所謂「山の手」に、恰も田園に下りた兀鷹のやうに立つてゐる。チェルトプハーノフの屋敷といつては大きさの違つた古い四軒のあばら家があるだけで、傍屋（フリーゲル）と厩と物置と風呂場だけであつた。どの家も離れ離れになつてゐて、まはりに垣もなければ、門も見えなかつた。私の馭者はどこへ馬をつけてよいのか分からないままに、半ば腐（＊＊＊＊）つて、塵に塞がれた井戸端に馬を停めた。物置のわきには痩せた毛むくぢやらの獵犬（ボルゾイ）が何匹か、斃れた馬を食ひ裂いてゐる。恐らくはオルバッサンであらう。獵犬の一匹が血のついた鼻面をあげて、せわしなげに吠えついたが、また露はになつた肋骨（あばら）に嚙りついた。馬のわきには年ごろ十七くらゐの、ふくれた黄色い顏をした少年が哥薩克のやうな着物を着て、足をむき出しにして立つてゐる。少年は自分の預かつた犬を、尤もらしく見まもつて、時をり最も食ひしんぼうの犬に鞭をくれてゐる。

『旦那さんは在宅（おうち）かね？』と、私は訊いた。

『どうだか知んねえ！』と、少年が答へる、『戸をたたいて見らつせ。』

私は馬車から跳び下りて、傍屋（フリーゲル）の上り段の方へ行つた。

チェルトプハーノフの住居（すまひ）は極めて物さびしい光景を呈してゐた。丸太は黑くなり、前へ「腹」を突き出してゐる。煙突は崩れ落ち、家の隅々は濕つて腐つて搖れてゐる。くすんだ青灰色の小窓が、むくれかへつて垂れ下がつてゐる屋根のかげから、言ふに言はれぬ苦々しい樣子をして覗いてゐる。年とつた夜鷹なんかが、こんな眼付をしてゐるものだ。私は戸を敲いた。誰も返事をする者がない。が、戸のむかうで鋭い聲で物をいつてゐるのが聞こえる、

＊＊＊＊＊『あか、いと、うた、おい馬鹿、』と嗄れた聲で言つてゐる、『あか、いと、うた、えだ、……さうぢやない！　えだ、おほかみ、かがみ！　かがみ！……さあ、こら馬鹿！』

私はもう一度、戸を敲いた。

すると同じ聲が叫んだ、『おはいり、――どなた……』

私は何もない小さな玄關へ入つた、開け放した扉の向うにチェルトプハーノフその人の

＊ デルジャーヴィン……エカテリナ女皇朝の最も代表的な抒情詩人（一七四三―一八一六）

＊＊ マルリンスキイ……浪曼派の大衆作家で嘗てはプゥシキンよりも有名であつた。（一七九七―一八三七）（譯者註）

＊＊＊ マルリンスキイの代表作「アムマラットベック」の主人公。（譯者註）

＊＊＊＊ 露西亞の田舍の井戸側は多くは木造である。（譯者註）

＊＊＊＊＊ これはアルファベットの順に、その字が上についた簡單な言葉を擧げて犬を訓練するところである。（譯者註）

姿が見える。脂じみた麻屑織の寢卷を着て、ゆるいだぶだぶのズボンを穿き、赤い頭巾をかぶつて椅子に腰かけ、片手で幼い尨犬の鼻面を締めつけ、片方の手には一きれの麵包を鼻の眞上に差し出してゐる。

『ああ！』と、彼は席から起たずに、威嚴を保つていつた、『よくおいで下さいました。さあ、何卒お掛け下さい。いま私はヴェンゾルの奴にかかつてますんで……チホン・イワーヌィチ』と、一段と聲を高めて附け足した、『こつちへ來てくれ。お客さんがいらしつたんだ。』

『只今、只今、』と、隣りの部屋からチホン・イワーヌィチが答へる、『マーシャさん、ネクタイを出して下さい。』

チェルトプハーノフは再びヴェンゾルの方を向いて、鼻の上に麵包きれを載せた。私はあたりを見廻した。部屋の中には長さの不揃な十三本脚の伸縮自在な反つた卓子が一つと、壓し潰された四つの麥稈製の椅子のほかには、部屋の道具は一つもなかつた。昔々、白く塗られてゐた壁も、星模樣の點々を散らして、あちこち剝げ落ちてゐる。窓と窓との間にはマホガニー擬ひの大きな木の枠に入れられて、鏬の入つた曇つた鏡がかかつてゐる。部屋の隅には煙管と鐵砲が立てかけてあり、天井からは太い黑い蜘蛛の糸が下がつてゐる。

『あか、いと、うた、えだ、おほかみ、』とチェルトプハーノフはゆつくり言つたが、いきなり猛烈に吹鳴りつけた、『かがみ！　かがみ！　かがみ！……ええ、この間抜け奴！……かがみだ！』

然し、運の惡い尨犬はただ慄へるばかりで、口を開けようとはしなかつた。尨犬は痛々しげに尻尾を下へ押しつけて坐つてゐた。また鼻面に皺をよせて、がつかりしたやうに眼をしばたたいては細くしてゐた。『いかにも御意の通りで！』と、獨り言をいつてゐるかのやうに見える。

『さあ、食べな、そら、取れ！』と、蟲の收まらない主人が繰り返した。

『怯えてるんですよ。』と、私は口を入れた。

『それぢや、逐つ拂つちまひませう！』

彼は犬を足で突いた。犬は可哀さうにそつと起きあがつて、鼻の麵麭きれを振り落して、瓜立ちして行くかのやうに、ひどく悄氣かへつて玄關の方へ行つてしまつた。悄氣かへるのも無理はない、初めて見知らぬ人がやつて來たのに、その人の前でこんな目に遭はされるのだから。

次の部屋へ通ふ扉が愼ましやかに軋つたかと思ふと、ネドビュースキン氏が入つて來た、

愛想よく挨拶をし、微笑みながら。
私は立ちあがつて、お辭儀をした。
『どうぞその儘で、その儘どうぞ。』と、彼は口ごもりながら言ふ。
二人は腰をおろした。チェルトプハーノフは隣りの部屋へ出て行つた。
『貴方はよほど前に私どもの在所へおいでになつたんで御座いますか?』と、ネドビュースキンは愼ましやかに手をかざして咳をし、それから禮儀を重んじて唇に指をあてながら、やさしい聲で言ひ出した。
『先月やつて來たんです。』
『ああ、さうで御座いますか。』
私たちは暫らく默つてゐた。
『この節はまことによい日和が續きまして、』と、ネドビュースキンは盛りかへした、そして何だか天氣がよいのは私のお蔭でもあるかのやうに、有難さうに私を見た、『どうも、作物は素晴らしい出來のやうですよ。』
私はいかにもさうだといふ印しに、頷いた。二人は一寸また默つてゐた。
『パンテレェ・エレミキッチさんは昨日、野兎(のうさぎ)を二匹おとりになりましてね、』と、ネド

ビュースキンはやつとのことで言ひ出した。まさしく話を引き立たせたいと願つてゐるのである、『いや全くで御座いますよ、とても大きな野兎で御座いましたよ。』
『チェルトプハーノフさんは良い犬をお持ちですか?』
『ほんとに素晴らしいのをお持ちで御座いますよ!』と、ネドビュースキンは喜んで返事をする、『まづ縣下第一でございませうな。(彼は私の方へ乘り出して來た)。それはさうと、どうでせう! パンテレェ・エレミキッチさんは、それあ偉いお方でございますよ! 何でもお望みにさへなれば、つまり何でもやらうといふおつもりになれば、立ちどころに、もう用意が出來て、何でもまあ、捗るんでございますよ。パンテレェ・エレミキッチさんは、それはもう……』
チェルトプハーノフが部屋に入つて來た。ネドビュースキンはにつこりして、口をつぐみ、「御自身で見たら、はつきりお分かりになります、」とでもいひたげに、彼を見よと眼で合圖をした。私たちは獵の話に耽つた。
『いかがでせう、私んところの犬を御覽に入れたいんですが?』と、チェルトプハーノフは私に訊ねたが、返事も待たずに、カルプを呼んだ。
空色の襟に定紋入りの釦のついた綠いろの南京木綿の上衣(カフタン)を着て、頑丈な若者が入つて

來た。

『フォームカにさう言へ、』と、ぶつきら棒にチェルトプハーノフがいふ、『アムマラットとサイガを連れて來いつて、きちんとさしてな、わかつたかえ？』

カルプは大口をあいて薄笑ひをして、譯のわからないことをいつて出て行つた。フォームカがやつて來た。髪を綺麗に撫でつけ、釦をしつかり懸けて、長靴を穿いて、犬を連れて來た。私は禮儀を重んじてこの馬鹿な獣たちを賞めてやつた。（獵犬といふものは、どれもこれも極めて馬鹿なものである）。チェルトプハーノフはアムマラットの鼻面へまともに唾をかけてやつた、ところが、犬にはいささかの滿足も與へなかつたらしい。ネドピュースキンもまたアムマラットを後ろから撫でてやつた。私たちは又もや話に耽つた。話をするうちにチェルトプハーノフも全く打ちとけて來て、もう威張つたり、鼻息を荒くしたりはしなくなつた、顏の表情が一變した。彼は私をちらと見、またネドピュースキンを見た……。

『おや！』と彼は不意に大きな聲を出した、『何だつて彼女は獨りであつちにゐるんだ？マァシャえー・あ、マァシャ！　こつちへ來なよ。』

誰かが隣りの部屋で動くけはひがする。しかし返事はない。

『マァシャ、』と、チェルトプハーノフが言葉やさしく繰り返す、『こつちへ來なよ。何でもないから大丈夫だよ。』

扉が靜かに開いて、見ると背の高い、すらりとして、ジプシイらしい淺黑い顏をし、黃褐色の眼に、樹脂のやうに黑い下げ髪をした二十歳ばかりの女が入つて來た。大きな白い齒は厚い眞赤な唇のかげに輝やいてゐる。女は眞白な着物を着てゐる。襟もとで金色のピンに留められてゐる空色のショールが、かばそい生粹のジプシイらしい綺麗な手を半ば蔽つてゐる。女は未開の女のやうに、おづおづと、きまり惡さうに二歩ばかり歩いて、立ちどまつて下を向いた。

『さあ、紹介しよう、』と、パンテレェ・エレミキッチが言ふ、『これは妻といふんでもないんですが、妻同樣に見ていただきませう。』

マァシャは仄かに顏を赧らめて、困つたやうに微笑んだ。私は能きるだけ低く頭を下げた。私はひどく氣に入つてしまつた。大きな半ば透きとほるやうな小鼻に花車な、鷲のやうな鼻、秀でた眉の勇ましさうな形、蒼白い、ほんの微かに落ち込んだ頰――すべてこれらの顏の貌は、我儘な情熱と、向う見ずな剛膽な氣持を表はしてゐる。結はへた下げ髪の下から、廣い頸筋に、細く艶々しい後れ毛が二すぢ、紡ぎ絲のやうに生え下がつて、――

情慾と力を思はせる。

女は窓ぎはへ行つて、腰を下ろした。私はこれ以上、どぎまぎさせたくはなかつたので、チェルトプハーノフと話をしだした。マァシャはそつと首を振り向けて、偷むやうに、打ちとけずに、すばやく胡散くさげに私を見はじめた。女の眸は蛇の舌のやうにちらちらする。ネドビュースキンはその傍に坐つて、何か耳打ちをした。女はまた微笑んだ。微笑みながら、女はいくらか鼻に皺をよせて、上唇を少し上げたが、さうすると猫ともつかない、獅子ともつかない顔付になつた……

「ああ、『手を觸れるべからず』だ、』と、今度はこちらから、しなやかな體つき、逞んだ胸、素早い角しい身振を偸み見しながら考へた。

『さあ、どうだ、マァシャ、』と、チェルトプハーノフが訊ねる、『何か、お客様に御馳走しなきや、なるまいぢやないか、え?』

『ジャムがありましたよ。』と、女は答へる。

『それぢや、ジャムを持つて來な。それからついでに火酒も。それに、いいかえ、マァシャ、』と、後ろから大聲で呼びかける、『ギタアも持つといで。』

『ギタアを何うして? あたし、歌ひませんよ。』

『なんで?』

『歌ひたかないんですもの。』

『え、つまらんことを、いざとなりや、歌ひたくなるくせに……』

『何ですつて?』と、マァシャは急に眉を寄せながら問ひ返した。

『頼まれた時にはさ。』と、いささか間誤ついてチェルトプハーノフがいふ。

『ああ、さうなの!』

女は出て行つたが、間もなくジャムと火酒(ウォトカ)とを持つて戻つて來て、やがてまた窓ぎはに坐る。額にはまだ小さい皺が見えてゐて、兩方の眉は胡蜂の觸角(ひげ)のやうに上がつたり下がつたりしてゐる……。讀者諸君、諸君は胡蜂がどんなに意地の惡い顔をしてゐるか、見たことがあるでせうか? ところで、私は考へた、これは一夕立(ひと)やつて來るわい、と。話がだれて來た。ネドビュースキンは全く口を噤んで、わざとらしい微笑みをうかべてゐる。チェルトプハーノフは息をはずませ、眞赤になつて、眼を見開いてゐる、私はもう暇乞ひをしようと思つてゐた……。すると、マァシャが不意に立ちあがつて、いきなり窓をあけ、頭をつき出して、通りがかりの百姓女を憤然として『アタシニヤ!』と大聲に呼びかけた。百姓女はびつくりして、振り向かうとするはずみに滑つて、どつかと地べたに倒れた。マ

ァシャは反りかへつて、聲を立てて大笑ひをする。チェルトプハーノフもまた大笑ひをする。ネドビュースキンは狂喜のあまり金切聲を出しかける。私たちはみんな身慄ひした。電光一閃にして夕立は過ぎる……、空氣はまた清涼となる。

それから半時間ばかりは夢中であつた。私たちは子供のやうに喋つたり、ふざけたりした。マァシャはその中でも一番はしやいでゐた。チェルトプハーノフは寸時もマァシャから眼を離さない。マァシャの顏はいよいよ蒼ざめ、鼻の孔は大きくなり、眸は光りを增し、同時に黑ずんで來た。未開の女が遊び戯れてゐるのだ。ネドビュースキンは肥つた短い足で雄鴨が雌鴨を追ひかけるやうに、女の尻を跛をひきひき追つてゐる。ヴェンゾルさへも玄關の屋臺の下から這ひ出して來て、闔の上に立つて、私たちの方を見てゐたが、急に跳りあがつて吠え出した。マァシャは次の部屋へ飛び込んで、ギタアを持つて來ると、ショールをかなぐり捨てて、そそくさと腰を下ろし、頭をあげて、ジプシイの唄をうたひ出した。聲は上の方が鰐われた硝子の鈴のやうに響き、ふるへる。高く激したかと思ふと、微かに消える……。心は樂しく、また氣味わるくもなつて來る。『アイ・ジギ・ガヴァリィ！』*……。チェルトプハーノフは踊りに耽る。ネドビュースキンは足踏みしたり、調子をとつて前に後に足を出す……。マァシャは火にくべた白樺の皮のやうに、すつかり身體

を曲げてゐる。しなやかな指はギタアのうへを速かに掠め、淺黑い咽喉はゆつくりと二重に卷きつけた琥珀の頸飾の下に高まる。かと見れば忽ちに歌をやめて、ぐつたりし、厭やらしさうに絃を抓る。チェルトプハーノフは立ちどまつて、肩だけを動かしたり、一所でもじもじしたりしてゐる。ネドビュースキンはと見れば陶器の支那人形のやうに頭を振つてゐる。そのうちに再びマァシャは狂人のやうに身體をしやんと起こして、胸を張る。チェルトプハーフはまた、どつかと身をすくめたり、天井までも躍りあがつたり、獨樂のやうに廻つたりして、『早く！』と叫ぶ……

『早く、早く、早く！』と、早口にネドビュースキンが調子を合はせる。

その晩おそく私はベスソノヲを立つた……。

＊ 字義通りにいへば「ああ、燃やせ、告らせ！」であるが、これはジプシイの歌の調子をとる言葉である。（譯者註）

チェルトプハーノフの最後

1

私が訪れてから二年ほど經つて、パンテレェ・エレミキッチに災難が――まぎれもなく災難が始まつた。不如意、失敗、さては不運さへも、これ迄に幾度か身にふりかかつては來た。しかしこれらに一顧だもせずに、彼は相變らず、「帝王のやうに嚴然とかまへて來た」のであつた。然るに今、彼の心を打つた最初の災難は、彼にとつては最も身にこたへるものであつた。マァシャが彼を見捨てたのである。

あれほど見たところは良く慣れてゐたこの軒の下を、何が彼女に見捨てる氣にならせたかといふことは――言ひにくい。チェルトプハーノフは最後の日までヤッフといふ綽名の

近所の若い退役の鎗騎兵大尉がマァシャの氣變りの原因だと堅く思ひ込んでゐた。パンテレェ・エレミキッチにいはせると、この男は絶えず口髭を撚つたり、無暗矢鱈にポマードをつけたり、仔細ありげに馬鹿笑ひをしたりすること位で、マァシャの氣を引いたのだといふ、然しながら、ここでは寧ろマァシャの血管に流れてゐる放浪性のジプシイの血が更に與つて力があつたと考へなければならない。それはさて置き、よく晴れた夏の夕べ、マァシャは少しばかりの身のまはりの物を小さな一包にくるんで、チェルトプハーノフの家を出て行つてしまつた。

この事がある前、三日ばかりといふもの、マァシャは部屋の隅に坐つて、負傷の狐のやうに小さくなつて壁にぴつたり身をつけてゐた——ただ絶えず眼を輕く動かしたり、物思ひに沈んだり、眉をぴくぴくと動かしたり、かすかに齒をむき出したり、我が身を隱すかのやうに兩の手を動かしたりしてゐた。こんな「氣分」になることは前にもあつたことであるが、決して永續きはしなかつた。チェルトプハーノフはそれをよく知つてゐた——だからこそ自分でも氣にもかけず、女に對しても、どうのかうのとは言はなかつたのである。

ところが、家の獵犬番の言葉によると、最後の二匹の獵犬が「くたばつた」といふ犬小屋から歸つて來ると、ばつたり女中に會つた。女中はふるへ聲でマリヤ・アキンフィエヴナ

様が旦那様によろしく申してくれ、どうぞ御機嫌よくお暮らしなさいますやう、私はもう歸つて來ませんからと申してくれと言ひ殘して行つたことを注進に及んだ。チェルトプハーノフはその場で二度ほどもぐるりと廻つて、嗄れた唸り聲をあげたかと思ふと、直ぐに駈落ちした女のあとを追ひかけた——序でにピストルを引つつかんで行つた。

彼は自分の家から二露里ほどして、郡役所のある町へ通ふ國道の、白樺の林のわきで追ひついた。折しも陽は地平線のうへに低くかかつて、あたり一面がぱつと華やかな眞紅の光りに包まれた、——樹も、草も地面も一樣に。

『ヤッフん所へだな！　ヤッフん所へ！』と、チェルトプハーノフはマァシャの影を見つけるや否や唸き立てた、『ヤッフん所へだな！』と、マァシャの傍へ駈けつけながら、殆んど一足ごとによろめきながら繰り返した。

マァシャは立ちどまつて、振りかへつて彼と向き合つた。彼女は光りを背にして立つてゐるので、黑い木で彫刻されたもののやうに、全體が眞黑に見える。ただ兩方の白晴ばかりが銀色の扁桃の核のやうに浮き出してゐる。けれども眼そのもの——瞳——は前よりは一そう濃くなつて來た。

マァシャは小さな包をわきの方へ投り出して、腕を組んだ。

『ヤッフん所へ行くんだな、この蓮つ葉め！』と、繰り返して、チェルトプハーノフは女の肩をつかまへようとした――ところが眼を見合はせると、怖ぢ氣づいて、そのまま立ちすくんでしまつた。

『ヤッフ様の所へなんか行きませんよ、パンテレェ・エレミキッチさん、』と、マァシャは落ちついて靜かに答へる、『ただ貴方とはもう一緒にゐられないといふだけですよ。』

『どうして一緒にゐられないんだ？　何故なんだ？　俺が何か氣に障ることでもしたといふのか？』

マァシャは頭を振つた。『氣に障るなんて、そんな事ないわ、パンテレェ・エレミキッチさん、あたし、貴方んとこにゐて退屈しちやつたの……、今までのことにはお禮を申しますわ、あたし、どうしても居られないの――どうしても！』

チェルトプハーノフはびつくりした。彼は手で腿を叩きさへもして、跳びあがつた。

『一體、これはどうしたつていふんだ？　今まで一緒に暮らしてゐて、何の不足も苦勞もなしにゐたものが、急に今さら「氣がふさぐ」の、「お前を棄てる」のと。自分勝手なことをして、手帕（ハンカチ）をかぶつて――行つてしまふ。奥様も同然に、みんなから奉られてゐたくせに……』

『そんなこと、ちつとも、して貰ひたかないわ。』と、マァシャが口を挾んだ。

『どうして、して貰ひたかないんだ？　宿なしのジプシイから奥様になり上がつて――さうだ、それでも、して貰ひたかないんだな？　どうしてさう思はないんだ、この下司の奴？　そんなことを俺が本氣にすると思ふのか？　さては裏切りをしようといふんだな、裏切り！』

彼はまた顔をしかめた。

『裏切りなんて、そんなこと考へてやしないわ、これ迄だつて、』と、マァシャははつきりした聲できつぱりいふ、『あたし、もう言つたぢやないの、退屈で仕様がなかつたんだつて。』

『マァシャ！』とチェルトプハーノフは叫んで、自分の胸を握り拳でなぐりつけた、『さあ、止せ、もう澤山だ、いい加減にいぢめやがつて……さあ、もう結構だ！　ほんとに！だがな、チーシャ*が何ていふか考へて見い。少しはあれのことを思つてやつても惡くはあるまい！』

『チホン・イワーヌィチさんへ宜しく、それからかう仰つてやつて下さいな……』

＊　チーシャ……チホンの愛稱。（譯者註）

チェルトプハーノフは手を振りあげた、『いや、馬鹿なこと言ふな、行くんぢやない！ヤッフの野郎は待つちやゐないぞ！』

『ヤッフ様は、』と、マァシャは言ひかける……

『あれが何でヤッフさ・まなんだ、』と、チェルトプハーノフは口眞似をする、『彼奴は實際、ひどい詐欺師だ、ずるい奴だ――おまけに彼奴のしやつ面は猿みたいだ！』

まる半時間もチェルトプハーノフはマァシャと押問答してゐた。彼はマァシャのそばへ寄り添つたり、離れたり、女に手を振りあげたり、女に恭々しく頭を下げたり、泣いたり、罵つたりしたり した……。『駄目です、』と、マァシャは繰り返した、『あたし、ほんとに悲しくて……退屈で仕様がないの。』だんだんと女の顏は氣が抜けたやうな、殆んど寢ぼけたやうな表情になつて來たので、チェルトプハーノフは曼陀羅花でも飲まされたのかと訊いたほどであつた。

『退屈なの、』と、マァシャは十遍も繰り返した。

『そんなら俺が殺してやつたらどうだ？』と、彼は不意に叫んで、ピストルをポケットの中から引き出した。

マァシャは微笑んだ、その顏は生々して來た。

『いいぢやないの？　殺して頂戴、パンテレェ・エレミキッチさん、貴方の御隨意に。けど、あたし決して歸りませんわ。』

『歸らないつて？』と、チェルトプハーノフは撃鐵を上げた。

『歸りませんよ、あなた。生きてるうちは、どうしても歸らないわ。一旦さう言つたら、どうしてもさうなの。』

チェルトプハーノフはいきなり女にピストルを摑ませて、自分は地べたに、どつかと腰を下ろした。

『さあ、そんならお前が俺を殺せ！　お前がゐなけりや生きてる空はないんだ。俺はお前に厭やがられるし、――俺はまた世の中のものがみんな厭やになつて來た！』

マァシャは身をかがめて、小包を取り上げ、ピストルを草の上へ、銃口をチェルトプハーノフの方から除けて、彼のそばへ寄つて行つた。

『まあ、あなた、何をくよくよなさるんですの？　ジプシイの娘がどんなものか御存じないんですか？　あたし達の氣質はこんなものなの、これが當り前なのよ。退屈つていふ奴が來て、仲を割いて、どこか遠い遠い知らないところへ魂を惹きつけてゐるのに、何處にぢつとして居れますの？　マァシャを覺えてて下さいな、こんないい仲好しは、もうあ

りはしませんよ。あたしだつて貴方を忘れやしないわ、ね、――だけど、二人暮らしはもうおしまひよ！』

『俺はお前を可愛がつてたんだ、マーシャ、』と、チェルトプハーノフは自分の顔を埋めてゐた指の中で呟やいた……

『私だつて好いてたわ、なつかしいパンテレェ・エレミキッさん！』

『俺はお前を可愛がつた。今でも無性に、夢中になつて愛してるんだ――。それだのにお前がかうして何のいはれ因縁もなく、正氣で俺を見棄てて置いて、浮世を流浪して歩くなんて――うむ、さうだ、それで思ひあたる、俺が若しも、こんなさもしい素寒貧でなかつたら、よもやお前は俺を見棄てやしなかつたらう！』

この言葉を聞いて、マァシャはただ薄笑ひをするばかりであつた。

『まあ、この人はあたしのことを、お金を何とも思はない女だつて、よつく言つてたのに！』と、女は言つて、チェルトプハーノフの肩を力いつぱい毆りつけた。

すると彼はひよつくり起き上がつた。

『だがまあ、せめて金だけでも取つてくれ、――こんなに一文なしで何うするんだ？だがそんなことよりや、俺を殺してくれ！　はつきり言ふけど、一思ひに殺してくれ！』

マァシャはまた頭を振つた。『あなたを殺すつて？　あたし、あなた、西伯利亞くんだりまで流されるなんて眞つ平ですよ。』

チェルトプハーノフは身慄ひした。『そんなら、ただそれだけで、流されるのが怖いから、やれないつていふんだな……』

彼はまた草の上に轉がつた。

マァシャは默々としてその傍に佇つてゐた、『あたし、貴方がお氣の毒で、パンテレェ・エレミキッチさん、』と、溜息まじりにいふ、『あなたは好い人なんだわ、……けど、あたし、どうにも仕様がないの、さよなら！』

女はくるりと傍を振り向いて二足ばかり歩き出した。夜は既に迫つて、ほの暗い影があたりに立ちこめてゐた。チェルトプハーノフは大急ぎに起きあがつて、うしろからマァシャの兩肱をつかまへた。

『かうして、このまま行つてしまふのか、この毒蛇め！　ヤッフんとこへ！』

『さよなら！』とマァシャは心をこめて、鋭く繰り返して、男の手を逃れて歩き出した。

チェルトプハーノフは後ろ姿を見送つて、ピストルの置いてあつた處へ走りよつて、ピストルを引つ摑むや否や、狙ひを定めて、發射した……。しかし撃鐵（ひきがね）の彈機（バネ）に手をかける

前に、手が上に引きつつてしまつたので、彈丸はマァシャの頭のうへを唸り聲を立てて行つた。女は歩きながら、肩越しに彼を見たが、からかつてでもゐるやうに、からだを搖すぶりながら、どんどん歩いて行つた。

彼は顏をかくして、――まつしぐらに駈け出した……

しかしまだ五十歩も走らないうちに、急に釘づけにされたかのやうに、ぴたりと立ちどまつた。聞き馴れた、餘りにもよく聞き馴れた聲が聞こえて來た。マァシャが歌を歌つてゐたのである。『若き日、うるはし。』と、彼女は歌つてゐた。一つ一つの音が哀れにも、また情に燃えて、夕暮の空に流れる。チェルトプハーノフは耳を傾けた。聲はいよいよ遠ざかつて行く。消えたかと思ふと、また漂つて來る、やつと聞きわけられる程ではあるが、しかもなほ灼きつけるやうな熱情がこもつてゐた……。

『俺に逆らつてゐるんだ、』と、チェルトプハーノフは思つたが、そこでまた思ひ直して、『ああ、ちがふ！　あれは俺に永久のわかれを告げてゐるんだ。』と呻くやうにいつた――さうして涙をはらはらと流した。

*　*　*

翌くる日、彼はヤッフ氏の宿にあらはれた。ヤッフ氏は全く世間並の人で、田舍の獨り暮らしを厭つて、彼の言ひ草によると「能きるだけ御婦人がたに近いところにゐたい」といつて郡役所の在る町に住んでゐた。チェルトプハーノフはヤッフに會へなかつた。侍僕の話によると、彼は前の晩に莫斯科へ出立したとのことであつた。

『そんなら、それでいい！』と、チェルトプハーノフは憤然として叫んだ、『互に謀し合はしてゐたんだ、彼女は一緒に逃げやがつたんだ……が、今に見ろ！』

彼は侍僕の止めるのも聞かずに、若い騎兵大尉の居間へ躍り込んだ。居間の中には、安樂椅子の上の方に、鎗騎兵の制服を着た主人の油繪の肖像畫がかかつてゐる。『ああ、ここにゐやがる、尾無し猿！』と、大聲にどなりつけて、チェルトプハーノフは安樂椅子の上に跳びあがつた、――それから張りつめた畫布に拳骨を一つ喰らはして、大きな穴を開けてしまつた。

『馬鹿旦那にさう言へ、』と、彼は侍僕の方を振り向いた、『あいつの汚らしいしやつ面がゐない留守に、貴族のチェルトプハーノフ殿が繪に描いた方の面に穴をお開けになつたつて、若しまた腹癒せがしたかつたら、チェルトプハーノフ殿のおいでになるところは知つとる筈だつて！　知らなきや、俺の方からやつて來るわ！　海の底へ隱れたつて、猿の

畜生、さがし出して見せらあ！』

こんなことを言つて、チェルトプハーノフは安樂椅子から飛び下りて悠然と引きあげた。

ところが騎兵大尉のヤッフは何一つ腹癒せをしようとはしなかつた――彼は何處へ行つてもチェルトプハーノフに遭ひさへもしなかつた、こちらはこちらで敵をさがし出さうとも思はなかつたので、まるで話にはならなかつた。その後、マァシャ自身も全く行方不明になつてしまつた。チェルトプハーノフは酒をやり出してゐたが、それもまた「元にかへつた。」然しここに第二の災難が降りかかつて來た。

2

といふのは彼の莫逆の友、チホン・イワーヌィチ・ネドビュースキンが亡くなつたことである。亡くなる二年ほど前から、身體がほんとうでなくなつて來た。喘息を病み出して、絶えずぐうぐう寢入りこんで、さて、眼が覺めても、直きに正氣にはなれなかつた。郡の醫者は「中風」が來てゐると言つてゐた。マァシャの家出に先立つ三日の間、卽ちマァシャの「氣が鬱いでゐた」あの三日の間、ネドビュースキンは自分の村のベズセレンヂェフ

カに寢てゐた、彼はひどい風邪をひいたのである。だからマァシャの仕打ちは一そう思ひがけなく心を打つたのである。殆んどチェルトプハーノフその人よりも深くこの事に心を動かされたくらゐであつた。生れつき素直で、臆病であつたために、自分の友だちに對する優しい憐憫の情と、病的な疑惑の念とのほかには、何にも口に出して言はなかつた……しかし、彼の心にあつた何もかもが切れ切れに、今は力も失くなつてしまつたのである。『あれは私の魂をかきむしつてしまつた、』と、あの好きな油漆布の小さな安樂椅子に腰をかけて、自分の指を捻りながら呟やいた。チェルトプハーノフが元どほりになつた時でさへも、ネドビュースキンは元どほりにはなれずに、――「心の中が空虛」なのを感じつづけてゐた。『ここが』と、彼は胃の腑の上の胸の中程を指しながらよく言つてゐた。こんな工合で冬までぶらぶらしてゐた。霜の下りる頃になつて喘息は輕くなつたが、今度はそのかはりに中風も中風、正眞正銘の中風に見舞はれた。直ぐに意識を失つたのではないので、またチェルトプハーノフの見さかひもつき、この友達が『おい、どうしたんだい、チーシャ、俺の許しも受けずに俺を棄てるつもりか、マァシャのやうに？』と、絶望的に叫ぶ聲にさへも廻らない舌で返事をした、『けど、わしあ、パ……ア……セエ・エ……エ……キッチさん、つ……も……あんたの……いふこと……き……ます。』 さうはいつたもの

の、その同じ日に、郡の醫者の來るのも待たずに、たうとう亡くなつてしまつた。醫者はまだ冷たくなり切らない身體を見て、悲しくも諸行無常の感にうたれながら、ただ「鰈鮫の燻製を肴に火酒を一杯」欲しいといつただけであつた。かういふことにならうとは、豫て思はれてゐたことであるが、チホン・イワヌィチは自分の財産を最も尊敬すべき恩人であり、鷹揚な保護者であつた「パンテレェ・エレミキッチ・チェルトプハーノフ」に遺產として讓つた。しかしそれは最も尊敬すべき恩人には大した利益をもたらさなかつた。といふのは、忽ちにして公賣に附せられて、一部は墓じるしの彫像の費用に廻されたからである。この彫像はチェルトプハーノフが（父の氣ちがひ染みた性質が彼にも現はれたといふことが分かる！）友人の死灰のうへに建てようと考へついたものである。乃で、祈れる天使を表はすべきこの彫像は莫斯科へ註文された。ところが彼に紹介された仲介業者は田舍などに、彫刻に眼の利く者は滅多にあるものではないと獨りぎめして、天使のかはりにフロラの女神で、エカテリナ女王朝時代に出來た莫斯科近郊の庭園、今は見るかげもない或る廢園を永い間、飾つてゐたのを送つてよこした、――これについては充分いはれのあることで、この彫刻はロココ風で、肉付のよい小さな腕や、波をうつ捲髮、露はな胸のあたりの薔薇の花飾りや、しなやかに曲げた姿など、何といつても極めて巧妙には出來てゐ

るが、それが無代でこの仲介業者の手に入つたのである。こんな譯で、今に到るまで、この神話的な女神は、優美に片足をあげて、チホン・イワーヌィチの墓のうへに立つてゐる。そしていかにも氣どつた妙な身振りをして、いつもいつも村の墓場を訪れては、あたりをさまよひ歩く仔牛や羊の群れを見まもつてゐる。

3

親友を亡くしてから、チェルトプハーノフはまた酒をやり出した。今度はもう前よりはずつとひどかつた。すること、爲すことが、全く落ち目になつて行つた。獵をしようにも、やりやうがなく、無け無しの金は磨つてしまひ、後に殘つてゐた召使たちもちりぢりに逃げて行つてしまつた。パンテレェ・エレミキッチは全く孤獨になつて、自分の心を打ち明けるは愚か、ただ一言さへ交はす者もなくなつた。しかも傲慢な氣持ばかりは、少しも減らなかつた。それどころか、惡い狀態になればなるほど、彼はいよいよ横柄に、いよいよ尊大に、近づき難いものになつて行つた。彼は遂に全くの人嫌ひになつた。ただ一つの慰め、ただ一つの喜びだけが殘つてゐた。それはドン種の灰色のすばらしい乘馬で、彼がマ

レク・アデレといふ名をつけてゐたが、これは實に立派な代物であつた。

この馬が彼の手に入つた次第はかうである。

ある時のこと、チェルトプハーノフが馬に乘つて隣りの村を通つてゐると、居酒屋のあたりで百姓が寄つてたかつて、何か大聲に喚き立ててゐるのが聞こえて來た。群集の眞ん中で、絶えず頑丈な腕が全く一つところで、上がつたり下がつたりしてゐた。

『何事が起きたんだ?』と、チェルトプハーフは、持ち前の命令するやうな調子で、小舍の敷居のところに佇つてゐた百姓の婆さんに訊ねた。

婆さんは居眠りでもしてゐるかのやうに、入口の柱に倚りかかつて、居酒屋の方を時をり見てゐたのである。更紗の襯衣を着て、灰色の髪をしたいたづら小僧が、糸杉でつくつた十字架をむき出しの小さな胸にかけ、小さな兩足をひろげて坐つてゐるが、この子の固く握りしめた小さな拳は婆さんの樹の皮づくりのスリッパの間に置かれてゐる。そこには小さな雛つ子がライ麥の麵麭のかちかちになつた皮に孔をあけてゐる。

『知りましねえよ、あんた、』と婆さんが答へる、――それから前へ乘り出しながら、皺だらけの黝んだ手を男の子の頭にのせて、『何でも、こつちの若え衆が猶太人を打ん擲つてるんだつて。』

『どうして猶太人を? どんな猶太人だね?』

『そら知りましねえよ、あんた。どつかの猶太人がここらさ來たんですよ、どつから來たんだか、誰も知りますめえ。ワーシャ、この野郎、おつ母がとこへ行け、しつ、しつ、こん畜生!』

婆さんは雛つ子を追つ拂ふ、その間にワーシャは婆さんの手織のスカートにつかまつた。

『ほうら見さつせえ、打つとりますべえ、あんた。』

『何だつて叩くんだらう? 何かしたのかな?』

『そら知んねえ、あんた。きつと、それだけの事したんでしよ。それでなくたつて打つのが當り前でせうね? あいつが、あんた、基督さまを磔刑にしたんですかんね。』

チェルトプハーノフは大聲をあげて、馬の頸のあたりを太鞭で打つて、まつしぐらに群集の方へ駈け出した。そしてその中へ躍り込んで、その同じ太鞭で右に左に百姓どもを誰彼の見さかひもなしに擲り出した、聲も途切れ途切れに『向う……見ずだ! 向う……見……ずだぞ! 當然、お上の法律が罰するんだ、私事にする……ことぢや……ないんだ! 法律が! 法律が! お……き……てがだ!!』と、呶鳴りつけながら……。

二分間とも經たないうちに、群集は早くも四方八方に散り散りになる、――居酒屋の戸

口の前の地べたには、小さな痩せた、薄黒い顔の生物が南京木綿の上衣を着て、髪を振り亂され、苦しめられて、へとへとになつてゐるのが見える……蒼ざめた顔、ぎよろつく眼、開いた口……これは何だ？　恐怖のあまり氣絶したのか、それとも全く死んだのか？

『お前たちは何だつて猶太人を殺したんだ？』と、チェルトプハーノフは威しつけるやうに、太鞭を振り廻しながら、聲高く叫んだ。

群集は力なく唸りごゑをあげて、これに應じた。百姓の中には肩をつかむ者、脇腹をさする者、鼻のあたりを撫でる者がある。

『ずゐぶん見事に叩くなあ！』と、後の列でいつたものがある。

『猶太人をなぜ殺した？　と訊いてるんだ。涼しい顔をしてる外道もの奴！』と、チェルトプハーノフが繰り返した。

ところが、その時、地べたに寢てゐた生物がひよつこり跳び起きて、チェルトプハーノフの後ろへ馳け寄つて、わなわなと慄へながら鞍の端にすがりついた。

『生きてやがる！』といふ聲が、また後ろの列から聞こえて來た、『まるで猫だ！』

*『貴方様、庇つてやつて下せえ、お助けなすつて！』と、哀れな猶太人はぼんやり言つたが、その間、チェルトプハーノフの足に胸をすつかり押しつけてゐた、『さもなきゃ殺

されちやいます、殺されちやいます、貴方様！』

『お前は何だつて虐められるんだ？』チェルトプハーノフが訊ねる。

『それは全くわかりません！　何でも飼つてる鳥や獸が死にはじめたつて、……それで私を怪しむんでして、……けんど、私は全く……』

『まあ、そんなことは後でもいい！』と、チェルトプハーノフは遮つた、『それよりも、しつかり鞍につかまつて、おれの後をついて來るがいい！　それから貴様ら！』と、群集の方を向いて附け足した、『貴様ら俺を知つとるか？　俺は地主のチェルトプハーノフだ、ベスソノヲ村に住んでるんだ、――さあ、だから俺を相手取つて訴訟がしたけや、するがいいんだ、――それから序でに、猶太人の方も！』

『何だつて訴訟なんぞ致しませう？』と、髯の白い、落ち着いた、古代の長老そのままの百姓が最敬禮をしながら言つた、（かうは言ふものの猶太人を打つことにかけては、少しも他人にひけをとらなかつたのだ。）『私どもは、パンテレェ・エレミキッチ様、あなた様の御親切はよう存じて居ります、よい事をお教へいただきまして御禮の申しやうも御座いません！』

＊「貴方様」を「あねたしやま」、「全く」を「またく」、等々、これらは猶太人の訛りを示す。（譯者註）

『何だつて訴訟なんぞしますべえ！』と、他の連中も調子を合はせる、『けんど、あの外道奴、きつと思ひ通りにして見せる！　なあに、逃がすもんか！　原つぱの鬼みてえに、ちやんと見えるんだからな……』

チェルトプハーノフは髯を引つぱつて、鼻を鳴らし、――嘗てチホン・イワーヌィチを救ひ出してやつた時と同じ手口で、迫害者たちの手から救ひ出してやつた猶太人を引き連れ、悠々と自分の村へ引き上げた。

4

數日ののち、たつた一人チェルトプハーノフの家に殘つてゐた別當が、誰かが馬に乘つて來て、貴方に會つて話をしたいと言つてゐると取次いで來た。入口の階段に出て見ると、それは兼ねて見識りの猶太人であつた。立派なドン種の馬に乘つて、馬は庭の眞ん中に泰然と誇りかに立つてゐた。猶太人は帽子をかぶらずに小脇にかかへ、足を鐙そのものにはかけずに、鐙の革にかけてゐた。ぼろぼろになつた長い上衣の裾が鞍の兩側から垂れさがつてゐる。チェルトプハーノフを見ると、ちゆつと唇を鳴らして、兩肱を張り、足をゆす

ぶつた。しかしチェルトプハーノフは彼の挨拶に答へないばかりではなく、却つて憤慨してしまつた、そして見る見るうちに烈火のごとくになつた。疥癬かきの猶太人がわざわざこんな立派な馬に乘つて來るなんて、……何たる無禮ぞや！

『やい、エチオピヤの化け物め！　泥ん中へ突き落されるのが厭やなら、さつさと飛び下りろ！』と、彼は呶鳴つた。

猶太人は早速いはれた通りに、鞍から袋のやうに轉げ落ちた。それから片手で手綱を控へ、につこりして、お辭儀をしながらチェルトプハーノフのそばへ寄つて行つた。

『何の用があるんだ？』と、パンテレ・エレミキッチは鹿爪らしく訊ねる。

『あねたしやま、馬あ何んな馬だか、見ていただきたいんで御座いますよ。』

と、猶太人は相變らずお辭儀をしながら言ふ。

『ん……さう、……馬あ、いい馬だ。お前、どこから引つ張つて來た？　きつと、盜んで來たんだらう？』

『どうすて、そんなことが、あねたしやま！　わたしあ、正直な猶太人でございますで、盜んで來たんぢや御座りません。あねたしやまの爲に手に入れたんで御座いますんで、ほんとに！　隨分、そらあ骨を折りましたがの！　そのかはり、この馬と來ちや！　こんな

馬はドンの州中さがしたつて、又と見つかるもんぢやありましねえ！　まあ、御覽なしえまし、あねたしやま、何ちう馬で御座いませうかの！　さあ、何卒、こちらへ！　ほら……ほら……ぐるつと廻つて、わきから見て下され！　そいぢや鞍を取りませう。どうで御座いませう！　あねたしやま？』

『馬あ、いい馬だ、』と、チェルトプハーノフは平氣を粧ほつて繰り返したが、その胸は早鐘をうつてゐた。彼は既に人一倍に熱心な「駒」の愛好家だつたので、この馬を一目みると、良いか惡いか位は見わけがついたのである。

『で、あねたしやま、一つ撫でて御覽なせえ！　頰ぺたのあたり撫でて御覽なせえ、へ、へ、へ！　かういふ工合に。』

チェルトプハーノフは氣が進まないかのやうに、馬の頸のあたりに手をかけて、そこを二度ほど叩いて、それから指を鬐甲から背中の方へ移して行つた。やがて腎臓のうへの急所に來ると、その道の人らしく輕くそこを壓した。すると馬は忽ち脊骨を彎曲させて、それから人を食つたやうな黑い目で、チェルトプハーノフの方を流し目に振りかへりながら、鼻を鳴らして、前足を動かした。

猶太人は笑ひ出して、微かに手を拍いた。『御主人様を識つて居りますよ、あねたしやま、御主人様を！』

『さあ、つまらんことを言ふな』と、チェルトプハーノフは忌々しさうに遮つた、『この馬あ、貴様から買はうつたつて……金はなし、呉れるつたつて猶太人から物は貰ひたくないし、俺は神様が御自身で下さるつたつて、貰ひたかないんだ！』

『どうすて私がわざわざ御進物などを差し上げませうか、とんでもないことでさ！』と、猶太人は叫んだ、『お買ひ下せえまし、あねたしやま……錢あ、――お待ち申しますで。』

チェルトプハーノフは考へ込んだ。

『一體、いくらだと言ふんだ？』と、たうとう彼は呟やいた。

猶太人は肩をそびやかした。

『買値で宜しうございますで。二百留。』

馬は二倍くらゐの値はする――いや、ひよつとしたら言ひ値の三倍はするかも知れぬ。

チェルトプハーノフは傍を向いて、熱でもあるやうに欠伸をした。

『ところで金は……何時？』と、彼は無理に眉を顰めて、猶太人の方を見ないで訊ねた。

『何時でも、あねたしやまの御都合次第で。』

チェルトプハーノフは頭を後ろに反らしたが、眼は擧げなかつた。『それぢや返事にな

らん。はつきり言ふがいい、ヘロデの子孫め！　俺が貴様に借金してゐられるか、え？』
『へえ、そんなら申す上げます。』と、猶太人は急いで言ひ出した、『六ケ月の後に……宜しう御座りますかの？』
チェルトプハーノフは何とも返事をしなかつた。
猶太人はチェルトプハーノフの顏いろを讀まうとした。『宜しう御座りますかの？　彼奴を厩へ入れさして戴きませうかの？』
『俺は鞍は要らん。』と、チェルトプハーノフはぶつきら棒に言つた、『鞍を外せ、――いいかえ？』
『無論、無論、外します、外します、』と、悅に入つてゐる猶太人は口ごもつて、鞍を肩に背負つた。
『さて金は、』とチェルトプハーノフは念を押す……『六ケ月後に。しかも二百留ではなく、二百五十留やるぞ。默つてろ！　いいか、二百五十留だぞ！　よし、俺が借りた。』
チェルトプハーノフは矢張り眼を擧げる氣にはなれなかつた。今まで一度だつて、こんなにプライドを酷く傷けられたことはなかつた。「きつと進物のつもりなんだ。」と、腹の中で考へた、「御禮ごころで、引つ張つて來たんだ、この野郎は！」彼はこの猶太人を抱

擁してやりたいやうにも思つたが、また打ちのめしてやりたいやうな氣持にもなつた。
『あねたしやま、』と、猶太人は元氣づいて、お世辭笑ひをしながら言ひ出した、『露西亞流に裾から裾へお取り下さらにやなりませんの……。』
『もつと言つて見ろ。ヘブライ人のくせに……露西亞流にだと！……おい！　この野郎、馬を引いてつて、厩に追ひ込め。それから燕麥でも撒いてやれ。俺はいま行つて見るから。それから、いいかえ、名前はマレク・アデリだ！』
チェルトプハーノフは階段を登つて行かうとしたが、急に踵を返して、猶太人の方へ驅け寄つて、しつかと彼の手を握り緊めた。相手は身を屈めて、唇をさし出した――が、チェルトプハーノフは後ろに跳びのいて、聲低く『誰にも言ふな！』と囁やきながら、戸口の中へ消えて行つた。

5

その日からチェルトプハーノフの朝夕に、主なる仕事、主なる氣遣ひ、主なる喜びとなつたのはマレク・アデリであつた。その可愛がることといつたら、あのマァシャをすらそ

んなに愛しはしなかつたと思はれるほどで、ネドビュースキンを愛慕した以上に愛慕してゐた。またその馬といつたら！　火だ、たしかに火だ、何のことはない火藥だ――そして古代の貴族のやうに莊重なものだ！　どこへ引つ張つて行つても疲れを知らず、よく堪へて、素直で、養ふ費用なんかは知れたものだ。ほかに何もないとなると、足もとの土でも喜んで嚙むくらゐである。並足で行く時には、手に抱かれて行くやうだし、跑足の時には漣にゆられるやうな氣持がするし、飛んで走る時には風さへも追ひ付けない位！　絶えて喘ぐやうなことはない、といふのは通風口が澤山あるからである。足はまるで鋼鐵だ、何時か躓いたことがあるか知らと思ひ起しても、そんなことは一向にない！　壕だとか柵だとかを飛び越すのは、わけもないことだ。それに何といふ悧巧な奴であらう！　主人の聲を聞けば、頭を振り上げて駈け出す。若し、ぢつと佇つて居れと言つて、主人が傍を離れたとする――さうするともう身じろぎだにもしない。それがまた引き返して來たとなると、「私は此處にゐます。」とでも言ふやうに微かに嘶やきはじめる。それに何物をも怖れない、眞暗な闇の中にでも、吹雪の中にでも道を見つける、どんなことがあらうとも他人を傍へ寄せつけない、若し寄るものがあつたら嚙みつくであらう！　犬さへも決して寄りつかうとはしない、若し寄りつかうものなら、忽ち前足で犬の額を打ちのめし――それで、ぱつ

たり息絶える。覇氣のある馬だ、だから鞭なんぞは體裁として振ればよいのだ、飛んでもないことだ、この馬に觸るなどといふことは！　いや、もう長々と話すには及ぶまい――全くの寶物だ、馬ではない！

チェルトプハーノフはマレク・アデリのことを潤飾して言はうとしても、さて何といつたらよいのか分からなかつた。それに如何ばかり愛撫し、いとほしがつたことであらう！　毛は銀色に――それも古いのではなくて、新しく、冴えない光澤をもつた銀色――に輝やいてゐた。毛並を掌で撫でてやらうものなら、それこそ天鵞絨のやうだ！　鞍も、鞍褥も、轡も――ありとあらゆる輓具が全くしつくりと合はされて、きちんとしてゐて、拭き清められ、まるで繪に描いたやうだ！　チェルトプハーノフは――多くを言ふ必要もあるまいが、――手づから愛馬の額毛を編んでやつたり、鬣や尻尾を麥酒で洗つてやつたり、蹄にさへも一度ならず軟膏を塗つてやつた……

よくマレク・アデリに跨がつて、出かけて行く――近所の人たちのところを廻るのではない、――彼は相變らず彼等を避けてゐた――さうして彼等の畑を通り、屋敷を過ぎて……。遠くから、馬鹿どもに賞めて貰はうといふのだ！　ところが、何處かに獵でもあるとか、富裕な地主が人里はなれた野原で獵をする企てをしてゐるとかいふことを聞きつける

と、彼は早速、出かけて行つて、はるか遠くの地平線のうへを、まつしぐらに駈けさせて、美しいのと速いのとで、觀る人をして悉く驚かしめ、しかも誰一人として傍へは寄せつけぬ。ある時、さる獵好きな地主が從者を一人殘らず引きつれて後を追ひかけたが、やはりチェルトプハーノフは遠くへ行つてしまふのを見て、彼はあらん限りの力を出して、全速力で飛ばしながら、後から呼びかけた、『おうい、君！　いいか！　君の好きなものとその馬を交換してくれ！　千留も惜しくはない！　妻もやる、子供でもやる！　身代かぎりやつてもいい！』

チェルトプハーノフは急にマレク・アデリを後へ退がらせた。獵好きの男が乘りつける。『ねえ、あんた！』と大聲に、『ね、何を上げたらいいか、言つておくれ！　ね！』『俺が若し天子だつたら、』と、チェルトプハーノフは嚴かに言ふ（しかも彼は生れてこのかたシェークスピヤ*のことなんか聞いた例しもないのである。）『君はこの馬の代りに君の王國を全部よこすかも知れないが、それでも俺は御免だ！』彼はかういつて、聲高らかに笑ひ出し、手綱を絞つてマレク・アデリをぐいと引き立て、木獨樂か錢獨樂のやうに後足だけで空中をぐるりとめぐらし、さて、進め、進め！　と聲をかける。馬は切株の上を電光石火のごとくに越えてゆく。獵好きの紳士（噂によると極めて富裕な公爵であつたと

か）は地面に帽子を叩きつけ、どつかと身を投げ伏して、顏を帽子に埋めた！　さうして半時間ばかりも地べたに倒れてゐたのである。

チェルトプハーノフはどうしてこの馬を大事にせずには居られよう？　近所の誰彼に再び彼が立派に鼻を高くし、最後の誇りを示し得たのは實にこの馬のお蔭ではなかつたか？

6

その間にも時は過ぎて、支拂の期日が迫つて來た。それだのにチェルトプハーノフには二百五十留はおろか、五十留の金さへもない。どうしたらよいのか、どうして切り拔けたらよいのか。遂に彼は『いいわ』と決心した。『若しも猶太人が容赦しなかつたら、若し、どうしても待つ積りがなかつたら、家でも地所でも呉れてやる。さうして俺は馬に乘つて、向いた方へ行つてしまふんだ！　たとへ餓ゑ死にしようとも、マレク・アデリは手放せぬ！』彼はひどく興奮して、瞑想に耽りさへもした。然るに運命の神は、後にも先にもたつた一度、彼にやさしい微笑みを見せた。といふのは遠緣にあたる小母さんで、チェルト

＊ シェークスピヤの「リチャード三世」に「わが馬とわが王國」といふ句があるので、かういつたのであらう。（譯者註）

プハーノフは名も知らなかつた人が、彼の眼には莫大な額に見える――丁度二千留を遺言によつて後に遺して行つたのである！　然も彼はこの金をいはゆる危機一髪の際に受け取つた。即ち猶太人が來る前の日であつた。チェルトプハーノフは嬉しくて、まるで氣が違ふばかりであつた。尤も火酒（ウォトカ）のことは考へもしなかつた。マレク・アデリが手に入つたその日から、酒は一滴たりとも口にしなかつたのである。彼は厩に馳け込んで、その仲よしに鼻面の兩側から、皮膚のきはめて柔かい鼻の孔のうへにまで接吻した。『もう別れなくてもいいんだ！』と、彼はマレク・アデリの頸の、よく櫛を入れた鬣の下を輕く叩きながら叫んだ。家に歸つて來ると、二百五十留を勘定して差し引き、小さな包みに封じ込んだ。それから仰向けに寢て、煙草をふかしながら、殘りの金をどう處分したものかと空想した、――つまり、どんな犬を買ひ入れるか、生粹のコストロマ種で、どうしても赤い鹿（か）の子のある奴を買はう！　と。彼はペルフィシカとさへも、暫らく話をして、彼には、縫目に一面に黄色い打紐をつけた新しい短外套（カザキン）を約束した、――そして頗る上機嫌で寢床に就いた。

やがて好くない夢を見た、マレク・アデリではなく、なんだか駱駝みたいな奇妙な獸に乘つて獵に出かけたところであつた。すると雪のやうに白い、白い、眞白い狐がこちらを向いて走つて來た……。彼は鞭をくれようとした、犬をけしかけようとした――が、手に

持つてゐるのは鞭ではなくて、菩提樹の皮の纖維であつた。狐は彼の前を走つて、舌を出して彼をいら立たせる。彼は駱駝から跳び下りたが、躓いて、倒れてしまふ……、直ちに憲兵の手に落ちる、憲兵は總督のところへ招びつける、ところが、よく見ると、その總督はヤッフなのであつた……

チェルトプハーノフは眼がさめた。部屋の中は暗かつた。丁度、二番鷄が鳴いてゐた……。

どこか、遠い遠いところで、馬が嘶いた。

チェルトプハーノフは頭を上げる……。もう一度、微かな微かな嘶きが聞こえて來た。

『あれはマレク・アデリが嘶（な）いてゐるんだ！』と、腹の中で思ふ……『あれは、あいつの嘶（な）きごゑだ！　だが何うしてあんな遠いところで？　はてな……そんなことはない筈だが……』

チェルトプハーノフは忽ち全身が冷たくなつた。矢庭に寢床から跳ね起きて、手さぐりで長靴や着物をさがし、身支度をした――枕の下から厩の鍵を引つつかんで、庭へ跳び出した。

厩は屋敷の一ばん端のところにあつた。一方の壁は野原の方を向いてゐる。チェルトプハーノフは即座に鍵を錠前にあてがふことが能きなかつた、――手が慄へてゐたのである、――それからまた直ぐには鍵が廻せなかつた……。彼は息を殺して、ぢつと身動きもせずに佇つてゐた、若し戸の中で何かが動きでもしたら！『マレーシカ！　マァレッツ！』と、低い聲で呼んで見た。まるで死のやうな靜けさだ！　チェルトプハーノフは思はずも鍵を外した。戸は軋めいて、すうと開いた……。きつと錠をかけてなかつたのだ。敷居を跨いで、もう一度、馬を呼んで見た、――今度は「マレク・アデリ！」と名前を殘らず呼んだ。しかし親しい友達は何とも應へなかつた、ただ鼠が藁の中で、かさこそと音をさせてゐた。そこでチェルトプハーノフは厩の中のマレク・アデリを入れてあつた三つの仕切りの一つへ飛び込んだ。あたりは一寸先も見えないやうな闇であつたが、仕切りの中へさつさと入り込んだ、……空虛だ！　チェルトプハーノフは頭がぐらぐらし出した、まるで、頭のなかで鐘ががんがん鳴り出したやうだ。何か言はうとしたが、しゆうしゆうと言ふばかりで、

喘ぎながら、膝を折つて、上から下から四方八方、手さぐりにして、最初の仕切りから次の仕切りへ……、やがて干草を天井まで積み上げてある三番目の中へも入り込んだ。こちらの壁に突きあたり、向うの壁へ突きあたり、ばつたり倒れて、逆しまに轉がつたが、起きあがると、急に半ば開いてゐる戸口から向うも見ずに庭へ飛び出した。

『盗まれた！　ペルフィシカ！　ペルフィシカ！　盗まれた！』と力の限り喚き立てた。別當のペルフィシカは寢てゐた物置から襯衣一枚で獨樂のやうに飛び出して來た……

旦那と、たつた一人の下僕とは共に庭の眞ん中で、まるで醉ひどれのやうにぶつかつて、狂人のやうにぐるぐる廻つた。主人も事の仔細を話すことが能きず、下僕は下僕で何の用があるのか合點が行かなかつた。『嗚呼！嗚呼！』とチェルトプハーノフが呟やくと、別當がまた『嗚呼！嗚呼！』と鸚鵡がへしに言ふ。『提灯だ！　おい、提灯をとぼせ！　あかりだ！　あかりだ！』といふ聲が、遂にチェルトプハーノフの力ない胸の底から洩れて來る。ペルフィシカは家の中へ飛び込んだ。

しかし提灯をつけること、火を點すことは並大抵のことではなかつた。硫黄燐寸はその頃の露西亞では極めて珍らしいものであつたし、厨へ行つても燃えさしの殘りはもう疾うに消えてしまつてゐた――燧金も燧石も直ぐに見つからず、見つかつても仲々うまくは行

かなかつた。チェルトプハーノフは齒をぎりぎりと嚙みながら、怖ぢ氣づいてゐるペルフィシカの手から燧を引つたくつて、自分から火を鑽り出した。火花は夥しく飛び散つたが、それよりも夥しく惡態やら、果ては唸り聲までが飛び散つた。それでも火口には火がつきもしないし、ついたと思へば消えてしまふ、折角、四つの頰や唇をふくらまして、力を合はせ、骨を折つても！　たうとう五分間ほどして、やつとのことで、ひしやげた提灯の底に、きたない蠟燭の燃え滓が燃え出した。そこでチェルトプハーノフはペルフィシカを連れて、厩の中へ駈け込んだ。提灯を頭の上へさし上げて、見まはしたけれど……

やつぱり何もゐない！

彼は庭へ躍り出して、あちらこちらと隈なく駈けめぐる——馬は何處にもゐない！　パンテレェ・エレミキッチの屋敷を取り圍んでゐる籬は、ずつと前に朽ちはてて、あちこち傾いて、地べたに附いてゐる……。厩のわきは、廣さ二尺あまりが間、まるで倒れてゐる。ペルフィシカはここをチェルトプハーノフに指して見せた。

『旦那！　御覽なさい、ここを。畫間はかうぢやなかつたんです。それ、杭が地面から出てますよ。して見ると、誰かが引つこぬいたんだ。』

チェルトプハーノフは提灯をさげて駈け寄つて、地面のうへを照らして見た……

『蹄、蹄、蹄鐵の跡、生々しい跡！』と、早口に含み聲でいふ、『ここから牽き出したんだ、ここだ、ここだ！』

彼は瞬く間に籬を跳び越えて、『マレク・アデリ！　マレク・アデリ！』と叫びながら、野原の方へ傍目もふらずに走つて行つた。

ペルフィシカは籬のわきに、狐につまされたやうに、しよんぼりしてゐた。提灯の光りの環は、忽ち見えなくなつて、星もなく、月もない深い闇の中に呑まれてしまつた。

いよいよ幽かに、幽かにチェルトプハーノフのはかない呼び聲が聞こえて來る……。

8

彼が家に歸つて來た時には、朝燒の光りがもう燃え初めてゐた。彼には人間らしい姿は見られなかつた。着物は泥まみれになつて、顏は野性的な怖ろしい相をあらはし、眼つきは氣むづかしく、どんよりしてゐた。嗄れた聲でペルフィシカを逐ひやつて、自分は部屋に閉ぢこもつた。疲れはててゐるので殆んど立つてもゐられなかつたが、さうかといつて床に寢みもせず、戸口のわきの椅子に腰をかけて、頭をおさへてゐた。

『盗まれた！……盗まれた！』

それにしても何ういふ手口で盗棒は夜のうちに、この錠をおろした厩からマレク・アデリを盗む工夫をしたのか？　晝の日なかでさへも見知らぬ人は寄せつけなかつたあのマレク・アデリ、――あれを音も聲も立てないやうに盗む工夫を？　それから飼犬が一匹も吠えなかつたことは、どう解釋したらよいものか？　たしかに犬は全部で二匹、稚い仔犬がゐるだけだ、その二匹も寒いのと腹が減るのとで、地べたに伏してゐたのであらう――然し、それにしても！

『もうマレク・アデリがゐないとなれば、俺はどうしたらいいんだ？』と、チェルトプハーノフは考へる。『今は最後の喜びも失くしてしまつたのだ――いよいよ死ぬ時が來た。丁度、金も來たのだから、もう一匹買ふとしようか？　けれど、あんな馬が何處へ行つたらまた見つかるかの？』

『パンテレェ・エレミキッチさま！　パンテレェ・エレミキッチさま！』と、戸の向うで、おづおづと呼ぶ聲が聞こえる。

チェルトプハーノフは跳ね起きた。

『誰だえ？』と、自分の聲とも思はれぬ聲で叫んだ。

『私です、貴方の別當のペルフィシカです。』

『何用だ？　あれが見つかつたのか？　あれが歸つて來たのか？』

『いいえ、さうぢや御座いません、パンテレェ・エレミキッチさま、あれを賣つた猶太人の奴めが……』

『それがどうした？』

『參つたんで御座います。』

『ほう、ほう、ほう、ほう、ほう！』と、チェルトプハーノフはいつて、それからいきなり戸を開けた。『ここへ野郎を引つ張つて來い、引つ張つて來い、引つ張つて！』

髪を蓬々に振り亂して、荒々しい風體をした「恩人」が忽然と現はれたのを見て、ペルフィシカの背後に佇つてゐた猶太人は密かに逃げ出さうした。しかしチェルトプハーノフは二度ほど跳んで彼に追ひつき、まるで虎のやうに喉元にしがみついた。

『ああ！　金を取りに來たんだな！　金を取りに！』と猶太人の首を締めつけてゐながら、まるで自分が締めつけられてゐるやうな、嗄れた聲を出した、『夜中に盗んで置いて、晝になつて金を取りに來たんだらう？　ああ？　あ？』

『冗談ぢやございません、あね……た……しや……ま、』と、猶太人は呻き出さうとする。

『さあ言へ、俺の馬はどこにゐる？　どこへ隠した？　誰に賣つ拂つた？　さあ、吐かせ、吐かせ、吐かせ！』

猶太人はもう呻くことも能きなかつた。蒼ざめた顔には、恐怖の色さへも消えてしまつた。兩手をだらりと垂れ、全身はチェルトプハーノフに烈しく搖すぶられるので、葦のやうに前後に搖れる。

『金は拂つてやる、そつくり、一文殘らずに拂つてやる、』と、チェルトプハーノフは呶鳴つた、『しかし直ぐに言はなきや、餘りものの雛つ子みたいに絞め殺してやるぞ……』

『だがもう絞めてしまつたぢやありませんか、旦那、』と、別當のペルフィシカが素直に言ふ。

ここでやうやくチェルトプハーノフは思ひ直した。

彼は猶太人の頸を放した。と、猶太人は床にばつたり倒れる。チェルトプハーノフは彼を引き起こして、ベンチに腰をかけさせ、火酒を一杯、咽喉に注ぎ込んで、――正氣にかへらした。さて、正氣にかへらして、彼と話をし始めた。

話して見ると、猶太人はマレク・アデリが盗難にかかつたことなどは、夢にも知らなかつたことが判明した。それに「最も尊敬するパンテレエ・エレミキッチ様」のために自ら

手に入れた馬を盗むといふ法があるものか？

そこでチェルトプハーノフは彼を厩へ連れて行つた。

二人で厩の仕切りや、秣槽や戸の錠前を吟味したり、干草や藁をひつくり返して見たりして、それから庭へ行つた。チェルトプハーノフは猶太人に籬のわきの蹄の跡を見せたが、――いきなり自分の腿をたたいた。

『待て！』と、彼は叫んだ、『貴樣はどこで馬を買つたんだ？』

『マーロアルハンゲリスキイ郡のヴェルホセンスキイの馬市で。』と、猶太人は答へる。

『誰から？』

『哥薩克から。』

『待て！　その哥薩克は、若い奴か、年寄か？』

『中年で、落ち着いた人です。』

『それで何んな奴だつた？　見たところは何んな？　きつと狡猾い、ぺてん師だらう？』

『屹度、ぺてん師でしよ、あねたしやま。』

『それで何うだ、奴は何て言つてた、そのぺてん師は？　奴は長いこと馬を持つてたのか？』

『なんでも、長いこと持つてたと言つてたやうです。』
『さあ、それぢや、誰が盗む、あいつに決まつてる！　さうぢやないか、おい、こら…
…貴様の名前は何ちうんだ？』
猶太人はびつくりして、黒い小さな眼をチェルトプハーノフの方へ向けた。
『私の名前は何ちう？』
『うん、さうだ、貴様の呼び名は何ちうんだ。』
『モーシェリ・レーバです。』
『よし、ぢや、どうだ、レーバ、おい兄弟分、貴様は譯のわかる奴だが、マレク・アデリは元の主人の外には誰にも身を任せない筈だが！　盗んだ奴は鞍をおいたり、馬勒を掛けたり、馬衣をとつたりしてるぢやないか、――それ、馬衣が干草のうへに置いてあるわ！……全く、家の者みたいに處分してやがる！　元の主人でなけりや誰が來たつてマレク・アデリが踏み殺してしまふ譯ぢやないか！　村中を驚ろかせるやうな大聲を出した筈だ！　なあ、さうは思はんか？』
『御尤も、御尤もで御座います、あねたしやま！　私だつて、たつた一ぺん會つた
『さあ、さうなりや、何は措いてもその哥薩克を見つけなきやならんことになる！』

『けんど、何うすて見つかりませう、あねたしやま！　私だつて、たつた一ぺん會つたばかしで――今は何處にゐますやら――名前は何て言ひますやら？　あい、わい、わい！』
と、猶太人は垂れかかる毛の房を悲しさうに振りながら附け加へた。
『レーバ！』と、不意にチェルトプハーノフが叫んだ、『レーバ、俺を見ろ！　俺は思慮分別がつかなくなつた。俺は正氣ぢやないんだ！　お前が手傳つてくれなれなきや、俺はもう、手が出ないんだ！』
『けんど、どうすて、私なんぞに能きませう……』
『まあ、俺と一緒に行つて、盗棒を探さう。』
『けんど、どつちさ行つたもんでございませう？』
『馬市へ行つたり、往還や、細道や、馬盗棒んとこや、町や、村や、農園や――どこへでも、どこへでも行くんだ！　金のことは心配するな、俺は、兄弟、遺産が手に入つたんだ！　おれは一文なしになつても、大事な馬を見つけるぞ！　あの哥薩克の奴め、あの敵め、逃がすもんか！　何處へ行つたつて、ついて行くわ！　土の下へかくれりや、こつちも土ん中へ入つてく！　惡魔（デヴィル）んとこへ行きや、こつちも魔王（サタン）のとこへ行くんだ！』
『まあ、どして魔王（サタン）のとこへなんか、』と、猶太人が言ふ『そんな事しなくても大丈夫で

どさいますよ。』

『レーバ！』と、チェルトプハーノフは言葉を引きとる、『レーバ、貴様は猶太人で、貴様の信仰は穢らはしい、――けれども貴様の魂は多くの基督教徒のよりは、ずつと立派だ！　おれを不憫だと思つてくれ！　おれは一人ぢや何うにもならん、一人ぢや、とてもやりきれん。おれは癇癪もちだ――ところが貴様の頭腦は、すばらしい頭腦だ！　貴様たちの種族はみんなさうだ。學問をしなくつても何でもわかる！　貴様は、きつと何處から俺が金を出して來たのかと疑つてるんだらう。まあ、おれの部屋へ行かう、有金を全部見せてやるから。貴様は金を取つてもいい、頸から十字架をはづしてもいい、ただマレク・アデリだけは取り返してくれ、取り返して、取り返して！』

チェルトプハーノフはまるで熱病やみのやうに慄へてゐた。汗がだらだらと顏を流れて、涙にまじつて、髭の中に消える。彼はレーバの兩手を握つて、ひたすら哀願し、殆んど接吻しようとまでした……。彼は無我夢中であつた。猶太人はそれを拒んで自分には何うしても他所へ行くことが能きない、自分には仕事があるのだといふことを言つて聞かせようとした……が、駄目だつた！　何を言つてもチェトトプハーノフは耳をかさうとはしないのだ。どうにもかうにも手がつけられず、哀れにもレーバは同意しなければならなかつた。

翌くる日チェルトプハーノフは百姓馬車に乘つて、レーバと共にベスソノヲの村を出立した。猶太人は相當に困つたやうな顏付をして、片手で丸太につかまり、痩せこけた身體をがたごとと搖れる腰掛の上に躍らせ、片方の手を、新聞紙で包んだ手形の小包の入れてある懷のところへ押しあててゐた。チェルトプハーノフは彫像かなんぞのやうに坐り込んで、眼ばかり四方にくばりながら、胸いつぱいに息をついてゐた。腰には劍をさしてゐる。

『さあ、俺と馬との仲を割いた惡黨め、用心するがいいぞ！』と、國道へ出ながら、呟やいた。

家の世話はペルフィシカと、彼が同情して自分のところへ引き取つた耳の遠い、年をとつた煮焚き婆とに任せて置いた。

『マレク・アデリに乘つて歸つて來るぞ、』と別れるときに二人に言つた、『さもなきや、もう決して歸つて來ないんだ！』

『その時あ、ぢきにお前は俺と結婚するんだが、のう！』と、ペルフィシカは料理番の脇腹を肘でこづきながら冗談をいつた、『どつちにしたつて、おんなじだ、旦那様のお歸りは待てやしねえし、さもなきや、ふさぎの蟲にやられて死んぢまふんだ！』

9

一年は過ぎた……まる一年。パンテレェ・エレミキッチについては何の消息もなかつた。料理番は死んでしまひ、ペルフィシカももう是の家を捨てて町へ出ようと企てた。町には理髪店に見習奉公をしてゐる従兄弟がゐて、頻りに來いと勸めて來てゐたのである。――すると不意に、彼の主人が歸つて來る！　といふ噂がひろがつた。教區の補祭はパンテレェ・エレミキッチ自身から手紙を受け取つた。その中にはベスソノヲに歸るつもりだといふことを知らせ、近いうちに歸るから萬事よろしく整頓して置くやうに下男に前以て知らして置いてくれと依頼してあつた。この言葉を、ペルフィシカは埃でもあつたら少し綺麗にして置けといふ意味に解したが、然し彼はこの報らせにあまり信用を置かなかつた。ところが、五六日して、まぎれもないパンテレェ・エレミキッチがマレク・アデリに乘つて庭に現はれた時、初めて補祭のいつたことが本當だつたことを眼の前に見せつけられた。

ペルフィシカは主人のところへ駈け寄つて、――鐙に手をかけながら、馬から降りるのを手傳はうとしたが、主人は自分で跳び下りて、あたりに勝ち誇つた眸を投げかけ、聲高らかに叫んだ、『マレク・アデリをさがし出すと言つたが、敵の邪魔、運命の邪魔さへも

物ともせずに捜し出して來たぞ！』ペルフィシカは彼のそばへ歩み寄つて、手に接吻した。しかしチェルトプハーノフは自分の召使の熱い心づくしに何等の注意をも拂はなかつた。マレク・アデリの手綱をとつて自分の後ろに從へながら、彼は大股に厩の方へ向いて行つた。ペルフィシカはしみじみと主人を見まもつたが、心は怖ぢ氣づいて來た、『ああ、この一年の間に何てお痩せになつたことだらう、年もお取りになるし、――それにお顏も何ていふ嚴い、怖ろしいお顏になつたのだらう！』よそから見たら、パンテレェ・エレミキッチは兎に角目的を達したのだから、喜んでゐる筈だと考へられる。たしかに喜んではゐた……、だが矢張りペルフィシカは怖ぢ氣づく。彼は不氣味にさへもなつて來た。チェルトプハーノフは元の仕切りに馬を入れて輕く尻をたたいて言つた、『さあ、また家へ歸つて來たんだよ！　よく氣をつけろよ！……』その日、彼は納税の義務のない水呑百姓の中から信用のおける番人を雇ひ入れ、自分はまた自室に引きこもつて、もとのやうな暮らしをし始めた……。

尤も全部が全部、元通りではなかつた……、しかしこれに就いては、またあとで……。

かへつた翌くる日、パンテレェ・エレミキッチは、ペルフィシカを呼びつけた、ほかに別に話の相手もゐなかつたので、――いふまでもなく元のやうに自身の威嚴を見せようと

いふ氣持を失はずに、低音で――どういふ風にしてマレク・アデリを捜しあてることが能きたかを彼に物語り始めた。話をする間、チェルトプハーノフは窓の方に顔を向けて坐り、長い葡萄の苗木でつくつた煙管で煙草を吹かし、チェルトプハーノフの方は戸口の敷居の上に、兩手をうしろに廻しながら立つてゐた、――恭々しく主人の後ろ頭を見つめながら、彼は主人の話を聞いてゐた。話によると、いろいろと無駄骨を折つたり、あちこちと乘り廻した擧句、パンテレェ・エレミキッチはたうとうローム又ィの馬市へ來てしまつた。この時はもうたつた一人で、猶太人のレーバは連れてゐなかつた。レーバは氣が弱いので辛抱し切れず、逃げてしまつたのだ。それから五日目に、ここを立ち去るつもりで、これが最後と小馬車のずらりと並んだ傍を歩いてゐると、三頭の馬の間に、轅につけた粗布に繋がれた馬を見た、――マレク・アデリを見たのだ、一目見てさうだと思ひ――マレク・アデリもまた彼を見わけて嘶き出し、逃げようと努め、蹄で地面をかきむしり出したといふ。

――『ところが哥薩克のとこに居たんぢやないんだ、』チェルトプハーノフは振り向きもせずに、例の低音で話しつづける、『ジプシイの博勞がもつてゐたんだ、むろん俺は直ぐに自分のものになつたつもりで、無理にでも取り戻さうとしたんだが、ジプシイの畜生奴、熱湯でもかけられたみたいに廣場いつぱい聞こえるやうな聲で喚きやがつて、この馬は神

かけて或るジプシイから買つたのに相違ないと言ひ出した――盗んだといふんなら證人を出してくれと言ふんだ……俺は忌々しくて仕方がなかつたけれど、たうとう金を拂つたよ、なあに構ふもんか！　俺には自分の馬を見つけ出したといふことと、心の落ち着きを得たといふことが何よりなんだからな。それはさうとカラチェフスキイ郡ではレーバの言ふのを眞にうけて、ある男を哥薩克と間違へちやつて、俺の馬を盗んだ奴だと思ひ込んで、奴の顏をいやといふ程なぐつてやつた。ところが哥薩克と思つたのが坊さんの息子だと分かつて、賠償金を取られたんだ――百二十留も。なあに、金なんか欲しけりや、何時でも手に入る、おれはマレク・アデリが舞ひ戻つて來たのが何よりなんだ！　おれは今は幸福だ、――おれは平和な暮らしを樂しんで行かう。ところでペルフィシカ、お前には一言いつとくがな、よもやそんなこともあるまいが、若しもこの界隈で哥薩克の姿を一目でも見たら、即刻、なんにも言はずに飛んで來て、おれに鐵砲を渡せ。さうすれや、俺がいいやうにするからな！』

かういふ風にパンテレェ・エレミキッチはペルフィシカに話をしたのであつた。口ではこんなことを言つたものの、胸の中は、彼が言つて聞かせたほどには安らかではなかつたのである。

悲しいかな！　心の底では、連れて歸つたこの馬が、確かにマレク・アデリであるとは、充分に信じ切つてはゐなかつたのだ。

10

パンテレェ・エレミキッチに氣の晴れやらぬ時がやつて來た。取りも直さず平和を樂しむことが殆んど能きなかつたのである。たしかに良い日も幾日かはあつた。さういふ日には胸に懷いてゐる疑惑などといふものは、ほんの囈言のやうに思はれて、うるさい蠅を追ふやうに馬鹿らしい考へを追ひ拂ひ、あまつさへ自分自身を嘲りもした。然しまた惡い日もめぐつて來た。執拗な考へがこつそりとまた床下の鼠のやうに忍んで來て、彼の心に孔をあけたり、こそいだりし始める、――さうして、彼は人知れぬ苦痛に惱まされた。忘れもしないあのマレク・アデリを搜し出した日には、チェルトプハーノフはただ惠まれた喜びを感ずるばかりであつた……。然し、翌くる朝、そこの旅籠屋の低い檐の下で、一晩中寄り添つて寢たこの拾ひ物に鞍を置きかかつた時、はじめて何ものかが彼をちくちくと刺したのであつた……。彼はただ首を振つた、――それにしても種は既に蒔かれてゐたのだ。

歸りの旅の間（一週間ほどつづいたが）は疑惑の念は減多に湧いて來なかつた。それが一たびベスソノヲに歸るや否や、もとの擬ふかたなきマレク・アデリが棲んでゐた其のところにやつて來るや否や、疑ひはいよいよ強く、いよいよはつきりして來た……。途中は、ゆるゆると、搖られながら乘つて來て、あちらこちらを眺めながら、短い葡萄の苗木でつくつた煙管をふかし、何一つ考へもしなかつた。ただひよつこりと、「チェルトプハーノフのしようと思ふことは――何でも叶ふんだ」と、心の中で考へては微笑みを浮べるだけであつた。さて、家へ歸つて來ると、萬事の調子がまるで別になつた。しかし彼はこれらの事をすべて、勿論、自分の胸ひとつに祕めてゐた。ただ自尊心のみでも內心の恐慌を言葉にあらはさせようとはしなかつたであらう。彼は今度の新しいマレク・アデリが元のとは違ふやうな氣がするなどと、遠まはしにでもほのめかす者があつたら、その人を「眞つ二つに引き裂いた」であらう。彼はやむを得ず顏を合はせる二三の人から「うまく見つけ物をした」お祝ひの言葉を述べられた、しかし强ひてそんな祝辭を言つて貰はうとはしなかつた、彼は以前にもまして人と不意に出會ふことを避けてゐた――これは惡い兆しであつた！　彼は絕えず、若しこんな事がいへるならば、マレク・アデリを試驗して見た。野原のどこか、少し遠いところへ乘り出して試して見たり、こつそり厩に入つて、あとから

戸を閉めて、馬の鼻先に立つて、ぢつと馬の眼を見て、聲低く『お前かえ？　お前かえ？　お前か？……』と訊いたりする。さもない時には何時間もの間、默々としてぢつと馬を眺めてゐた、時には心も樂しく、『さうだ！　あれだ！　むろん、あれだ！』と呟やいたり、さうかと思ふと、或る時は狐につまされたやうに、どきまぎさへしながら眺めてゐた。

チェルトプハーノフはこのマレク・アデリとあのマレク・アデリとの肉體上の相違に、それほどは心を亂されなかつた……、尤も幾分の相違がないわけではなかつた。あれの尾と鬣は、も少し薄かつた、耳はもつと尖つてゐた、膝關節はもつと短く、眼はもつと明るかつた――然しこれはただ、さういふ氣がするのかも知れぬ。けれどチェルトプハーノフは精神上の相違ともいふべきものに心をみだされた。あれの習慣はこれのとは違つてゐた。癖が全くあれの癖と同じだとはいへない。例へば、あのマレク・アデリはチェルトプハーノフが厩に入るや否や、いつもきまつて、あたりを見まはして靜かに嘶いたものだ。ところがこれは何ごともなかつたやうに干草を嚼むか、――頭を垂れて微睡んでゐる。二匹とも主人が鞍から飛び下りる時には、しやんと停まつてゐるが、あれは呼ばれると直ぐに聲のする方へ歩いて來たのに、これは矢張り切株のやうにぢつと立つてゐる。あれも早くは走つたが、これよりは高く、大足に跳んだ。これはもつと伸び伸びとゆつ

くり歩き、跑をふむのにぐらぐらと、――時をり蹄鐵で「がたついた。」――つまり後足を前足にかち合はせるのだ。あれは決してそんな見つともないことはしなかつた――とんでもないことだ！　これは――チェルトプハーノフにはさういふ氣がした――いつも實に馬鹿らく、耳をぴくぴくやつてゐるが、あれは反對だ。片方の耳をうしろに反らして、ぢつとそのまま、主人の見張りをしてゐる！　あれは身のまはりが汚ないと見れば、すぐに後足で仕切りの壁をこつこつやる。これは平氣なものだ――腹のところまででも糞を積み上げる。あれは、早い話が、風に向つて立たせておくと、肺いつぱいに息を吸つて、體をゆすぶつたのに、これは引つきりなしに鼻を鳴らすばかりだ。あれは雨が降つて濕けると弱つたのに――これは何とも思はない、これはずつとがさつだ、どうもがさつだ！　あれのやうに氣持のいい所はなく、それに、馴しにくい――これは確かな話だ！

あの馬は可愛かつたが、この馬は……

チェルトプハーノフは時折こんなことを思つたが、こんな考へは彼にはひどく辛いものであつた。さうかと思ふと或る時はまた開墾したばかりの野原を全速力で走らせたり、水に洗はれた深い谷のどん底に跳び下りさせて、また最も峻しいところを通つて上がらせる、彼の心は歡喜のあまり茫然となる、聲高い叫び聲が唇を突いて出てくる。そこで、はつき

りと、はつきりと、自分がいま乘つてゐるのは、まぎれもない正眞正銘のマレク・アデリだときめてしまふ。何故といつて、こいつのやるやうな藝當を、どうして、ほかの馬に能きるものか？

とはいへ、災難や不幸は通り過ぎてはくれなかつた。マレク・アデリを永い間さがし歩いたので、チェルトプハーノフはかなりの金を磨つてしまつた。今はもうコストロマ種の獵犬のことなど夢にも思はず、昔のやうに、たつた一人で、あたり近所を乘り廻してゐた。すると或る朝、チェルトプハーノフはベスソノヲから五露里ばかりのところで、一年半ほど前にあんなに威勢よく、まつしぐらに駈けて見せたあの公爵の獵仲間にばつたり會つた。さうして、丁度あの時のやうに今も、野兎が斜面の地境から、急に飛び出して犬の前にあらはれるといふやうな場面が、あつちへ向きに生じたのだ。『それ、逃がすな、逃がすな！』獵師たちは一せいに駈け出した、チェルトプハーノフも駈け出した、——連中とは一緒にならずに、二百歩ばかり側へ寄つて、——今もなほ、あの頃と同じやうに人を遠ざけて。春の水に穿たれた大きな窪みが勾配を斜めに斷つて、いよいよ高くなるにつれ、次第に狹くなり、チェルトプハーノフの行く手をさへぎる。今、飛び越さなければならないところ——一年半前には、たしかに飛び越したところ——そこはやはり八歩ほどの廣さが

あり、深さは十四尺ほどある。勝利、まことに素晴らしい方法をもつて繰り返さるべき勝利を預感して、チェルトプハーノフは誇りかに掛け聲をかけ、太鞭を振り廻した、——獵人たちも馬を走らせたが、彼等は勇敢な騎手に絕えず眼をつけてゐた、——彼の馬は矢のやうに飛ぶ、——さあ、窪みは鼻先にあらはれた、——さあ、さあ、一いきだ、あの時のやうに！……

然しマレク・アデリはぴたりと停まつて、左へぐるりと廻り、チェルトプハーノフが窪みの方へ頭を引つ張つたのにも拘はらず、斷崖に沿うて走り出した……

馬は怖ぢ氣づいたのだ、つまり、自信がなかつたのだ！

その時、チェルトプハーノフは羞恥と憤怒の念に燃えて、泣いんばかりに手綱をおとし、ただ馬の行くにまかせて前へ前へと走らせた。獵仲間の嘲笑するのを聞きたくない、いや、そればかりではなく、彼等の呪はしい眼を一時たりとも早く逃れたいと、彼等を遠ざかり、いよいよ遠ざかつて、山の方へと駈けさせた。

脇腹を傷だらけにされて、口にシャボンの泡のやうな泡をいつぱいに吹いて、マレク・アデリは家にあたふたと歸つて來た。チェルトプハーノフは直ぐに自分の部屋に閉ぢこもつた。

『いや、あれぢやない、あれは俺の仲好しぢやないんだ！　あれなら頸を挫いても、俺を裏切る筈がない！』

11

次のやうな出來事が、たうとうチェルトプハーノフを所謂「やりこめて」しまつたのである。ある日、彼はマレク・アデリに乘つて、ベスソノヲの屬してゐる教區のお寺を圍む坊さんの屋敷の裏庭を通り拔けた。高架索風の毛皮の帽子を目深にかぶり、背をまろめて、兩手を鞍の前輪にゆるく垂れて、彼はゆつたりと進んで行つた。心の中は樂しくもなく、ぼんやりしてゐる。ふと誰かが彼に呼びかけた。

彼は馬をとめて、頭を上げた。見ると、かねて往き來をしてゐる補祭であつた。鳶色の三角帽を、お下げに編んだ鳶色の髪の上にかぶつて、黃いろい南京木綿の上衣（カフタン）を着、腰よりもずつと下に空色のきれはしを締めて、祭壇のお勤め人は、「積藁」を見に出て來ると、パンテレェ・エレミキッチを見つけたので、彼に敬意を表し、序でに何か質問をするのが彼の義務だと考へた。知つての通り教會の人などといふものは、何か、かういつたやうな

下ごころがなければ、世間の人などと話をするものではない。

しかしチェルトプハーノフは補祭なんかには何一つかまはなかつた。彼は相手がお辭儀をしたのに、ちよつと應へたばかりで、何かしら口の中でぶつぶつ言つて、早くも鞭をあててゐた……

『いや、どうも、貴方の馬は素晴らしい！』といつて、補祭は急いで附け足した、『全くこれは御自慢なすつてもいい。實に貴方はすばらしい智慧のあるお方だ。全く獅子のやうですわい！』この補祭殿は雄辯を謳はれてゐる。これには僧正樣もひどく忌々しがつてゐた。といふのは自分が頗る口下手で火酒を飲んでさへも舌が廻らなかつたからである。『惡人どもの姦計（たくらみ）によつて、一個の命あるものを失くされても』と、補祭は續ける、『いさかも失望することなく、むしろ反對に一そう神の攝理を御信仰に相成り、また別の、何等劣るところなき、いや却つて優つてゐると申してもよい位のを御入手遊ばされた、……といふのも……』

『何を吐かしやがるんだ？』と、不機嫌さうにチェルトプハーノフは遮つた、『別の馬とは何だ？　これは同じ馬だ、これはマレク・アデリだ……俺が見つけて來たんだ。ほざいてけつかる、たはけ奴……』

『おや！　おや！　おや！』と、補祭は指で髯を弄び、晴れやかな、貪るやうな眼でチェルトプハーノフを見つめながら、さも面倒くささうに、力をいれて言ふ、『それは又どうしてです、貴方？　貴方の馬は、たしか去んぬる年の聖母祭*の二週間ほど後に盗まれたわけでして、只今は十一月も末つ方なのですからな。』

『うむ、それが何うしたといふんだ？』

補祭はやはり指で髯を弄んでゐる。

『つまり、あれから一年の餘も經つて居りまする。それで貴方の馬はあの時分は圓い灰色の斑がありましたがな、丁度いまも、いや却つて濃くなつたやうで。それが何うした？と申しますると、灰色の馬といふものはな、一年も經つて大てい白くなるものでしての。』

チェルトプハーノフはぎよつとした……、誰かが猪槍で胸を突いたかのやうだ……。たしかにさうだ、灰色の馬は色が變る！　こんなたわいもないことを、どうして今まで氣がつかなかつたのか？

『ええ、この畜生！　退きやがれ！』と彼は忿怒の眼を光らせて、だしぬけに呶鳴りつけた――と思ふ間もなく、いたく呆れてゐる補祭の眼には見えなくなつてしまつた。

さあ！　何もかもお仕舞ひだ！

今や全く何もかも終り、何もかも打ちこはされて、最後の札が投げられたのだ！　何もかもが、「白くなる」といふ一つの言葉によつて、立ちどころに崩壞したのだ！

灰色の馬は白くなる！

跳んで行け、跳んでゆけ、畜生奴！　いくら跳んだつて、この言葉から逃げられないんだ！

チェルトプハーノフは家に馳せ歸つて、再びかたく閉ぢこもつた。

12

このやくざな馬はマレク・アデリではないこと、これとマレク・アデリとの間には、ほんの少しの似通つたところもないこと、一寸でも物のわかる人ならば一目見た時からこの位のことは見分けた筈だといふこと、チェルトプハーノフは甚だたわいもない手に乘せられたのだといふこと――否！　わざわざ、前からそのつもりでゐて、自らを欺き、自ら我が眼をつむつてゐたのだといふこと――これらすべてのことに今はもういささかの疑ひも

＊　聖母祭……毎年十月の一日に行はれる祭禮。（譯者註）

さし挾む餘地がなくなつてゐた！　チェルトプハーノフは部屋の中を行つたり來たり、壁ぎはまで行くと相も變らず踵でくるりと向き直る、まるで檻の中の猛獸のやうに。彼の自尊心は堪へられぬほどに酷く傷めつけられた。けれど辱かしめられた自尊心の苦痛のみが彼を惱ましたのではなかつた。彼は絶望の念に捉へられた。憤怒に胸がふさがつた。復讐の渴望に燃えてゐた。それにしても誰に反抗するのか？　誰に恨みを晴らすのか？　猶太人にか、ヤッフにか、マァシャにか、補祭にか、哥薩克の盜びとにか、近所の人たち全部にか、ありとある世の人々にか、乃至は自分自身にか？　彼は全く譯がわからなくなつて來た。最後の礼は投げられたのだ！（この比喩は彼の氣に入つた）。そして彼はまた世の中で、最もつまらない、最も淺間しい人間、みんなのお笑ひ草、道化者、浮ばれない馬鹿者、あの補祭の奴の嘲笑の的となつた！　心に描いて見れば、あのけがらはしい坊主めが灰色の馬のこと、愚鈍な旦那のことを話してゐるのが、はつきりと眼に見えるやうだ……。ああ、忌々しい！……チェルトプハーノフは、むらむらと湧いてくる癇癪を抑へようとしても抑へられなかつた。この馬は……たとへマレク・アデリではないにしても、やはり……いい馬で、これからさき何年か役に立つかも知れないと、強ひて思つて見ようとしたが、駄目だつた。そこで、この考へを憤然と押し退けてしまつた。たしかに、こんなことを考

へるのは、それでなくても自分が濟まないと思つてゐるあのマレク・アデリに、新しい侮辱を加へることになるのだ……。たしかにさうだ！　このやくざな代物を、この駑馬を、彼はまるで盲目、間抜のやうに、あのマレク・アデリと同等に見てゐたのだ！　それに、このやくざ馬が彼につくした役目についてもだ……果して彼はこの馬に乘るのを何時かはいいことだと思ふだらうか？　いや、どんなことがあつても！　決して!!……この馬は韃靼人にくれてやる、犬の餌食にくれてやる、……それ位の値打しかないんだ……。さうだ、それが闘の山だ！

二時間ももつともチェルトプハーノフは部屋の中をぶらついてゐた。

『ペルフィシカ！』と彼はだしぬけに號令した。『即刻、酒屋へ飛んでゆけ、火酒（ウォトカ）を半ヴェドロ*持つて來い。いいかえ？　半ヴェドロだ、早くしろ！　今の今、ここで火酒が要るんだぞ。』

火酒は間もなくパンテレェ・エレミキッチの卓子のうへにあらはれて、彼は、ぐびりぐびりとやり出した。

＊　一ヴェドロは凡そわが六升八合二勺にあたる。（譯者註）

若しもこの時チェルトプハーノフを見た人があつたら、若しも憤怒の色も澁々と、一杯また一杯と飲み乾してゐるのを目擊した者があつたら――その人は確かに思はず識らず恐怖の念を覺えたことであらう。夜になる。獸脂の蠟燭が卓子のうへにぼんやり點る。チェルトプハーノフはあちこちと隅から隅まで歩くことはやめて、顏を眞赤にして坐りこんだ。眼はどんよりと曇つてゐる。彼はこの眼を或ひは床の上におとし、或ひは眞暗な窓にぢつと振り向ける。立ちあがると、火酒を注いで、ぐつと煽つたが、また腰をおろし、ある一點に眼を注いで、身じろぎだにもしない――ただ息づかひが激しくなり、顏はいよいよ赤くなるばかりだ。どうやら彼の胸に或る決心が熟して來たらしい。この決心は彼をどきまぎさせはしたが、だんだんとそれにも馴れて來た。今はたつた一つの考へが、執拗に、小止みなく、ひしひしと押し寄せて來る。いつも同じい影像が眼の前に、いよいよはつきりと浮んで來た。さうして亂醉の燃えるやうな力に壓されて、心の中にはいらだたしい忿恚の情が、今は殘忍な感情に變り、不吉な微笑みが唇に上つて來た……。

『さあ、時が來た！』と事もなげに、まるで退屈したやうな調子で言ふ、『せいせいす

るだらうよ！』

彼は最後の火酒を一杯のみほして、寢床のうへから、ピストルを、――あのマァシャを擊つたピストルを取つて、彈丸をこめ、ポケットには「萬一の用意」にもと、幾つかの藥筒を收めて、厩の方へ向いて行つた。

戸を開けかかると番人がそばへ駈けつけた。が、彼は『おれだ！　わからんのか？　退け！』と、どなりつけた。番人が一寸わきへ寄ると、『行つて寢ろ！』と、またチェルトプハーノフはどなりけた、『ここにや貴樣が番をするやうなものはないんだ！、いや、珍らしい代物だ、えらい寶ものだ！』彼は厩に入つた。マレク・アデリ、……贋物のマレク・アデリ……贋物のマレク・アデリは敷藁の上に横になつてゐる。チェルトプハーノフは『起きろ、この薄野呂！』と言ひながら足蹴りにした。それから輪索を秣槽から外し馬衣を剝いで、地面に投げつけた――やがて、おとなしい馬を仕切りの中で手荒く廻して、庭へ引き出し、庭から野原へ曳いてゆく。番人は旦那が夜中に馬勒もつけない馬を引つ張つて何處へ行くのか、さつぱり見當もつかずに、少からず驚ろいてゐる。訊いて見るのが――勿論、おそろしかつたのだ。さうして、ただ主人が近くの森に通ふ道の曲り角に消えてゆくまで、見送つたのであつた。

チェルトプハーノフは大股に、立ちどまることもなく、あたりを見廻すこともなく歩いて行つた。マレク・アデリ――最後までこの名で通さう――は素直に後をついて行く。その夜は實に明るい夜で、チェルトプハーノフは前の方にぽちぽちと黑くなつて續いてゐる森のぎざぎざした輪廓も見わけることが能きた。彼は夜の冷氣に抱かれて、若しも……若しも、全く彼を愚かなものにした別の、もつと强い醉ひさへなかつたなら、さつき飲んだ火酒に必ず醉つてゐた筈であつた。頭は重くなり、血が咽喉や耳にすさまじく鳴つてゐる。しかも彼はしつかりした足どりで、自分の歩いてゐる方角もよく分かつてゐた。

マレク・アデリを殺さうと彼は決心した。日がな一日、彼はそのことばかり考へてゐた……さうして今、心を決めたのだ！

彼は泰然自若として……といふ程でもないが、義務の觀念に從つて事をなす人のやうに、自らを深く信じて、ひたむきに、この仕事に進んで行つた。この「狂言」も彼には極めて「たわいもないもの」に思はれた。まやかし物を無きものにすれば、直ちに、「あらゆるも

の」に對して清算がつくのだ。さうして、自らの愚昧を罰し、眞のよき友の前に罪を洗ひ、世間全體（チェルトプハーノフはこの「世間全體」に少からず心を配つてゐた）に、彼を相手にふざけた眞似は能きないといふことを示すことが能きる……。それに大事なことは、彼自らも、このまやかし物を道づれに己が命を滅ぼさうといふのだ。何故といつて、何のためにこの先、生き永らへる必要があるのだ？　かういふ考へが、どうして彼の頭に宿つたのか、何故こんな考へが、たわいもないことに思はれたのか――全部が全部、說明のつかない事ではないにしても、矢張り說明するのは容易ではない。辱かしめられて、ただ獨り、身のまはりには一人の人間もなく、金といつては鐚一文なく、それに、酒に血潮を湧き立たされ、彼は今は精神錯亂に近い狀態に在る。所で、精神錯亂の人たちの盲目的な亂暴沙汰にも、當人たちの眼から見れば、自己流の論理があり權利さへもがあることは疑ふ餘地もないことだ。兎にも角にも自身の權利といふものをチェルトプハーノフは全く信じ切つてゐた。彼は躊躇をしなかつた、直ちに罪あるものに對して宣告を執行しようとした、しかも自ら罪人と呼んだのは誰を指すのか解りもしないで……。實をいへば、彼は自分が爲さうとしてゐることを殆んど反省しては見なかつたのだ。『さうだ、始末をつけなきやならん、』これが自分自身に、魯かしくも、嚴然と、繰り返して言つてゐた言葉であつた、

『始末をつけなきやならん！』

かくて、無實の罪を着せられた罪のない馬は、彼の後ろからおとなしく小走りについて行く……。けれど、チェルトプハーノフの胸には憐憫の情は更にない。

15

馬を連れ込んでゆく森の緣から程遠からぬところに、半ば若槲の繁みに蔽はれた小さな谷が續いてゐた。チェルトプハーノフはその谷に下りてゆく……、マレク・アデリはつまづいて、危ふく彼の上に倒れかからうとした。

『おれを壓しつぶす氣だな、この畜生！』と、チェルトプハーノフは叫んで――自らを衞るかのやうに、ポケットからピストルをつかみ出した。もはや彼は殘虐な氣持にはならなかつた。ただ罪を犯す前に人を襲ふといふ特別な感情の痲痺を覺えたばかりである。が、自分の聲に驚ろかされた――暗い樹枝の檐の下に、木深い谷の腐つた、むつとするやうな濕氣の中に、彼の聲が怪しく響いたのである。おまけに彼の叫び聲に應じて、何か大きな鳥がだしぬけに頭の上の木の梢で羽ばたきをした……。チェルトプハーノフは身深ひし

た。まさしく彼は自分の行ひの見張役を覺ましたのだ――しかし此處はどこだ？　ただ一疋の生物にも會つてはならない寂寞たる境だ……。

『どこへでも行け、この畜生！』と、彼は口ごもつて、マレク・アデリの手綱をはなし、ピストルの臺尻で肩のあたりを厭やといふ程なぐりつけた。マレク・アデリは素早く向き直つて、谷を這ひあがつて……逃げてしまつた。が、ほんの暫らくの間、蹄の音が聞こえてゐた。今しも吹きおこつた風が、あらゆる物音を妨げ、包んでしまつた。

今度はチェルトプハーノフもゆつたりと谷を攀ぢ上つて、森の緣まで辿りつき、歸りの道を歩いてゆく。彼は自分が物足りなかつた。頭や胸に感じてゐた重苦しさが、手にも足にも擴がつて行つた。歩きながらも腹が立つ。心は暗く、物足りず、飢じくはなる。誰かに侮られ、獲物を奪はれ、食べ物を奪はれたかのやうに歩いてゆく。

自殺を計りながら、妨げられて未遂に終つた人はかういふ感じを知つてゐるであらう。

不意に何かが後ろから、背中をつついた。彼は見廻した……、マレク・アデリが道の眞ん中に立つてゐる。主人の後からやつて來て、鼻面でさはつて……自分の居ることを知らせたのだ……。

『ああ！』とチェルトプハーノフは叫んだ、『自分から、わざわざ死にに來たんだな！

ぢや、待て！』

瞬くうちに、彼はピストルをつかみ出し、撃鐵を上げる。銃口をマレク・アデリの額にあてる。發射する……

可哀さうに、馬は横に飛び退いて、後足で起きあがり、十歩ばかり駈け出したが、急にどつかと倒れてしまつた。そして地上をのたうち廻りながら、はつはつと喘いだ……

チェルトプハーノフは兩手を耳にあてて、駈け出した。膝はぶるぶる慄へてゐる。醉ひも、怨みも、愚かしい己惚れも——すべては立ちどころに影をひそめた。あとにはただ羞恥と醜惡の感じ——それに意識、今度といふ今度は、遂に自分をも殺してしまつたのだといふ、はつきりした意識だけが殘つてゐた。

16

六週間ほど經つて、別當のペルフィシカは折柄ベスソノヲの屋敷のわきを通りかかつた郡警察分署長を呼びとめるのを自分の義務だと考へた。

『何の用か？』と、警官が訊ねる。

『どうぞ、貴方樣、手前どもの宅へいらして下さい。』と、別當は丁寧にお辭儀をしながら答へる、『パンテレェ・エレミキッチ樣がどうも死にさうで御座います。それで面倒がおこらなければいいがと思ひまして。』

『なに？　死ぬ？』

『さやうで御座いますよ。最初は毎日、火酒をおやりなされましたが、今では床に就きなすつて、まるで早や、お痩せんなりましての。もう、なんにも譯が分からんやうな鹽梅でして。まるで口がきけませんのでの。』

警部は馬車から出て、『どうぢや、少くとも坊さんのところへは行つてあるんぢやらうの？　旦那は懺悔はしたか？　聖餐は受けたか？』

『いいえ、まだで御座います。』

警部は顏をしかめた。

『それあ、お前、一體どうしたといふんだ、え？　そんなことつてあるものか——あ？　お前はその位のことを知らんのか……この責任が重大だくらゐは、……あ？』

『そりやもう、一昨日も昨日もお訊ね申したんで、』怖ぢ氣づいた別當があとを引きとる、『「お坊さんとこへ、パンテレェ・エレミキッチ樣、一走り行つて參りませうか？」つて申

しましての。すると「默れ、馬鹿野郎。自分の用事だけすりやいいんだ。」と、仰つしやるんでがす。けんど、今日になつて話しかけて見ますと――旦那様は私を見なすつて、髭を一寸うごかしなさるばかりで。』

『それで火酒はたくさん飲んだのか?』と警部は訊ねる。

『えらう澤山! ところで、どうぞ、貴方様、旦那様のお部屋までおいでをいただきたいもので。』

『それぢや、案内せい!』と、警部は不平がましく言つて、ペルフィシカの後について行つた。

驚ろくべき光景が彼を待ち受けてゐた。

濕つぽく暗い裏部屋の馬衣で包んだ見すぼらしい寢臺のうへに、枕のかはりに毳だつた黑い無袖外套をあててチェルトプハーノフが寢てゐる。今は蒼ざめてゐるのではなく、死人に見られるやうな黃ばんだ綠いろをして、眼は青光る瞼の下に落ち窪み、蓬々とのびた口髭のうへに、鼻は細く尖つて、しかもまだ赤らみを帶びてゐる。胸に藥筒さしのついたいつもながらの袖無しを着て、チェルケス風のだぶだぶの、青いズボンをはいて寢てゐる。上の方の眞赤な毛皮の帽子が、額を半ぎはまで隱してゐる。片方の手にチェルトプハーノ

フは獵に使ふ太鞭をもつて、片方の手には刺繍のしてある煙草入れ――あのマァシャの最後の贈り物をもつてゐた。寢臺のわきの卓子の上には空になつた酒の壜が立つて居り、寢床の頭の方には二枚の水彩畫がピンで壁にとめてある。一枚は打ち見たところ、ギダァを手にした肥つた男をあらはしてゐるが――恐らくは、ネドビュースキンであらう。もう一枚には馬を飛ばしてゐる騎手が描かれてゐたが……。馬は、子供らが壁や塀に樂書する奇しげな動物に似てゐるが、念入りに墨で影をつけた圓い斑點、騎手の胸の藥筒さし、長靴の尖つた指先、おびただしい口髭などを見れば疑ひを容れる餘地がない、即ちこの繪はパンテレェ・エレミキッチがマレク・アデリに跨がつてゐるところを描いたつもりなのだ。

呆れた警部はどういふ目論見をしたらよいのか分からなかつた。死のやうな靜けさが部屋に溢れてゐる。「何だ、こりやもう死んでる!」と、心の中では思つたが、聲を張りあげて言ふ、『パンテレェ・エレミキッチさん! ああ、パンテレェ・エレミキッチさん!』

その時、大へんなことが持ち上がつた。チェルトプハーノフの眼がしづかに開いて、光りのない瞳が最初は右から左へ、やがて左から右へ動いて、來客のところでぴたりと止まつて、彼を見たのだ、……何ものかが兩の眼のぼんやりした白晴の中にちらちらして、眸のやうなものが白晴の中にあらはれた。青味がかつた唇が次第次第に離れて、今は全く墓

場の中からでも洩れるやうな、嗄れた聲が聞こえて來た。

『親代々の貴族、パンテレェ・エレミキッチが死にかかつてゐるんだ。邪魔をするのは何處の何奴だ？――俺は借りもなければ貸しもない……放つておいてくれ、みんな！ 行つてくれ！』

太鞭を持つた手を上げようとした、……が、駄目だつた！ 唇がまた引つついて、眼は瞑ぢられた――そして前のやうにチェルトプハーノフは死んだ蛙のやうに身を伸ばし、瞳を引き寄せて、佗びしい寢臺のうへに横たはつた。

『死んだ時には知らしてくれ、』と、警部は部屋を出がけにペルフィシカにささやいた、『それから、もう坊さんを呼びにやつてもいいと思ふが。法式は守らにやいかんぞ、聖油禮もしてやつて。』

ペルフィシカはその日、坊さんを賴みに行つた。そして翌くる朝は警部のところへ報らせに行つた。パンテレェ・エレミキッチがその晩、亡くなつたのである。

葬式の時、二人の人が彼の柩を見送つた。別當のペルフィシカとモーシェル・レーバとであつた。チェルトプハーノフが亡くなつたといふ噂が、どこをどうしてか猶太人の耳に入つたのである――そこで彼は恩人の葬儀に會することを忘りはしなかつたのである。

永き忍苦のわが鄕國よ、――
ああ、露西亞の民の國！
フョードル・チュッチェフ

＊生神樣

佛蘭西の諺に「乾いた漁師と濡れた獵人は見るも哀れだ。」といふのがある。私は未だ曾て漁に特別の興味をもつたことがないので、晴れた好い天氣の日に、漁師の氣持がどんなものか、また天氣の惡い日に、漁がたくさんあつたといふ樂しみが、どの程度まで濡れてゐる不愉快さに打ち克つものか、とんと見當がつかない。然しながら獵人にとつて雨といふやつは、まことに災難である。丁度この災難にエルモライと私とは、以前ビーェレフ郡へ松鷄を擊ちに行つた時に出つくはした。――夜の明け際から雨はちつとも止まない。

＊ これは、より明確にいへば「生ける不朽體」である。即ち純潔な生涯を送つて神の御意にしたがへる者の肉體は死して後も永劫に朽ちないものとされてゐるが、この一篇の主人公は現にさういふ生涯を送つてゐるところから、かういふ綽名をつけられてゐたのだ。ここに「生神樣」と譯したのは綽名であるので、生硬になることを避けたのである。（譯者註）

雨除けの方法は仕つくしてしまつた！　護謨びきの合羽を頭からすつぽり被つて、雨の滴を能きるだけ避けようと、樹蔭に佇んでゐた……。雨合羽が射撃の邪魔になることは先づよいとしても、甚だ不躾にも水を透し、それに樹の下へは、たしかに初めのうちは、雨の滴も落ちて來ないと思はれたが、やがて葉のうへにたまつた雨水が急にあふれ出して、それが雨樋から落ちるやうに、枝から降りかかつて來た。冷たい水がネクタイの下へ入りこんで、脊椎を傳つて流れる……。これはエルモライがいつた通り、「もうよくよくのこと」であつた！『いや、ピョートル・ペトローキッチさん、』と彼はたうとう叫び出した、『こんなぢや駄目だ！……今日は獵は能きましねえ。犬の鼻は濡れて利かなくなるし、鐵砲へは火がつかず……えい！　縁起が悪い！』

『一體、どうしたらいいだらう？』

『まあその何ですね、アレクセィエフカへ參りやんせう。貴方あ、御存じねえかも知んねけんど、あそこにや別莊がありましてな――おふくろ様が持つてらつしやるんで、ここから八露里ほどあります。今夜はあすこへ泊つて、そして明日……』

『ここへまた引つ歸すのか？』

『いんえ、ここへぢゃありましねえ……。アレクセィエフカの向うに知つてる所がある

んです……、松鷄にや、ここよりあ、ずゐぶん好いんでして！』

私はこの忠實なる伴侶に、それならば何故まつすぐ其處へ連れて行かなかつたのかと突き込んで訊ねはしなかつた。そしてその日、二人は母の別莊に辿り着いた。正直にいふと、そんな別莊のあつたことは今まで夢にも知らなかつたのだ。行つて見ると、この別莊には小さな離れが附いてゐて、かなり古くはあつたが、今まで人が住んでゐなかつたので綺麗であつた。ここに私は極めて靜かな一夜を過ごした。

翌くる日は大へん早く眼をさました。陽は今しがた出たばかりで、空には一きれの雲もなく、あたりは一きは強い光りに輝いてゐた、昨日の夕立の名殘に、新鮮な朝の光りが照り添うて。――小馬車の支度をして貰つてゐる間、嘗ては果樹園であつたが今は荒れ果てゐる小さな庭園へ私はぶらぶらと出かけて行つた。離れはその庭園の香りの高い、みづみづしい繁みに四方から取り圍まれてゐる。ああ、外氣の中にゐると、どんなに爽やかであつたらう。晴れた空には雲雀が囀つて、鈴のやうな囀りごゑは銀のいろの硝子珠のやうに降つて來る！　翼のうへには、きつと露の滴を載せて持つて行つたにちがひない。その歌ごゑは露に濡らされたやうに思はれる。私は帽子さへも脱いで、快よく、胸いつぱいに呼吸をした……。深くない谿の斜面の籬のすぐ傍に蜜蜂の巣が見える。芝草や蕁麻の壁の

やうに密生して續いてゐる間を、蛇のやうにうねつて狹い徑がそこに通ひ、その草のうへには、どこから來たものか、暗綠色の大麻の尖つた莖が突き出てゐる。

この徑に沿うてゆくほどに、私は蜜蜂の巣のところへ來た。巣とならんで、細い枝を編んでつくつた納屋、いはゆる「圍ひ」が立つてゐる。冬は蜂の巣をこの中へ入れて置くのだ。半ば開いてゐる戸口を覗きこむと、中は眞暗で、しんとして、乾き切つてゐて、薄荷と蜂蜜草(メリッサ)の匂ひがする。隅の方には腰掛が取りつけられてあつて、その上に毛布にくるまつて、何か小さなものがゐる……。私はそこを立ち去らうとした……。

『旦那様、あの、旦那様！ ビョートル・ペトローキッチ様！』といふ微かな、弱々しい、ゆつたりとして、沼地の渉(すゐ)のそよぎのやうに嗄れた聲が聞こえて來た。

私は立ちどまつた。

『ビョートル・ペトローキッチ様！ どうぞ、お入り下さいまし！』と、その聲がまた言ふ。聲はさきに私の眼にとまつた腰掛のあたりから聞こえて來たのだ。

私は近づいて見て――あまりのことに暫しは言葉も出なかつた。私の前には生きた人間が横になつてゐたのだ。しかし、それは何ものであつたか？

頭はすつかり痩せ衰へて、ただ一樣に青銅色をしてゐた。まるでそのむかしに描かれた

聖像(イコーナ)のやうであつた。細い鼻はナイフの刄のやうに、唇は殆んど見わけがつかず、ただ齒と眼(まなこ)だけが白く見える。頭巾の下からは黃色い髮の毛が、あらあらと縺れて、額のうへに食(は)み出てゐる。毛布が襞をなして掛つてゐる顎のところには、小枝のやうに指をゆつくりと繰りながら、同じやうに青銅色をした小さな手が動いてゐる。私はなほぢつと彼女に見入るのであつた。顏はただ醜くないばかりではなく、美しくさへもあつた、――が、何とはなしに怖ろしく、この世ならぬもののやうに思はれた。その顏が私に怖ろしく思はれたのは、その顏に、金屬のやうな頰のうへに、――つとめても……つとめても弛まない微笑が見えてゐたからであつた。

『おわかりになりませんか、旦那様？』またしても幽かな聲がささいた。その聲は殆んど動くか動かないかに思はれる唇から洩れいづるもののやうであつた。『無理もございません！ わたし、ルケリヤでございます……あの、覺えていらつしやいますか、スパッコエのお母様のところで踊り*(パラウオド)の音頭取をいたして居りましたの……覺えていらしやいますか、わたしはまた合唱の音頭取でもございましたの？』

＊ 村の若い衆が、男も女もうちつれて、歌をうたひながら春は復活祭のころから冬の頃までの暖い日に圓くなつて踊る。ゆつたりゆつたりと、圓を描きながら。わが國の盆踊のやうに。但し夜の踊りではない。（譯者註）

『ルケリヤ！』と、私は叫んだ、『あれがお前だつたのかしら？　ほんとうに？』
『わたし、さうで御座いましたの、旦那様。わたし、わたし、ルケリヤで御座います。』
私は何と言つていいかわからなかつた。私は明るい、死んだやうな眼をして、ぢつと私を見つめる是の暗い微動だにもせぬ顔に、まるで氣が遠くなつたかの様に見入るのであつた。あり得べきことであらうか？　この木乃伊（ミイラ）が――あの背の高い、よく肥えた、色の白い、頬の紅い――しよつちゆう笑つたり、踊つたり、歌つたりしてゐた――召使のなかで一番の美人であつたルケリヤだとは！　ルケリヤ、あの悧巧なルケリヤ、村中の若い者が、みなその後を追ひ廻したルケリヤ、私自身――十六の少年であつた私自身が、ひそかに溜息を洩らしたあのルケリヤだとは！
『何をいふんだ、ルケリヤ、』と、私はやうやくのことで言つた、『一體、おまへはどうしたといふんだ？』
『それはそれは辛い目にあひましたの！　けど、旦那様、お厭やでも、わたしの身の上話を聞いてやつて下さいまし、そこの小さな桶へお掛け下さいまし――もつと近くへ、さもないと、お聞きとりになれませんわ……わたし、この頃はあまり聲が出ませんの！……でもまあ、お目にかかれて嬉しうございますわ！　どうしてこのアレクセイフかなんぞへ

いらしつたんでございます？』
ルケリヤは極めて靜かに、弱々しい聲ではあるが、息もつかずに話をした。
『獵師のエルモライがこつちへ連れて來たんだ。でも、それよりか話が聞きたい……』
『わたしの難儀した事をお話するんで御座いますか？――それはお話いたしませうとも、旦那様。もうだいぶ前になりますけど、六年か七年前のことでございました。その頃、やつと私は、ワシリィ・ポリャコフと結婚の約束をしたばかりでございました。あの、覺えていらつしやいますか、容姿（なり）のよい、捲毛の男（かた）でして、未だ旦那様のお母様のところで食事方をして居りました？　けどあの頃、貴方はもう田舎にはいらつしやいませんでしたね、莫斯科へ學問をしにいらして。私とワシリィは本當に愛し合つて居りました。私は一時（とき）もあの人のことを忘れませんでした。それで事の起りましたのは、春のことでございました。して、ある晩のこと……もう夜明けに間もないのに……どうしても眠れないのです。庭には夜うぐひすが、ほんとうに惚々するやうな聲で鳴いて居りましてね！……たまらなくつて私は起きあがつて、踏段のところまで聞きに出てしまひました。夜うぐひすは、ただもう鳴きつづけるのでございます……、すると、ふつと誰かがワーシャの聲で私を呼んだやうな氣がいたしました、やさしい聲で「ルゥシャ！」と呼ぶのでございます……。私は

ふり返つて見ました、けど、きつと眼が覺めてゐなかつたせゐでございませう、私は急に一番うへの段から足をふみはづして、まつすぐに下へ落ちてしまひました——そしてひどく地面にからだを打つたのでございます！　ですけれど、大した怪我はないと思つて居りました、すぐに起きあがつて自分の部屋へ歸れたくらゐでしたものね……。ただ何か内の方で——お腹の中で、ちぎれたものがあるやうに思ひました……息をつかせて下さいまし……ほんの一寸……旦那様。』

ルケリヤは口を噤んだ。私は驚ろいて彼女を見た。私が殊に驚ろかされたのは、殆んど樂しさうに、『ああ』と溜息ひとつ洩らさずに、一向に不平もこぼさず、同情を求めるといふ風もなしに話をしたことであつた。

『そのことがあつてからといふもの、』ルケリヤは話をつづけた、『すつかり痩せ衰へはじめましてね。身體は黑くなつて來ますし、歩くのが大儀になつて來るし、それから、全く兩足が利かないやうになりましたの。立つことも坐ることも能きませんので、始終、横になつてゐなければならなくなりました。食べたくもないし、飲みたくもなし、だんだん惡くなるばかりでした。奥様は御親切に、お醫者様にも見せて下さいまして、病院へもやつて下さいました。ですけど、矢張り良くはなれませんでした。それにお醫者様は一人と

して、私の病氣がどんな病氣か言ひきることさへ能きなかつたのでした。それはもう能きるだけのことは仕盡して下さいました。燒鰻で背中を燒いたり、氷で冷やしたり——それでも何の効き目も御座いません。私はたうとう身體が骨のやうに固くなつてしまひました……。さういへば、お醫者様方も、もう療治の仕様がないと、匙を投げておしまひになりますし、お邸に片輪者をお置きになつても仕方がございませんので、……まあ、それで此處へ送られて參りましたの——ここには身寄の者も居りますので。まあ、さういふ譯で御覽の通りの暮らしをして居りますのです。』

ルケリヤはまた默りこんだ、そして、また無理に笑つて見た。

『しかし、これはあんまりひどいな、お前ん所は！』と、私は叫んだ……さうして、そのさき何と附け加へたらよいのか分からなかつたので、『それぢや、ワシリィ・ポリャコフはどうなのか？』と、訊いて見た。これは甚だ愚劣な質問であつた。

ちよつとルケリヤは眼をそらした。

『ポリャコフがどうですつて？——あの人は悲しんでくれました、少しは悲しんでくれました、——けど、ほかの人と、グリンノェから來た娘と結婚してしまひましたの。グリンノェを御存じでございませう？　ここからは、そんなに遠くはございません。娘はアグ

ラフェーナと申しました。あの人は、それは私を可愛がつてくれました、――けれど、若い身空のことですし、――いつまで獨りで居るわけにも參りませんものね。といつて、私がどんな配偶になれませう？　でも、あの人はきれいな、氣だての好い嫁御を探しあてて、今では子供もございますの、あの人は、こちらのお隣りで執事をして居りますが、貴方のお母様が身許の保證をつけて暇をおやりになつたものですから、おかげで仲々よくやつてゐるんで御座いますよ。』

『ぢや、かうして、しよつちゆう寢てばかりゐるのか？』と、私はまた訊いて見た。

『はい、旦那様、もう七年もかうして寢て居りますの。夏はこの小舍の中に寢て居りますが、寒くなりますと、湯殿の控間へ移してくれますので、あちらに寢て居ります。』

『誰が看病してくれる？　氣をつけてくれる人があるのか？』

『ええ、やつぱりこちらにも親切なお方がございましてね。私はここでも放つては置かれませんの。それに、それほど皆さまのお世話にならないでも濟むのでございます。食べ物といつては碌なものを食べはいたしませんが、水はそこの水差にありますし、これには、いつも用意して、きれいな泉水を入れて置いて貰ひます。水差へは自分で手が屆きますし、まだ片方の手は利きますものですから。え、ここに小さい鈴がゐましてね、呼び鈴なんで

すけれど、時々見に來てくれます、有難い事に。たつた今しがたまで此處に居りましたが……。お遣ひではございませんでしたかしら？　ほんとに綺麗な、色の白い子で。その子が花を持つて來て來てくれますの。私はそれは好きなんですものね、花が。こちらには庭の花はありません――前にはあつたのですけれど、今はもう根が絶えてしまひました。でも野の花も良いもので御座いますね、庭の花よりか、ずつと香りがよいものです。あの鈴蘭なんか……何よりもいい匂ひがいたします わ！』

『それで、可哀さうに、ルケリヤ、お前は退屈だとも、氣味わるいとも思はないのか？』

『だつて仕様がないぢや御座いませんか？　わたし、嘘を申すのは厭やで御座いますから申しますが――最初は、ずゐぶん大儀でした。ですけど、後にはだんだんと慣れて來て、ずつと辛抱强くなりました――もう何とも思ひません。他所様には、もつと悪い方も御座いますからね。』

『それは又どういふことなんだ？』

『でも雨風を凌ぐところもない人もありますわ！　さうかと思ふと、目の見えない人や耳の聞こえない人もあるし、私はお蔭様で眼もはつきりして居りますし、何でも、何でも聞こえますものね。土龍が地面の下へ穴を掘つて入れば――それさへ聞こえます。それに

どんな匂ひでも、たとへどんなに幽かな匂ひでもわかります！　畑の薔薇や、お庭の菩提樹に花が咲けば――聞かなくても分かるくらゐで、私が一番さきに知るので御座いますよ。とにかくそちらの方から風が少しでも吹いて參りますればね。いいえ、なんで神様を恨むことが御座いませう？　私よりもずつと惡い人がたくさん居りますのにね。ここなんでございますよ、達者な方はよく罪に陷ちやすいのでございますが、私はもう罪には緣がなくなりました。ついこの間、お坊さまのアレクセイ神父様が聖餐を授けようとなすつて、その節おつしやいますのには「お前さんは懺悔をするがものはない、かうしてゐては罪も犯せまいの？』つて。ですけど、わたしはお答へしました、「心の中の罪はどうしたもので御座いませう？」すると「まあ、それは大した罪ではないよ」とおつしやつて、お笑ひなさいましてね。』

『ではございますが、私はそんなに心の中の罪も犯しては居りませんでせうよ。』と、ルケリヤは續けた、『何故と申して、物事を考へたり、わけても昔のことを思ひ出したりしないやうにと、自分で慣らして參りましたものね。ですから月日は一そう早く經つてしまひましてね。』

白狀すると私は全く驚ろいてしまつた。『ルケリヤ、おまへは始終獨りでゐるのに何う

して考へ事が頭に浮ばないやうに能きるんだ？　それとも何時も眠つてゐるのか？』

『お、いいえ、旦那様！　いつも眠れるとばかりは參りません。大した痛みはないとはいふものの、身體の心や骨が痛みましてね、それで、思ふやうに眠れないのでございます、ほんとに……。けれど、まあ、かうして此處に獨りで横になつて居ります。かうして居りまして何も考へません。ただ生きてゐて、息をついてゐることを感じますばかりで、そのことが精々なんでございますよ。見たり聞いたりはいたします。蜜蜂が巣の中でぶんぶん唸つてゐたり、鳩が屋根のうへにとまつてくうくういつてゐたり、雌鷄が雛をつれて麵麭屑などをつつきに出て來たり、雀が飛び込んで來たり、蝶が舞ひ込んだり――こんなことがとても私には氣持がいいのです。一昨年はその向うの隅へ燕までが巣をかけまして、子どもを孵しました。それはそれは面白うございましたよ！　一羽が巣に飛び歸つて、すり寄つて雛に餌をやると、また飛んで行つてしまひます。それからまた見ると、ほかのがもう入れかはつてゐます。どうかしますと開いてる戸口の傍を通つたばかりで、飛び込まないで行つてしまふことがございます。すると子どもが直ぐにちいちい鳴いて、嘴をあけてゐます……。私は翌くる年も來るのを待つてゐましたのに、聞けばこちらの獵師が鐵砲で擊つてしまつたさうでございます。あんなものを獲つたつて何になりませう？　燕なんか

大きさは甲蟲と同じくらゐなのですものね……。何て貴方がたは意地悪なんでございませう、獵をなさる方は！』

『僕は燕なんか擊たないよ。』と、私は急いで言つた。

『でも一度、』と、ルケリヤはまた始めた、『それは可笑しいことがございましたよ！ 兎が飛び込んで來ましてね、ほんとに！ きつと、犬にでも追はれてたのでございませう、とにかく戸口から轉げ込むやうに入つて來ましたの！……すぐ傍へうづくまつて、——ずゐぶん永いこと坐つて居りました。始終、鼻を動かして、髭をぴくぴくさせましてね——それこそ軍人さんか何ぞのやうに！ そして私の方を見るのです。多分、私が怖いものでないといふことが分かつたのでせう。たうとう立ちあがつて、戸のところまで跳ねて行つて、敷居の上から、あたりを見廻しました——その樣子といつたらどうでせう！ それは可笑しかつたのですよ！』

面白くはないか……とでもいふやうにルケリヤは私の方に眼を向けた。私は相手の氣に入るやうに、ちよつと笑つた。ルケリヤは渴いた唇を咬んだ。

『それで冬になりますと、どうしても餘計に惡くなるのでございますよ、暗いものですからね、蠟燭を點すのも慘めですし、それに、つけたつて何になりませう？ 讀み書きだ

けは知つてますし、讀むのも何時も好きですけれど、何を讀みませう？ ここには本など一冊もございません。よしあつたとしましても、どうしてそれを持つてゐることが能きませう、本など？ 氣晴らしにといつてアレクセイ神父さんが曆を持つて來て下すつたのですが、何の役にも立たないとお考へになつて、また持つて行つておしまひになりました。尤も、暗いことは暗いのですけれど、始終、何か聞こえるものがあつて、蟋蟀が鳴いたり、鼠がどこかで音を立ててゐたり。こんな工合ですから、何も考へない方が——いいのでございますよ！』

『それから私もお祈りはいたして居りますの、』と、ルケリヤは少し息をついて、話をつづけた、『ただ私、あまり澤山お祈りの言葉を存じませんのですけれど。さうかといつて、神樣をうんざりさせるには當りませんものね？ それに私に何をお願ひすることがございませう？ 私のお願することは神樣の方が私よりずつとよく御存じです。神樣は私に十字架を授けて下さいました——これは私を愛して下さるからでございます。ですから、もう私達はそのことをよく悟らなければなりません。で、私は「われらが父よ」、「聖なる母よ」、「惱めるものへの讃美」などを誦んで、——それからまた何も考へないで、靜かに横になつて居ります。それで何ごともないのでございますよ！』

二分間ほど經つた。私は沈默を破らずに、腰掛にしてゐた細い桶のうへに身動きもしなかつた。私の前に横たはつてゐる、この生きてゐる不幸な生物の酷しい石のやうな靜けさが私にも傳はつて來て、何だか私も痺れたやうになつた。

『あのね、ルケリヤ、』と、私はたうとう口を切つた、『お前に申し出たいことがあるんだがな。實は病院へ、町のいい病院へ連れてゆくやうに言ひつけようと思ふんだが、どうだらうな？　なあに、分かるものか、多分まだ癒せるだらうよ。とにかく、お前を獨りで置くわけには行かない……』

ルケリヤは微かに微かに眉を動かした。『おお、いけませんわ、旦那樣、』と、迷惑さうに低い聲で言ふ、『病院へなぞ遣らないで下さいまし、そつとしといて下さいまし。そんなところへ行けば、却つて苦痛を増すばかりですから。もう斯うなつては何うして癒せるものですか！……さういへば、日外はお醫者がこちらへ參りまして、私を診察したいと仰つしやいました。私はどうぞ後生ですから、この儘にして置いて下さいとお願ひしました。けれどもお取り上げにならなかつて！　私をあちこちへ向き直らせて手や足を揑ねましたり、伸ばしたりしましてね、そして仰つしやいますには、「自分は學問の爲に、かういふことをするんだ。自分は學問に身を捧げてゐる者だ、學者だ！　それでお前は儂に

逆らふわけには行かない、何故といふのに、自分は色んな功勞があつたので、勳章も貰つてゐるのだ、そしてお前たち、愚民のために盡力してゐるんだ」つて。そして無暗にそこいらを痛くして、病氣の名を言ひました——隨分ややこしい名前でした——そして、そのまま、行つてしまつたのです。ところが、それから丸一週間といふもの、骨といふ骨が痛みましてね。貴方は「獨りでゐる、いつも獨りでゐる」と申しますけれど、いつもではございませんの。人が來てくれますのでね。私はおとなしくしてゐて——別に厄介はかけません。お百姓の娘たちが遊びに來ては、冗談を言ひ合ひますし、女の巡禮が迷ひ込んで來てはイェルサレムの話をしたり、*キーエフの話や聖い町々の話をしてくれますし。それに私は獨りでゐてもちつとも怖くはございません。却つてその方がいい位です、ほんとに！……ですから、旦那樣、どうか私にお構ひなく、病院へなんぞ連れて行つて下さいますな、……御親切はありがたう御座いますけれど、ただ、どうか私にお構ひ下さいませんやうに。』

『そんなら、お前の好きなやうに、好きなやうに、ルケリヤ。僕はお前のためを思つて言つて見ただけなんだから……』

＊ キーエフは昔の都で、ここには大きな寺がたくさんある。ここは「聖い町の母」と呼ばれてゐた。（譯者註）

『よく存じて居ります、旦那様、私のためを思つて下さることは。さうですわ、旦那様、けれど誰が他人を助けるなんてことが能きるものでございませうか？　誰が他人の心の底まで立ち入れるものでございませうか？　人は自分で自分の始末をして行かなきやなりません！　まさかとお思ひになるでせうが――私も時をりは、たつた獨りで寢んでゐて、……何だか世の中に私ひとりだけが生きてゐるやうな氣がします。たつた獨り――私だけが生きてゐるやうに！　そして、何だか勿體ないやうな氣がして來ます……。私はすつかり考へ込んでしまひます、不思議なほど！』

『一體、どんなことを考へ込むんだね、ルケリヤ？』

『それは、旦那様、どうしてもお話し能きませんの、説明が能きませんの。それに、後になると忘れてしまふのでございましてね。何か雲のやうなものが下りて來て、それがぱつと擴がるかと思ふと、氣が清々して、いい心持になるのでございますね、ところが、それは何であつたかと申されると、さつぱり分かりませんの！　ただ若し私のそばに人が居りますと、そんなものは何もなくて、自分の不仕合せといふことより外に、何ひとつ思はないだらうと、さういふ氣がするのでございます。』

ルケリヤは苦しさうに溜息を洩らした。胸も、その手足と同様に自分の思ふやうにはな

らなかつたのである。

『旦那様は大へん私のことを氣の毒がつて下さるやうにお見受け申しますが、そんなにお氣の毒がられるにはあたりませんの。どうか、あんまり氣の毒がつて下さいますな、ほんとに！　御安心をいただくために、一寸お話致しますけど、どうかしますと今でも……。覺えていらつしやるでせうね、若い時分に、どんなに私が陽氣だつたか？　わたし、向う見ずの娘でしたわ！……それで、どうでしたらう？　わたし、今でも歌をうたひますのよ。』

『歌を？……おまへが？』

『ええ、歌を、古い歌を、踊りのや（ハラワオド）、*占ひのや（うらな）**十二日節のなど何でも歌ひますの。わたし、今でもたくさん知つてゐて、忘れないんで御座います。ただ普通の踊りの歌は歌ひません。今の身分では仕方がございませんから。』

『一體、どんな風に歌ふの、……自分ひとりのために歌ふのか？』

『ええ、さうですの、聲を立てて。大きな聲は出ませんけれど、それでも人に分かるく

* 皿の下に物を置いて、占ひをする時、皿を取り卷いて女たちは歌をうたふ。（譯者註）

** クリスマスから耶蘇洗禮祭（一月六日）まで。（譯者註）

らゐに。あの、さつきお話しましたでせう――娘が來るつて。あれは孤し兒で、よく分かる子でございますよ。それで、私はあの子に歌を敎へましてね、もう四つほど覺えました。ひよつとしたら本當になさらないでせうね？　では一寸お待ち下さいまし、直ぐにお聞かせ申しますから……』

ルケリヤは息を繼いだ……この半ば死にかかつてゐる生物が歌を歌はうとしてゐるのだといふ考へは、思はず私のうちに恐怖を喚び起こした。しかし私が一言もいひ出さないうちに、私の耳には、長々とのばした、殆んど聞きとれない位の、しかも淸く澄んだ、しつかりした聲が響いて來た……續いて二聲、三聲と。ルケリヤは「草場のなかで」を歌つた。彼女は化石したやうな顏のけしき一つ變へずに、眼さへ一ところに据ゑたまま歌ふのであつた。とはいへ、このあはれな、力をこめた、細い煙のやうにふるへ勝ちな聲はたとへやうもなく哀切なひびきをもつてゐた。彼女はその魂の全部を注ぎ出さうとしたのである……。私はもう恐怖の念は感じなかつた。いひ知れぬ憐憫の情が私の胸に惻々と迫るのであつた。

『ああ、やつぱりいけない！』と、不意に言ふ、『力が續きません……お眼にかかつた嬉しさに胸が詰まつてしまひました。』

彼女は眼を瞑ぢた。

私は彼女の小さい、冷たい指のうへに自分の手を置いた……。彼女は暫らくぢつと私を見てゐた、――が、間もなく古代の彫像に見るやうな、金色の睫毛におほはれた暗い瞼は再び瞑ぢられてしまつた。それも暫らくすると、その眼は薄暗い中で輝やいた……。眼は涙に濡らされた。

私は相變らず身じろぎさへもしなかつた。

『わたし、何ていふお馬鹿で御座いませうね！』と、ルケリヤは思ひもよらぬ力のある聲で不意に言つて、眼を大きく見開き、瞬きをして涙を散らさうとした。『お恥づかしうございます！　まあ、どうした事でございませう？　こんなことつて、永らく無かつたことでございます……去年の春、ワーシャ・ポリャコフが此處へ來ました時からでございます。あの人が一緒に腰をかけて、話をしてゐました時は――何ともございませんでしたが、行つてしまはれると、私は獨りぽつちになつて、どんなに泣きましたらう！　どうして涙などこぼしたのでせう！……けれど、私ども女なんてものは、何でもないことに涙を流すものでございますのね。』といつたが、『旦那樣、』と、ルケリヤは附け加へた、『きつと貴方はハンカチをお持ちでございませう……。お厭やでもございませうが、ちよつと私の

眼を拭いて下さいまし。』

私は急いで、望み通りにしてやつた、――さうしてハンカチをそのままルケリヤにやつた。初めのうちは辭退した。……『こんなものを戴きまして、どういたしませう？』と言つた。ハンカチはかなりお粗末なものではあつたが、きれいで白くはあつた。やがて彼女は弱々しい指でつかんで、もう二度と放さうとはしなかつた。二人のゐる暗がりに馴れて來たので、私は女の容貌を、はつきりと見わけることが能きた、その顏のブロンズの下に、ほんのり見える淡い紅らみさへも認めることが能きた。少くとも私にはさういふ氣がしたのであるが、その顏のうちに、美はしい昔の名殘さへもさぐり得たのである。

『旦那樣、あなたは眠れるか？　とお訊ねになりましたね、』とルケリヤはまた話し出した、『眠るのは本當にたまさかでございますが、眠ると、きつと夢を見るので御座いますよ――よい夢を！　夢の中ではいつも私、病氣ではないんでございますよ。いつも丈夫で、それに若いんでございましてね……。たつた一つ悲しことには、眼がさめた時に――樂々と伸びがしたいと思ふのに、――それどころか、まるで鎖でつながれてゐるやうなので御座います。いつかは、何て不思議な夢を見たのでせう！　若し、およろしかつたら、お話いたしませうか？　ぢや、お聞き下さいまし。氣がつくと、私は野原の眞ん中に立つてゐ

ました。あたりにはライ麥、それは背の高い金色に熟れたライ麥がございましてね！……私は赭い犬を連れて居りました。それが意地の惡い、それは意地の惡い犬でして、しよつちゆう私に嚙みつかう、嚙みつかうとするのでございます。私はそれから手に鎌を持つて居りました。それもただの鎌ではなくて、あのお月樣が鎌のやうになることがございますね、あれにそつくりなのでございます。私はこのお月樣で、このライ麥をすつかり刈り取らなければならないのでした。けれど私はすつかり疲れ切つて居りました。月は眼をくらくらさせますし、それに何だか妙にだるくなりましてね。ところが私のまはりには矢車菊が、それは大きい矢車菊が生えて居りましてね！　それがみんな私の方へ頭を向けて居りました。私はこの矢車菊を摘んでやらうと考へました。ワーシャが來る約束をしてゐたものですから、まづ花環をこしらへようと思つたのです。麥を刈るのはそれからでも遲くはあるまい……。私は矢車菊を摘み始めました。けれど、いくらしても、みんな指の間から何處かへ消えてしまふのです。どんなにしても花環が編めない。そのうちに誰かが傍へやつて來る。すぐ傍までやつて來る音がしまして、「ルーシャ！　ルーシャ！」と呼ぶのでございます……ああ、殘念だ、たうとう間に合はなかつた！　と、私は考へました。でも、どつちにしたつて同じことだと思つて、私は矢車菊のかはりに、お月樣を頭のうへに載せ

ました。頭飾(コロシニク)りのやうにお月様を載せたのでございますよ。すると急に身體ぢゆうが光り出して、あたり一面が明るくなりました。ふと見ると――穗のうへを傳つて足早にやつて來る――それはワーシャではなくて、紛れもない基督様なので御座います！　どうしてそれが基督様とわかつたのか、それは言へませんの……繪に書いてあるやうな基督様とは違ひますけれど、やつぱりあのお方なのです。髯のない、背の高い、お若い御方で、眞白づくめにしていらつしやいました――帶だけは金色でございましたけど。そして私の方へ手をさしのべて仰つしやいますには、「怖れなくともよい、着飾つた可愛いい嫁御、儂の後について來るがよい。お前は天國の踊(ハラウオド)りの指揮者になつて極樂の歌を歌ふがよい。」　私は思はずその御手におすがり申しました！　犬はすぐ私の足について來ます……、ところが私たちは上の方に舞ひあがり始めました！あの御方がお先に立つて……。基督様のお翼(はね)は鷗のやうに長いお翼で、空いつぱいにひろがりました――わたしはその後について參りました！　犬はどうしても後に殘らなければならなくなつてしまひました。そこで、私はこの犬が私の病氣であつたこと、天國には、もうこの犬の居どころがないのだといふことが、やうやく分かつたのでございます。』

ルケリヤは一寸の間、默りこんだ。

『それからもつと夢を見ましたの、』と、また話し出した、『それは、ひよつとすると幻だつたかもわかりませんが――それはもう、しかと分かりません。私はこの小舍の中に寢てゐるやうに思ひました。すると亡くなつた兩親が參りましたの、お父さんとお母さんと、私に向つて丁寧にお辭儀を致しましたが、お二人とも何とも仰つしやらないんでございます。ですから「お父さん、お母さん、私にお辭儀をなさるんですか？」と、訊きましたの。すると「實はお前がこの世で大へんな苦しみをしてゐる、そのためにお前は自分の魂を和らげたばかりでなく、私たちの大きな重荷をも卸してくれた。だから私たちはあの世でも大へん氣樂なのだよ。お前はもう自分の罪とは緣が切れてしまつて、今では私たちの罪ほろぼしをしてゐて呉れるのだ。」と申しました。そしてこれだけのことを言つてしまふと、兩親はまたお辭儀をして――ふつつりと見えなくなつて、見えるのは壁ばかりになりました。それから私は、このことが何んなことだつたのか、不思議になりました。懺悔の時にお坊様にもお話いたしました。尤も、お坊様は、それは幻ではあるまい、幻といふものは坊さんにだけ見えるものだからとお決めになりました。』

『もう一つこんな夢を見たのでございますよ、』とルケリヤは話し續けた、『何でも私は往還の柳の下に腰をおろしてゐましたの、ぐるりを削つた小さな杖を持つて、頭陀袋を肩

にかけて、手帕で頭をつつんで――まるで巡禮の女のやうなんでございます。そして私はどこか遠い遠い所へ巡禮して行かなければならないのでした。巡禮はしよつちゆう私の側を通つてゐます。誰もが疲れ切つた顔をして、みんな、お互ひによく似てゐる顔なのです。すると、その人たちの間をぐるぐる廻つてゐる一人の女の人がゐるのです。他の人より頭だけくらゐ脊が高くて、着てゐる着物は私たちの露西亞風のではないらしく、妙に變つてゐました。顔も妙な顔で、痩せ衰へた嚴い顔でした。そして誰もがみんな傍へよけて行くのです。その人は急に振り返つて傍目もふらずに私の方へやつて來ました。ぢつと立ちどまつて私を見てゐます。その眼は鷹のやうで、黄色くて、大きくて、とても澄んでゐるので御座います。「どなたですか?」と訊きますと、その人は「わたしはお前の死神だよ、」と申しました。私はちつとも驚ろくどころではなく、かへつて嬉しくて嬉しくてたまらないので、十字を切りました! すると私の死神だといふ女の人の申しますには「ルケリヤ、私はお前が可哀さうだけど――連れて行けない、――さよなら!」つて。ああ! 私はどんなに悲しうございましたらう!……「連れてつて下さいまし、お母さん、どうか連れてつて!」と申しますと、私の死神は私の方に振り向いて、話をしはじめました……。わたしの死期を知らせて下さるのだとは分かりましたが、はつきりしない、譯のわからない言

葉でした……。「*ペトローフキが濟んでから」つて……。私はこの言葉を聞いて眼が覺めたのでございます……。私はかういふ不思議な夢を見るんでございますよ!』

ルケリヤは眼を上の方へ向けて……深い感慨に沈んだ……。

『ただ悲しいことには、一週間の間、ちつとも眠れないで暮らすことがございます。昨年ある奥方がお見えになりまして、私を御覽になつて、睡眠藥を一壜下さいました。そして一度に十滴づつ飲むやうにと敎へて下さいました。それが大へんよく効きまして、よく眠れたものでしたが、もうその硝子の壜は疾うに空になつてしまひました……。御存じでいらつしやいませうか、あれはどんなお藥で、どうしたら求められるものでございませう?』

訪ねて來た婦人はルケリヤに阿片をやつたものに相違ない。私はさういふ藥を一壜やることを約束したが、今更ながら彼女の辛抱づよいのに驚嘆の聲をあげない譯には行かなかつた。

『まあ、旦那樣!』と彼女は言ひ返した。『貴方はどうしてそんなことを? これが辛抱などと何うしていはれませう? あのそれ、聖シメオンね、あの方の辛抱づよいのは大

＊ペトローフキ……聖ペトロ祭(六月二十九日)前の精進期(譯者註)

へんなもので御座いました、三十年もの間、柱のうへにお立ちになり通したので御座いますものね！　そのほか或る聖徒は自分から胸のところまで土の中へ埋まつてゐると、蟻が顏を食べたのでございますね、……それから、これは或る先生*が私に聞かせて下すつたお話でございますが、或る國があつて、その國を土耳古人が侵略いたしました。それで國中の人を一人殘らず苦しめたり、殺したりして住民の方では能きるだけのことを致しましたが、どんなにしても敵から免れることは能きませんでした。すると、その國の人の中に聖女が現はれて、大きな劍を取つて、二プード（九貫目）もある甲冑をつけ、敵の土耳古人に對つて出陣いたしました。そして敵を悉く海の向うへ逐ひやつたと申します。ですが、敵を追ひ拂つてしまふと、處女は「今は私を火刑にして下さい、國民のために火刑になつて死ぬといふのが私の誓ひであつたのだから」と敵に對つて申しました。――そこで、土耳古人は處女を捕へて火刑にしました。この時からその國民は永久に自由になつたさうです！　これこそ本當に大手柄でございますね！　それなのに私はどうでございませう！』

私は何處をどうしてジャンヌ・ダルク**の物語がこの女の耳に入つたのかと、我ながら驚ろいた。そして暫らく默つてゐた後で、ルケリヤにその處女は手齡はいくつであつたかと訊いて見た。

『二十八か……九……三十にはなりますまい。でも、なんで年齡など勘定なさいますの！　私はまだお話することがございます……』

ルケリヤは不意にむせたやうな咳をして、溜息をついた……

『おまへ、あんまり話をするから』と、私は言つた、『それがいけないんだらう。』

『さうでございます、』と、やつと聞きとれる位の聲でささやいた、『もうお話をやめた方がよいのです。でも、そんなこと構ひませんわ！　今に貴方が行つておしまひになれば、思ふ存分に默つて居られますものね。とにかく胸がすつきりいたしました……。』

私は別れを告げようとしてゐた。藥を送る約束を繰り返して、もう一度考へて見た上で何か欲しいものがあつたら言つてくれと促した。

『何も欲しくはございません、このままで澤山でございます、お蔭様で、』と、極めて大儀さうに、しかも感動したらしく言ふ、『どうか皆様お達者で！　ですが、旦那様、お母様に一言申し上げて下さいまし――この邊の百姓は貧乏でございますから――若し、幾分

* 先生……これは村で普通の人に讀み書きを敎へる人を指す。（譯者註）

** ジャンヌ・ダルクの敵は英國人（アングリチャーニ）であつた。ルケリヤが話すのは土耳古人（アガリチャーニ）である。私は音がいささか似てゐるので、誤つてから傳へられたのだと思ふ。（譯者註）

でも小作料を減らしていただけたら！　百姓たちは土地も足りませんし、利もございません……さうして戴けたら、貴方をどんなにか有難がることでございませう……。ですけれど、何も私は欲しいものはありません、――私はこの儘で何もかも澤山でございます。』

私はルケリヤの願ひを叶へてやらうと誓つて、既に戸口まで歩み寄つてゐた、……すると、彼女はまた私を呼び戻した。

『覺えていらつしやいませう、旦那様、』と、彼女はいつた、その眼のうち、唇の上には何かしら奇蹟的なものが閃いた、『私がどんなお下髪をしてゐましたか？　覺えていらつしやいませうね、膝まで屆くやうな！　私は永いこと思ひ切れませんでした……、あんな髪を！……けれど、どうして梳いたりなんぞ能きませう？こんな境遇で！……ですから私は切つてしまつたのでございます……さう……それでは、さようなら、旦那様！　もうお話ができません……』

その日、獵に出かける前に、私は別莊の監督とルケリヤの話をした。私は監督からルケリヤが村では「生神様」といはれてゐること、あんな風でゐながら少しも村の人に厄介をかけないこと、また愚痴や不平を聞いたことがないことなどを話された。『自分では何をしてくれとは申しません。それでゐて何をしてやつても有難がるのです。まあ、素直な人、

本當に素直な人といはなければなりますまい。神様から、』かういつて監督は言葉を結んだ。『罪があつたために打ちのめされたのだと思ふ人もありませうが、私どもはさうは思ひません。まあ、かりに、罪があるかないかを決めるとしたら――いや、私たちはそんな裁きは致しません。そつとして置くことです！』

*　　*　　*　　*　　*

數週間の後に、私はルケリヤが亡くなつたといふことを聞いた。つまり死神が後から……しかも「ペトローフキが濟んでから」やつて來たのである。人の話によると、臨終の日、ルケリヤは絶えず鐘の音を聽いてゐたといふ――アレクセィフカから教會までは五露里の餘もある上に、その日は日曜でも祭日でもなかつたのに。それにしても、ルケリヤはその音が教會からではなく、「上から」聞こえて來ると言つたさうだ。――おそらく、彼女は敢へて「天から」とは言はなかつたのであらう。

音がする！

『ちよつと申し上げて置くけんど、』と、エルモライが小舍の中へ入つて來て言つた、—私は食事を終へたばかりで、かなり獲物はあつたけれど、松鷄（えぞやまどり）をさんざんに追ひ廻して疲れたので一寸やすまうと思つてキャムプ用のベッドに横になつたところであつた、—頃は六月の中旬で、暑さは嚴（きび）しかつた……『申し上げて置くちうのは、彈丸（たま）がみんな無くなつてしまつた事です。』

私はベッドから跳ね起きた。

『無くなつたつて！　そりや又、どうして！　村から大かた三十フント*も持つて來たんぢやないか！　袋一杯！』

『そりやさうでがす。大（で）かい袋でやんしたから、二週間分（ぶり）はたつぷりありやんした。で

＊　一フントは凡そ我が一〇九匁にあたる。四十フントが一ブードとなる。（譯者註）

もどういふ譯だかさつぱり分かんねえ！　綻びでも出來ましたかな。何せ、全く彈丸はありましねえ……それでも十發くれえは殘つてまさ。』

『ぢやどうしたもんだらうな？　一番いいところを前に控へてて――明日は雛つ子をつれたのを六組くらゐは間違ひなしなんだが……』

『それぢやトゥラまで遣つて下せえ。ここからは遠かありません、みんなで四十五露里でさ。行つて來いつて仰つしやりあ一いきに飛んでつて、彈丸もつて來まさ、一ブード位。』

『でも、いつ行かうつて言ふんだ？』

『今すぐでも。ぐづぐづしちやゐらんねえでせう？　ただ一つ、何ですね、馬を賴まなくちやなりますめえ。』

『どうして馬を雇ふんだ！　こつちの馬ぢや駄目なのか？』

『こつちの馬ぢや行けましねえ。軸馬め、跛をひき出しちやつたもんですからね、ひどく！』

『いつから、そんなになつたのか？』

『そらあ此の間、別當が蹄鐵打ちに連れて行きやんしてね。それで蹄鐵は履かせました

がの。鍛冶屋が運わるく下手くそだつたと見えましてね。今ぢや、そろそろ踏むことも能きましねえ。痛めてるなあ前足でしてね。そいつを奴あ擧げたつきりでさ――犬みてえに。』

『さうかなあ？　せめて蹄鐵だけは脫つてやつたらうな？』

『いんえ、まだ脫りましねえ。でも、どうしたつて、脫がしてやんなくちやなりません。釘がきつと肉ん中へぶち込まれてるんでやんせう。』

私は馭者を呼んで來さした。エルモライが嘘をいつたのでないことが分かつた。軸馬はたしかに足をつけることが能きなかつたのである。私は直ぐに蹄鐵をとつて、濕つた粘土のうへに立たして置くやうにと言ひつけた。

『それで、どうでやんせう？　馬を雇つてトゥラへ行けと仰つしやるんでやれせうか？』と、エルモライは私にうるさく附きまとふ。

『だつて、こんな邊鄙なところで馬が雇へるのかえ、一たい？』と、私は思はず、じれつたくなつて呶鳴りつけた……。

私たちのゐた村は人の目にもつかないやうな、人煙稀れなところで、村の住民は悉く一文無しらしかつた。私たちは一軒の――煖爐があるといふのではないが――それでも相當

に廣い小舍を見つけるのに、かなりに骨が折れた。

『雇へまさ、』とエルモライはいつものやうに平然として答へる、『この村あ旦那の仰つしやる通りでやんすけんど、そんなに仰つしやられるこの村に、一人の百姓が居りやんしてね。えらい悧巧な奴で、大盡でがしたよ！　馬も九匹も持つてやんして。そいつはもう死んぢまつて、總領息子が後を全部やつてますがね。こいつは馬鹿の馬鹿の大馬鹿でやんすけんど、まあだ親父のこせえた身上を棒に振つてもしめえましねえ。あいつに頼んだら馬あ出來ますべえ。よけりや行つて連れて來まさ。あいつの兄弟は拔け目がねえ奴等ださうだけんど……やつぱり、あいつが頭でやんすかんね。』

『そりや又どうして？』

『どうしてつて――一番の總領でがせう？　つまり年の下な奴あ――言ふこと聽かなくちやなんねえんだ！』と言つてエルモライは一體に弟といふものに對して、筆も及び難いほどの氣焰を吐いた、『あいつを連れて來まさ。あいつはお芽出たい奴だから、口說きおとせねえことはねえでせう？』

エルモライが彼のいはゆる「お芽出たい」男を呼びに行つてゐる間、私はいつそ自分でトゥラへ出かけて行つた方がよくはないかといふ考へを起こした。第一に私は今までの經

驗に徵してエルモライをあまりあてにはしてゐなかつたのである。或る時、町へ買物にやつたところ、一日のうちにすつかり賴んだことを果すといふ約束をして行きながら、一週間も行方を晦まして、金は殘らず飲んでしまひ、行きには馬車で行つたものが、歸りには歩いて歸つて來たことがあつた。第二には、私はトゥラへ行けば知合ひの博勞がゐる。だから、馬を一匹その男から買つて、跛をひいてゐる軸馬に代へようと思つたのである。

「それに決めた！」と私は考へた、「自分で行つて來よう、途中でも眠れるし――幸ひ、この馬車は寢心地もよいことだし。」

*　　*　　*

『連れて參りやんした！』と、エルモライは十五分ほど經つてから小舍に駈け込んで來て叫んだ。後ろからは白い襯衣を着て、青い股引に木の皮沓をはいてゐる背の高い百姓が入つて來た。眉も睫毛も眞白く、眼が弱く、楔形の赤髯に長い膨れた鼻をして、ぽかんと口を開けてゐる。彼はたしかに「お芽出たい男」に見える。

*　楔形の髯……これは前にも屢々あらはれてゐるが、楔形、すなはちV字形の髯で、純日本風にいふと「天神髯」のことである。（譯者註）

『ほら、旦那、』と、エルモライがいふ、『この男あ馬もつてますよ、――して、言ふこと肯いたんでさ。』

『さよで、はい、私は、……』と百姓は少し嗄れた聲で、もじもじしながら言ひ出した、薄い髪の毛を振つて、手に持つてゐた帽子の縁を爪ぐりながら……『私は、はい……』

『お前の名は何ていふ?』と、私は訊ねる。

百姓は俯向いて、ぢつと考へてゐる樣子であつた。『私の名前でごぜえますか?』

『うん、何ていふんだ?』

『まあ、私の名前は――フェロフェーでせう。』

『それぢや、どうだね、フェロフェー君、君んとこに馬がゐるさうだね。三頭のを一組ここへ持つて來てくれまいか、――それを私の馬車へつけるんだがね――なあに、馬車は輕いんだ、――そしてトゥラまで案内してくれまいか。丁度、今は月夜で明るいし、乘つてゆくのにや涼しいし。ところで、こつちの方の道はどうかな?』

『道でやんすか? 道は――何ともありません。本道までは二十露里はありやんせう――全部で。ただ、ほんの一ところ……無氣味なところがありますけんど、ほかには別に大したことはありません。』

『無氣味なところつて何んなところかね?』

『へえ、小さい川の淺瀨を越さなきやなりませんのでな。』

『でも旦那は御自分でトゥラへ行くんぢやありませんか?』と、エルモライが聞き質す。

『さうさ。』

『へえ!』と言つて私の忠實な下僕は頭を振つた。『へえい!』と繰り返して、唾を吐くなり、外へ出て行つた。

トゥラ行きが最早エルモライの眼に全く魅力を失つてしまつたことが、ありありと見える。エルモライにとつては、つまらない、面白くも何ともないことになつてしまつた。

『道をよく知つてるかえ?』と、私はフィロフェーを顧みた。

察するところ、エルモライはフィロフェーを雇ふのに、この男は馬鹿であるからといふので、金は拂ふ……と、ただそれだけのことをいつて、その上よく納得の行くやうに言つてやらなかつたらしい! フィロフェーは馬鹿は馬鹿でも――エルモライの言葉だが――ただそれだけの話では得心が行かなかつた。そこで彼は手形で五十留くれと私に請求した――まことに法外な値段である。私はもつと廉く――十留ならば出さうといつた。私たちは値段の掛引をやり出した。フィロフェーは初めのうちは頑强であつたが――やがて、だ

んだんとではあるが讓歩して來た。ほんの一寸の間、エルモライが入つて來て私に口添へし始めた、『この馬鹿は――（といふとフィロフェーが『あれ、また十八番が始まつた！』と低い聲でいつた）この馬鹿は錢勘定をまるで知んねえんですよ。』これは序でであるが、私はこの言葉を聞いて、私の阿母さんが二つの國道の行き合ふ人込みの場所へ建てた旅館が二十年ほど前に、全く不振に陥つたことを思ひ出した。それといふのは番頭にして置いた年寄の家隷がまるで錢の勘定を知らずに、數さへ多ければ餘計なのだと考へてゐた――つまり一例をとつていふと、五哥*の銅貨を六枚やるべきところを二十五哥銀貨一枚やつて、しかも散々に惡態をつくといふやうな始末だつたからである。

『やい、てめえ、フィロフェー、本當のフィロフェー！』と、遂にエルモライが呼び立てた――が、腹立たしげに戸をぴしやりと閉めて出て行つた。

フィロフェーはさういはれても何の口答へもしなかつた。彼はフィロフェー**と呼ばれるのはたしかに餘り氣の利いたことではない、これは洗禮の時に當り前の名前をつけてくれなかつた坊さんが實際に惡いのだ、さうは言ふもののこんな名前をつけてゐられる以上は、馬鹿にされても仕方がないと觀念してゐるらしかつた。

それでもたうとう私たちは二十留といふことで話がついた。フィロフェーは馬を連れに

歸つたが、一時間ほども經つて擇りどりの能きるやうに五頭つれて來た。馬は鬣や尾がひどく縺れて、腹は大きく、太皷のやうに張つてゐたが、なかなか躾けのいい馬であつた。フィロフェーと一しよに二人の弟もやつて來たが、二人とも兄には少しも似てゐなかつた。小づくりで、眼が黑く、鼻の尖つた者どもで、たしかに「すばしこい」奴だといふ印象を與へる、――早口に盛んに話をする。エルモライの言ひ草だと「ほざく」のである、けれども兄のいふことはよく聽いてゐた。

彼等は檐の下から馬車を引き出して、一時間半ほどは車と馬にかまけてゐた。綱の挽索をゆるめたり、それをしつかりと、更にしつかりと締め直したりした。二人の弟は「葦毛」を軸につけようと切りに望んでゐた。そのわけは『きやつは下り坂が得手だから』といふのであつた。然しフィロフェーは「尨毛」の方に決めてしまつた。そこで尨毛が軸馬としてつけられた。

馬車には干草をぎつしり詰めて、腰掛の下には跛になつた軸馬の頸圈を入れた――それ

* 昔は五哥銅貨五枚は二十五哥銀貨一枚と同價であつた。それが一八四三年一月一日以後は銅貨で二十五哥やつても銀貨では七哥半しか來なかつた。これはニコライ一世の定めた兌換制度によるもので、十哥銅貨は銀貨の三哥とおなじ價であつた。そこで、この例では、番頭は銀貨で十七哥半（銅貨に直すと五十八哥餘）を損したことになる。（譯者註）

** フィロフェー……稀れに見る名前で、聞く人に輕蔑の念を起させるほどのかなりに滑稽な名。（譯者註）

はトゥラへ行つて新しく買ふ馬につける必要があつた場合の用意である、……家へ駈けて行つたフィロフェーは長い白い親ゆづりの上衣（パラホン）を着て、高い麥稈帽子を冠り、靴墨をつけた長靴をはいて戻つて來たが、いとも嚴かに馭者臺に上つた。私も時計を見ながら座についた。十時十五分過ぎであつた。エルモライはわかれの挨拶もしないで、自分の犬のワレートカをしきりに打ちのめしてゐた。フィロフェーは手綱を引き絞つて、細い細い聲でいつた、『やい、こら、畜生！』――弟たちは兩側から駈け寄つて、添馬の腹を鞭うつた、すると馬車は動き出した。門を出て通りへ出ると、尨毛が自分の家の方へ向かうとしたが、フィロフェーが鞭を五つ六つ呉れて性根をつけた、――すると見る間に、もう私たちは村を出はづれて、繁つた胡桃の林が兩側につづく、かなりに平らな道に出てゐた。

靜かな、すばらしい、馬車を驅るには極めて良い晩であつた。風は低い木立をさらさらと吹き過ぎて、枝を搖すぶるかと思へば、聲もなく靜まりかへる。空にはあちこちに、ぢつと動かぬ銀色の小さな雲が見えて、月は高く皎々とあたりを照らしてゐる。私は干草のうへに身を伸ばして、もう微睡みかかつてゐた、……が、ふつと「無氣味な所」のことを思ひ出して、ぶるぶると身慄ひした。

『おい、どうだ、フィロフェーり。淺瀨まではまだ遠いのか？』

『淺瀨までですけ？　八露里くらゐありませう。』

「八露里、」と私は考へた、「して見ると、そこまで行くには一時間ではむづかしい。まあ、一寢入り（ひと）能きる。」そこで私はまた訊いた、『おい、フィロフェー、道はよく知つてるんだらうな？』

『だつて、どうして、それ、知んねえことありませう、道を？　初めて來る譯ぢやありもしねえのに……』

それから何やら言つてゐたが、もう私の耳には入らなかつた……私は睡つてしまつた。

*　*　*　*　*

よくあることであるが、恰度一時間で起きるつもりでゐながら、眼は覺めなかつた。一種奇妙な、幽かではあるが、ぴしやぴしや、ごうごうといふ音が寢てゐる耳の下で聞こえて來て、やうやく眼が覺めた。私は頭をあげた……。

何ていふ不思議なことだらう？　相變らず馬車の中に寢てはゐるが、馬車のまはりは――その緣から一尺あまりの所まで來てゐる水のおもてが月の光りに照らされて、ちらちらと細かな明るい漣をよせてふるへてゐる。前を見ると、馭者臺には頭を垂れ、背を屈めて、

彫像のやうにフィロフェーが坐つてゐる、その向うには、さわさわと音を立ててゐる水のうへに、軛の歪んだ線と馬の頭と背と。――ありと凡ゆるものが凝然と、音もなく、――まるで魔法の國か夢のなか、お伽噺の夢のなかにでも居るやうだ……。これは一體どうしたわけだらう？　私は馬車の蓋ひの下から見かへつた……。私たちは河の眞ん中にゐるのである……岸までは三十歩もある！

『フィロフェー！』と、私は叫んだ。

『何ですね？』と、言葉を返す。

『「何ですね」もないもんだ。冗談ぢやありやしない！　ここは一體どこだ？』

『河ん中でさ。』

『河ん中だ位は知つてるよ。だけど、かうしてゐちや沈んぢまふ。お前はいつも、かうして淺瀬を渉るのか？　え？　何だ、お前は眠つてるんだな！　おいこら！』

『ちよいと間違ひました、』と、私の馭者はいふ、『片つ方へ寄り過ぎましての、たしかに悪い事しました、けんど、まあ暫らく待つてた方がええでさ。』

『何だ、暫らく待つてた方がいいつて！　一體何を待つんだ？』

『へい、實は尨にそこらを見させるんでして。奴が動いた方へ、その、行つたらええと

いふ譯でやんす。』

私は千草のうへに起き直つた。軸馬の頭は水の上に全く動かずにゐる。ただ明るい月の光りに、片方の耳がきはめて微かに、前後に動いて居るのが見えるばかりである。

『おい、奴も眠つてるんだな、尨毛も！』

『いんえ、』と、フィロフェーが答へる、『奴はいま水を嗅いでるんでやんす。』

また何もかもが靜まり返る、ただ相變らず幽かにせせらぎの音がきこえる。私も亦ぼんやりしてしまつた。

月の光りと、夜と、川と、流れの中にゐる私たちと……

『あの嗄れた聲は何だらう？』と、私はフィロフェーに訊いた。

『あれかね？　あれあ葦ん中にゐる鴨でさ……でなけりや蛇でさ。』

俄かに軸馬の頭が搖れる。兩方の耳がぴんと立つ。軸馬は鼻を鳴らして、動き出す。

『ほい、ほい、ほい、ほうい！』と、フィロフェーが俄かに有らん限りの聲を絞つて喚き立て、少しばかり伸びあがつて、鞭を振り始める。馬車は直ぐに停まつてゐた場所から引き離されて、前へ前へと川の流れを押し切り、がたがたしたり搖すぶれたりしながら進んで行つた……。初めのうちは、だんだんと深く沈んで行くやうに思はれたが、二三度がた

ついたり窪みに落ちたりした後では、水面が急に低くなつたやうに思はれた……。水面はいよいよ低く低くなつて、馬車は水の中から生れて來たやうだ――そのうちに早くも車輪と馬の尻尾が見えて來た。今度は威勢よく大きな飛沫を、數しれぬダイヤモンドのやうに――いや、ダイヤモンドのやうにではなく――碧玉のやうに、月の朧ろげな光りの中に雨と降らしながら、馬は樂しげに力を合はせて、私たちを砂の多い川岸に引き上げ、月に輝やく濡れた足をしどけなく運びながら、山の方へと道をとつて行つた。

「さて、フィロフェーが、」と、ふと私は考へた、「何ていふだらう。《言はんこつちやないでせう！》とか何とか、さういつたやうなことを言ふだらう」と。ところが彼は何も言はなかつた。そこで私も彼の不注意を責め立てるには及ばないと考へて、干草の中に横になり、もう一度ぐつすり眠らうと試みた。

* * * * * *

しかし私は眠れなかつた、それは獵の疲れが出てゐなかつたからでもなく、今わたしが經驗して來た不安な氣持が眠氣を逐ひ拂つてしまつたからでもなく、實は今まことに美しいところを走つてゐるからであつた。見れば、豐かな廣々とした水に蔽はれた青々しい草

原で、――その中には無數の小さな芝生があり、小さな湖、小川、入江などがあり、その盡きるところには柳の林や水楊の繁みがある――それはいかにも露西亞らしく、露西亞人の好きな所で、わが國の古い傳說にある勇士たちが馬に跨がつて眞白い白鳥や灰色の鴨を擊ちに行つた所を思はせる。やつて來た道は黃ばんだリボンのやうにうねつてゐる。馬は足並かろく走つて、私は眼を合はせられなかつた――私は全くこの景色に見とれてゐたのである！　しかも凡ゆるものが、なつかしい月の光りをうけて、いと輕らかに、心地よく、浮んでは行き過ぎる。フィロフェートもまた、これには感心してゐた。

『ここらは聖イェゴルの草つ原つて言ふんでさ、』と彼は私を顧みた。『それから、この向うに大公の草つ原つていふのがありますけんど、こんな草つ原は露西亞中どこへ行つたつてありやんせん……、いやはや、どうもいい景色だなあ！』軸馬は鼻を鳴らして、胴震ひした……。『馬鹿なことするもんぢやねえよ！……』と、眞面目くさつて聲低くフィロフェーがいふ。『どうもいい景色だなあ！』と、繰り返して溜息をつき、それから長々と喉聲を出した。『もう直き干草刈りも始まりやんすけんど、どのくれえ干草を搔き集めることだか――大へんなもんだ！　入江にや魚が又うんとゐるし。こんな鯉が！』と、長く引つぱつて附け足した、『とにかく、世の中は死ぬがものはねえんでさ。』

彼は不意に片手を擧げた。

『ほう！　御覽なせえ！　湖のうへに……あそこに立つてるのは青鷺かな？　青鷺は夜でも魚を取るもんでやんすか？　あれ、まあ！　あれは木の枝だ、青鷺ぢやなかつた。やあ、間違つた。どうもお月樣にや、いつも騙される。』

こんな工合で私たちは先へ先へと進んで行つた……。が、もう草原のはづれに行き着いて、小さな林と耕された畑が見えて來た。一方には小さな村があると見えて、二つ三つの灯をちらちらさせてゐる、――もう本道までは五露里ばかりしかなくなつた。私はぐつすり眠つてしまつた。

私はまたもや自分では眼が覺めなかつた。今度はフィロフェーの聲で起こされた。

『旦那、……あの、旦那！』

私は起きあがつた。馬車は國道の眞ん中の平らなところに立つてゐる。フィロフェーは馭者臺のところから私の方へ顏を振り向け、大きく眼をあけて（私はこの眼を見て驚ろきさへもした、今まで彼がこんなに大きい眼をもつてゐようとは夢にも思はなかつたのだ）――意味ありげに、妙な聲で囁やいた。

『音がする！……音がする！……』

『何だつて？』

『音がするつて言ふんです！　屈んで聞いて見さつせえ。聞こえやんせう？』

私は馬車から頭を出して、息を殺した。すると、たしかにどこか遠くの方――私たちよりはずつとうしろの方――から車輪の音らしい微かな途切れ途切れの音が聞こえて來た。

『聞こえやんせう？』と、フィロフェーがまた言ふ。

『うむ、聞こえる、』と、私は答へる、『何だか、馬車が來るやうだ。』

『ああ、聞こえねえんですか……ほら！　小太鼓……たたいて……口笛ふいて……。聞こえやんせう？　帽子をとつて見さつせえ、……もつとよく聞こえるから。』

私は帽子はとらなかつたが、耳を澄ました。『うむ、なるほど……さうかも知れん。けど、あれがどうしたつていふんだ？』

フィロフェーは馬の方へ顏を向けた。

『小馬車が來る……荷物もつけずに、鐵の輪の車輪（くるま）だな、』と言つて手綱を取り上げる。

『あれあ、旦那、惡い奴が來るんですよ、ここらのトゥラ近邊ぢや、惡戲（いたづら）しやがるんですよ……よく。』

『馬鹿な！　どうしてあれが惡い奴に相違ないなんて思ふんだ？』

『わしの言ふのは本當でがさ。――小太鼓もつて……それから空車に乘つて……誰が來るもんですか？』

『ふむ――それはさうと、トゥラ迄はまだ遠いのか？』

『まだ十五露里はありまさ、ここらにや一軒だつて人の住んでる家はねえし。』

『それぢや、もつと早くやれよ、愚圖々々してたつて仕樣がない。』

フィロフェーが鞭を振ると、馬車はまた動き出した。

*　*　*　*　*

決してフィロフェーのいふことをそれほど信用したわけでもないが、私はもう寢つかれなかつた。――「若し實際にさうだつたら如何しよう？」――不愉快な氣持が私の中に動き出した。私は馬車の中に坐つて、――その時までは横になつてゐたが――四方を見廻し始めた。私が眠つてゐた間に、地上にこそ降りて來ないが、淡い霧が空に立ちこめて來た。それが高く立ちこめてゐるので、月はその中に乳色の一點となつてかかり、まるで煙の中にでもあるかのやうだ。地面に近いところは割合にはつきりしてゐるが、凡ゆるものが朦朧として、區別がつかなくなつてゐる。見わたす限り平らな寂しいところである。畑、ど

こもかしこも畑で、ところどころに叢があり、谿があつて――又しても畑があるが、大ていは休ませてあつて、僅かばかりの雜草などが生えてゐる。死のやうな……空虛！　せめて鶉でも一こゑ鳴けばよいものを！

私たちは半時間ほど進んで行つた。フィロフェーは絶えず鞭を振つたり、舌打ちをしたりしたが、二人とも一言も口をきかなかつた。そのうちに、漸く丘の上に登り切つた……。フィロフェーは三頭の馬をとめて、すぐに言つた。

『音がする……音が……する、旦那！』

私はまた馬車の外へ頭を出した、が、蔽ひの庇の下にぢつとしてゐてもよかつた。それほど、今はまだ遠くからではあるが明瞭に小馬車の車輪の音、人の口笛、太鼓のデンデンと鳴る音、それに馬の蹄の音さへも聞こえて來た。歌をうたふ聲や笑ひ聲さへも聞こえるやうな氣がする。風は確かにそちらから吹いてゐるのではあるが、見知らぬ旅人がせいぜい一露里、ひよつとしたら二露里くらゐはこちらへ近づいて來たことは事實である。

フィロフェーと私とは互ひに顏を見合はせた、――彼はただ帽子をうしろから額の方へぐいと引つ張り、手綱にのしかかるやうにして矢庭に馬を鞭うち出した。馬は一目散に駈け出したが、永續きはせずに、又もや跑足になつてしまふ。フィロフェーは續けざまに鞭

をくれる。どうしも逃げなければならぬ！

私は初めのうちこそフィロフェーのやうに何も不審の念を懷かなかつたのであるが、どうしたわけか今度といふ今度は、確かに後からは惡い手合がやつて來るのだと、急に思ひ込んだ……。別に新らしい物音が私の耳に聞こえて來た譯ではない、同じやうな太鼓の音、同じやうな空車（からぐるま）の音、同じやうな口笛、同じやうな騷ぎごゑ……。然し私はもう疑ひを持たなかつた。フィロフェーに間違ひがあらう筈はない！

さて、また二十分ほど經つた……この二十分が終らうといふ頃になると絕えず私たちの車がごろごろ、がらがらと輾る音にまじつて、他（ほか）の車がごろごろ、がらがらといふ音が聞こえて來た……。

『停まれ、フィロフェー』と私は言ふ『どつちにしたつて同じことだ——どうせ、やられるんだ！』

フィロフェーは怖る怖る『どう！』と言ふ。馬は一いき休めるのを喜んでゐるかのやうに、ぴたりと停まる。

さあ大變だ！ 太鼓はすぐ後ろでしきりに鳴つてゐる。車がごろごろと鳴る。人が口笛を吹く、叫ぶ、歌ふ。馬が鼻を鳴らす、蹄で地面を打ちつける……。

追ひ付かれてしまつた！

『困つちやつたなあ、』と悠長に低い聲でフィロフェーがいふ、——そして思ひ切り惡さうに舌打ちして、もう一度馬を勵ましかかる。が、その瞬間に不意に何物かが、すさまじい唸り聲をあげて飛び出して來る、——と思ふ間もあらせず、大型の幅の廣い馬車が、瘦せて筋張つた三頭の馬に曳かせて、忽然と旋風の如くに私たちに追ひ付いて、そのまま前へ駈け拔けたが、直ちに並足になつて、行く手を遮つた。

『全く追剝のお株だ。』とフィロフェーが呟やく。

正直のところ私はひやりとした……。それでも氣を張りつめて、霧に蔽はれた薄暗い月明りの中を見まもつた。前の馬車の中には、坐つてゐる者、横になつてゐる者、六人の男が襯衣を着て、粗末な上衣（アルミヤク）の胸をはだけてゐる。二人は帽子もかぶらず、長靴をはいた大きな足が横の板にかかつてぶらぶらしてゐる、腕は矢鱈に上がつたり下がつたりして……、身體は前後にぐらついて……。確かにこれは醉ひどれの仲間だ。出鱈目に喚いてゐる連中があるかと思ふと、一人はかなり鋭く、朗らかに口笛を吹き、もう一人は惡態をついてゐる。馭者の坐るところには膝きりの毛皮の外套を着た大の男が一人ゐて、手綱をとつてゐる。彼等は私たちには目もくれないかのやうに、悠々と馬を驅つて行く。

どうしたらよいのか？　私たちもまた悠々と後について行つた、……澁々と。

二町ばかりはこんな風にして進んで行つた。何かされやしないかと待つてゐるのは辛かつた……。まぬがれる、自分の身を護る……そんなことは、もう問題にはならないのだ！

相手は六人、こちらはステッキ一本もつてゐない！　引き返さうか？　引き返したところで直ぐに追ひ付かれてしまふにきまつてゐる。ふと私はジュコォフスキイの詩（そこで彼はカァメンスキイ元帥の非業の死を歌つてゐる）を思ひ出した。

　　賤しむべき暴徒の斧は……

さもなくば汚れた繩で首を絞められる、……溝に投げられ、……聲は嗄れ、民にかかつた兎のやうに蹲くのだ……。

ええい、見られた態ぢやないんだ！

彼等は相變らず悠々と、私たちには眼もくれずに行く。

『フィロフェー！』と、私は囁やいた、『やつて見な、もつと右へ寄せて通り抜けられるかどうか。』

フィロフェーはやつて見た、――右へ寄せた……けれど向うもまた右へ寄せる……通り抜けることは能きない。

フィロフェーはもう一度やつて見た。左へ寄せて見た、……しかし、向うはまた馬車を通させない。おまけに奴等は笑ひ出した。道を通さないぞといふ意味である。

『いよいよ追剝に相違ねえ、』と、フィロフェーは肩越しに私にささやく。

『けど何を待つてるんだらう、あいつ等は？』と、私もまた小聲で訊いて見た。

『ついその先の……窪地の……川のうへの……橋……あそこで私らをどうかするんだ！

いつもその手だかんね……、橋のそばで。どうせ、もう分かり切つてまさ、旦那！』かういつて彼は溜息まじりに言ひ足した、『とても生かしちや歸しますめえ。何しろ、ばれねえやうにするのが大事ですかんね。たつた一つ、口惜しいことがあるんでがす、旦那、この馬がなくなると舍弟らはもう馬あ持てねえんです。』

私はこれを聞いて實に驚ろいた、こんな時にフィロフェーがよく馬のことなどを氣にかけて居られるものだと。――たしかに正直をいふと私はフィロフェーのことなど一寸も考へてはゐなかつたのだ……「やつぱり本當に殺されるのか？」と、私は心の中で繰り返してゐたのである、「何のために殺されるんだ？　持つてゐるものは殘らずやるのに。」

＊　ジュコォフスキイ（一七八三―一八五二）の詩「元帥カァメンスキイ伯爵の死を悼む」の最後の行に「賤しむべき暴徒の斧はいかめしく獲物を待てり」とある。（譯者註）

しかも、橋はいよいよ近くなつて、次第次第に、はつきりと見えて來た。
不意に鋭い鬨の聲が聞こえた。前の三頭馬車は疾風のやうに突進して橋のところまで行くと、少しばかり道のわきへ寄つて、一氣にぴたりと停まつてしまつた。私の心は全く沈んでしまつた。
『ああ、フィロフェー兄哥、』と、私はいつた、『もう死ぬばかりだ。勘忍してくれ、おまへをこんな目に遭はして。』
『何であんたの罪科なもんですか、旦那！　持つて生れた運ちうものは仕様がねえ！　さあ、彦、いいかえ、賴みだぞ』と、フィロフェーは軸馬に言葉をかける、『やつてくれよ、な！　これがおしまひの奉公だぞ！　どつちにしろ命がけだ、……たのん……だぞ！』
そこで彼は馬をはげまして跑を駈けさせる。
いよいよ橋の方へ近づいて來る、――ぢつとしてゐるあの戰慄すべき馬車の方へ……。馬車の中は殊更らしく靜まりかへつてゐる。うんでもなければ、すんでもない！　梭魚や兀鷹、その他あらゆる猛獸が獲物に近づく時の靜けさだ。――いよいよ私たちは向うの車と一列に並んだ……、すると、いきなり膝きりの外套を着た大男が馬車の上から飛んで降り、つかつかと私たちの方へ向つて來た。

何一つ是の男がフィロフェーに口をきいたわけではなかつたが、フィロフェーの方では直ぐに、ひとりでに手綱を引つぱつた……。馬車は停まつた。
大男は馬車の戸に兩手をかけて、――毛むくぢやらの頭を前に傾げて、せせら笑ひをしながら、靜かな流暢な聲で、職人風な調子で次のやうなことをいつた。
『旦那え、わし等あ、眞面目な酒盛からの歸りでござんす、祝儀がありましてね。仲間の色男を緣組さしたといふ譯で、つまり、床入りをさせたんでござんす。わし等あ若いものばかりで、向う見ずな奴等でして――しこたま酒は飲みましたが、後口が何もねえといふ譯でして、――如何でござんせう、旦那、仲間に火酒の半瓶づつも飲ませるだけ、ほんのちよつぴり惠んでやつて下せえませんか？　さうすりや貴方樣の健康を祝して乾杯を致しまして、決して旦那さまの事あ忘れませんがの、――だが、若し、お厭やだとありやあ、――まあ、御立腹なさらんで下せえ！』
「これは何のことだらう」と、私は考へた……「冗談か？　嘲弄か？」
大男は頭を下げたまま、相變らず立つてゐる。丁度この時、月は霧のなかから現はれて、彼の顏を照らした。顏には薄ら笑ひが浮んでゐる、――眼にも、口もとにも。けれども別に人を脅やかす風も見えぬ……、ただその顏は絕えず用心をしてゐるかのやうに思はれる、

……そしてかなりに白い大きい歯が……。

『お安い御用です……これを上げませう……、』と、私は急いで言つて、ポケットから財布を引き出し、一留の銀貨を二枚とり出した、――その頃はまだ銀貨が露西亞で通用してゐたのである、『さあ、これで澤山だつたら……』

『大きに有難うございます！』と、大男は兵卒のやうに大きな聲で叫んだ。そして肥つた指が瞬くうちに私の手から――財布ごとではなく、――たつた二留だけをつかみ取つた。

『大きに有難うございます！』彼は髪の毛を振つて、自分の馬車の方へと駈けて行つた。

『おい、みんな等！』と、叫んだ、『旅のお方が銀貨を二留下すつたぞ！』すると一同は立ちどころに聲さわがしく笑ひ出した、……大男は馭者臺に轉がるやうに上がつた……。

『旦那、御機嫌よう！』

それきり彼等は見えなくなつた！　馬が勢よく駈け出して、相手の馬車はがたがたと音を立てながら、山を登つて行つた、――もう一度、空と地の相接する暗い線のうへにちらちらしたが、山を降りて消えてしまつた。

そしてもう車輪の音も、喚きごゑも、太鼓の音も聞こえなくなつた……。

あたりは息が絶えたかのやうに、ひつそりしてしまつた。

＊　＊　＊　＊　＊

フィロフェーも私も、暫らくは生きた空もなかつた。

『ああ、ふざけた奴だ！』と遂にフィロフェーが口を切つた、――そして帽子をぬいで十字を切り出した。『ほんとに、ふざけた奴だ、』と言ひ足し、すつかり嬉しさうな顔をして私の方を向いた、『けんど、氣だての好い奴に違えねえ――全く。ほい、ほい、ほい、こら！　急げ！　大丈夫だ！　みんな大丈夫だぞ！　通せん棒したのもあいつで、馬を御してたのもあいつだ。ふざけた野郎だな！　ほい、ほい、ほい、ほい、ほうい！――さあさあ、さつさと行くんだぞ！』

私は默つてゐた――けれど、私も心の中では嬉しかつた。『大丈夫だ！』と、獨り言をいつて干草のうへに横になつた。『ああ、安くて濟んだ！』

今となつてはジュコォフスキイの詩の一節を、どうして思ひ出したのかと恥かしくさへもなつて來た。

ふと私は思ひついたことがある。

『フィロフェー！』

『何ですね？』
『おまへ、女房はあるのかね？』
『ありまさ。』
『子供は？』
『子供もありまさ。』
『一體、どうしてお前、それを思ひ出さなかつたんだね？　馬のことばかり悲しがつて、——女房のことだの、子供のことは？』
『だつて悲しがるがものはねえでせう？　奴等あ盜棒につかまる氣遣ひがあるんぢやなし。けんど、いつも頭ん中にや、ちやんと入れときましたんで。——今でもやつぱり……そりやもう。』フィロフェーは暫らく口を噤んだ。『多分……神様あ嬶子供のためを思つて、儂等を助けてくれたんでやんせう……。』
『だが、あれが追剝でなかつたらどうだらうな？』
『そりや分かるもんですかね？　他人の心ん中へ入るわけにや行かねえぢやありませんか？　他人の心つちうもんは——なんてつても——分かるもんぢやねえ。でも神様あ信心してりや物事あ何時だつてうまく行くもんだ！……　いや、……私や何時も家族のことを

……。ほい、ほい、ほい、こら、さつさと行け！』
私たちがトゥラの町へ入りかけた頃にはもう殆んど夜は白んでゐた。私は横になつて半ば睡りながら、何もかも忘れてゐた……。
『旦那、』と、突然フィロフェーがいつた、『あれ、御覽なせえ、むかうの居酒屋んとこに奴等が立つてますよ……奴等の馬車が。』
私は頭をあげた……見ると確かに奴等である。馬車もゐる、馬もゐる。酒屋の敷居のところへ例の膝きりの外套を引つかけた男が不意に現はれた。『旦那！』と、彼は帽子を振りながら大きな聲で呼びかけた、『旦那のお金で飲んでるとこです！——やあ、別當さん』と、フィロフェーの方へ頭を振つて附け足した、『どうだい、多分、こんねにびくびくしてたろ？』
『とても面白い奴だなあ、』と、二十間あまりも離れた時にフィロフェーがいつた。
たうとうトゥラの町へ着いて、私は彈丸を買つた、序でにお茶や酒も買ひ——おまけに博勞から馬まで買ひ入れた。——お午ごろにまた歸途についた。行きしなに後から馬車の音を聞きつけた邊までやつて來ると、トゥラで一杯ひつかけて、極めて口が輕くなつてゐたフィロフェーは——お伽噺さへもやつてゐたが、——その邊を通り過ぎながら不意に笑

ひ出した。

『覺えてるかね、旦那、しよつちゆう儂が「音がする……音がする、音がする」つて言つてたのを！』

フィロフェーは幾度か手を振つた。彼にはこの言葉が、かなりに面白いものに思はれたのである。

その晩、私たちは村に歸つて來た。

私は二人が出遭つた出來事をエルモライに傳へた。彼は眞面目くさつてゐて、別に同情の意も表しなかつた、――ただ『ふむ、ふむ』といふだけであつた――感心してゐるのか、さげすんでゐるのか、――これは思ふに彼自身にも分からなかつたらう。然し彼は二日ほどして滿足さうに、フィロフェーと私とがトゥラへ行つたあの晩、しかも同じ道で、どこかの商人が金をとられて、殺されたといふことを話して聞かせた。初めは私はこの消息を信用しなかつたが、やがて信用しない譯には行かなかつた。エルモライのいつたことに間違ひがなかつたことは取調べのために馬を飛ばしてゐた分署長に裏書された。あの向う見ずの連中はこの大へんな「お祝儀」からの歸りではなかつたか、また、ふざけた大男の言葉でいふと、床入りをさせた「色男」といふのは、この商人ではなかつたか？　私はその

後、五日ばかりフィロフェーの村に滯在してゐた。――いつも彼に會ふや否や、私は『おい？　音がするかな？』と言つたものである。

すると彼はいつも『面白い奴でさ、』と答へて笑ひ出すのであつた。

森と曠野

いよいよに心ひかれぬ
かの村の暗き園生に、
菩提樹の大樹の影の暗くして
鈴蘭の花、清らにも香はしく
圓き柳、堤より水のうへに
つらなり垂れて
ゆたかなる槲、ゆたかなる畑に生ひ立ち
大麻や蕁麻のにほへるところ、
思ひ寄す、かの村の廣き大野に
天鵞絨のごと、地は黑々と
見わたす限り、ライ麥の靜かにも

輕きうねりを寄せかへし、
圓らかに白く透きいる雲間より
重たくも黄色の光の落つるところ、
かの村なれば、何もかも　よき……

（灰燼に歸したる詩篇の中より）

讀者はおそらく既に私の手記に倦かれたことであらう。そこで取り敢へず私は今までに發表された斷片をもつて筆をとどめるといふ約束を果して、重荷をおろしていただかうと思ふ。然しながら、讀者と別れるに際して、なほ獵について數言を費やさないわけには行かないのである。

鐵砲を肩にして犬をつれて獵をするといふことは昔よくいはれたやうに für sich それ自身すでに美しいことなのだ。が、諸君は生れつき獵人ではないにしても、とにかく自然を愛して居る以上は、やはりわれわれ獵人仲間を羨やまずに居られまいと思ふ、……先づ聞いていただきたい。

諸君は例へば春の夜明け前に出かける樂しさがどんなものか、御存じであらうか？　先づ表の階段に出る……暗い灰色の空にはあちこちに星がちらついてゐる、しつとりとした

そよ風が時をり輕い波のやうに吹いて來る。忍びやかな、はつきりしない夜のささやきが聞こえる。蔭につつまれた樹々が微かにそよぐ。そこで馬車には毛氈をかけ、足もとにはサモワルをいれた箱が置かれる。添馬が身を震はす、鼻を鳴らす、氣取つた歩き方をする。今しがた眼をさましたばかりの白い鶯鳥が聲も立てずに、のろのろと道を横切る。籬のむかうの庭園のなかには、番人がいと安らかに鼾をかいてゐる。一つ一つの物音が凍みとほる空氣のなかに停まつてでもゐるかのやうだ、停まつてゐて、流れないかのやうに。腰をかける。すぐに馬は動き出す。馬車は轢轆と輾り出す……。乘つて行く、――教會を過ぎ、山を下りて右の方へ、堤を越えて乘つてゆく……。池はやうやく煙りかける。いくらか冷え冷えする。毛皮の外套の襟を立てて顔をかくす。うとうと睡たくなつて來る。馬は音高く氷溜りをはねかして行く。馭者が口笛を吹く。ところがもう四露里ほどもやつて來てゐるのである……空の涯が紅らんで來る、白樺の木立のなかに眼がさめて、不細工に飛び渡る鴉。雀が暗い稻叢のあたりで、ちちと鳴く。空氣は光り、道はいよいよはつきりと、空は澄んで、雲は白く、野は青々と。あちこちの小舍の中には木片が赤い火を發して燃えかがやく。門の向うから睡たげな人の聲が聞こえる。さうかうしてゐるうちに朝燒の色が燃えあがる。早くも金色の縞が空にひろがる。谿には霧が卷きあがる。雲雀が聲うるはしく

歌つてゐる。夜明け前の風が吹き出した。それからしづかに韓紅の太陽が浮きあがつて來る。水の流れのやうに光りが迸る。胸は小鳥のやうに羽ばたきする。何もかもが新鮮で、樂しく、なつかしく！　あたりは遠くまで見渡される。あの林の向うには村がある。それから少し離れて白い敎會のある村が一つ。そこの山には白樺の木立があつて、その後ろに、これから行く沼地がある……。もつと早く、馬よ、もつと早く！大きく、跑をふんで進んで行け！……まだ三露里ほどある、それより多くはない。太陽は忽ちに昇る、空は清らかである……。すばらしい天氣になるだらう。村から家畜の群れがこちらへぞろぞろとやつて來る。山に登る、……何といふ眺めであらう！　川は霧の間にぼんやりと青く、十露里も、うねりうねつてゐる。川の向うにはみづみづしい綠の草原。草原の向うには、なだらかな丘陵がつづいて、遠い沼地のうへには、田鳧が鳴きながら飛んでゐる。空にあふれた、うるほひのある輝やきの中に遠くの方がはつきりとあらはれる……夏のやうではないけれど。人の胸はどんなに思ひのままに息づくことか、どんなに手足が輕々と動くことか、どんなに身も心も健かになることか、春の新鮮な息吹きにいだかれて！

さてまた夏の七月の朝！　夜の明けぎはに、叢から叢とさまよひ歩くことが、どんなに樂しいものか、獵人ならで誰がまた味はひ得るものか？　足跡は露に白々とした草の上に

綠の線を引いてゐる。濡れた叢を分けてゆく――すると今まで貯へられてゐた溫い夜の匂ひを浴びせかけられる。空氣は苦蓬の新鮮な苦味や蕎麥や甘蕣の蜜のやうな甘い香ひにしつとりとしてゐる。遠くには櫸の森が城壁のやうに立つてゐて、日ざしをうけて輝やき紅らんでゐる。まだ清涼しくはあるが、既に暑さの近づいて來たことが感じられる。かぐはしい匂ひを一ぱいに浴びせかけられて、ぼんやりと眩暈がする。叢林は極まるところもなく……。ただ遠く處々に熟れたライ麥が黃ばんでゐるのと、蕎麥が細い畝をなして赤らんでゐるのが見えるばかり、そこへ馬車が輾り出す。一人の百姓がこつそりと大股に歩いてゆく、暑さの來ないうちにと樹蔭に馬を引き入れる……。百姓に挨拶をして行つてしまふ――すると後ろから大鎌のチンカンといふ爽やかな音が聞こえる。太陽はいよいよ高く昇る。忽ちに草は乾く。さあ、もう暑くなつて來た。一時間、二時間と過ぎてゆく……。空は地平線に近いあたりは薄暗くなつて、動かない空氣は、刺すやうな熱さに炎々と燃える。

『おい、ここいらで何處へ行つたら水がたんと飲めるだらう？』と、草を刈つてゐる人に訊ねる。――『そりや向うの谿ん中に井戸がありますよ。』蔓草の這ひまつはつた、こんもりとした胡桃の林を通り抜けて、谿の底に下りてゆく。なるほど、斷崖の眞下に泉が隱れてゐる。櫸の灌木が水の上に、鳥の趾のやうな枝を貪るやうに張つてゐる。大きな銀の

やうな水の泡が細かな、天鵞絨のやうな苔におほはれた底からゆらゆらと湧きあがつて來る。地べたに身を投げて、がぶがぶと水を飲む。すると、もう動きたくなくなる。樹蔭へ入つて香りの高い露じめりを吸へば、快よくなつて來る。眼の前の叢林は日に燃え立つて、まるで黄いろに變つたやうだ。しかし、これは何であらう？　風がゆくりなく吹いて來て、颯と吹き過ぎる、あたりの空氣がふるへる、これは雷ではなかつたか？　谿を出てゆく……。あの地平線のうへの鉛いろの筋は何であつたか？　暑さが增して來るのか？　黑い雲が湧き立つて來るのか？……しかも今かすかに稻妻がひらめいた……。ああ、これは雷雨だ！　あたりにはまだ太陽がきらきらと、光つてゐる。まだ獵をすることは能きる。けれども黑い雲はむくむくと湧いて來る。雷雲の前の緣は袖のやうに伸びて、穹窿のやうに垂れて來る。草や灌木や、あらゆるものが暗くなる……。急げ！　向うの方に干草小舍が見えるやうな氣がする……さあ急げ！　駈けつける、中に入る……。何といふ雨であらうか？　何といふ稻妻であらうか？　そこここに藁屋根を洩れて、雨水が香りの高い干草のうへに降りかかる……。が、もう太陽はまた照つてゐる。雷雨は去つた。外に出る。ああ、どんなに樂しげに、あたりの凡ゆるものが輝やいてゐることか、この空氣の新鮮なこと、淡いことはどうだらう、白花蛇苺や菌の香ひは！……

しかし、間もなく夕暮がやつて來る。夕映えの光りが炎々と燃え立つて空を半ば掩つてゐる。陽は落ちかかる。そこらの空氣は何かしら際立つて、硝子のやうに透きとほつてゐる。遠くにはやはらかな、見たところは溫かさうな靄が立ちこめてゐる。ついさつきまで、淡い金の流れを浴びてゐた野邊には露とともに眞紅の光りが落ちる。樹から藪から高い干草の山から長い影が走る……。陽は沈む。星が一つ點つて、日沒の火の海にふるへてゐる……、今は火の海も色あせて、空は青み、くつきりした物の影も消えて、あたりは薄闇に閉ざされる。もう、一夜の宿をとるべき村の小屋へ歸る時刻だ。銃を肩にして、くたびれたにもかかはらず、さつさと歩いてゆく……。そのうちに夜がやつて來る。二十歩さきは見えぬ。かすかに闇の中に犬たちが白く見える。向うの黑い林のうへに空の緣がぼんやりと明るんでゐる……。あれは何だらう？　火事かしら？……いや、あれは月の出だ。またその下の、右手の方には、村の灯がもうちらちらしてゐる……。そこで、いよいよ小舍へ來る。小さな窓から眞白な卓布をかけた食卓が見える、燃え明る蠟燭が見える、晩餐だ……。

また時として競走馬車を仕立てさせ、松鷄を擊ちに森へ出かける。兩側に高いライ麥が壁のやうに立つてゐる細い徑を苦勞して通るのは愉快なものだ。麥の穗が靜かに顏にあ

たる。矢車菊が兩足にまつはりかかる。あたりに鶉が啼いてゐる。馬はおぼつかない跑を踏んで走る。さあ、森へ來た。樹蔭と靜寂。頭の上には、すらりとした白楊が、聲高く呟やいてゐる。長く垂れた白樺の枝は殆んど動かない。堂々たる槲の樹は美しい菩提樹のほとりに戰士のやうに立つてゐる。樹蔭に斑模様を織る綠の徑を乘つて行く。黃いろい大きな蠅が黃金いろの空氣の中にぢつとぶらさがつたやうにして羽を動かしてゐるかと思ふと、ふつと飛んで行つてしまふ。薊蚊が樹かげに入れば光り、日向に出れば黑くなつて、雲のやうに群がりながら飛んでゐる。小鳥がのどかに歌つてゐる。鶺鴒の麗はしい聲は無邪氣な、おしやべりな喜びをひびかせる。その聲は鈴蘭の香りにふさはしい。更に遠く、遠く、森の奧深くわけ入る……。森はいよいよ深くなる……。心はいひ知れぬ靜けさに充たされる。あたりもまた、微睡んでゐるかのやうに、ひつそりと靜まりかへつてゐる。しかし今、一陣の風が吹いて來た。樹々の梢は落ちて來る波のやうにざわめき出した。去年の枯葉の間から、あちこちに高く伸びた草が生えてゐて、菌は笠を冠つて、ちらほらと立つてゐる。不意に白い兎が跳び出す、犬がはげしく吠えながら後を追ひかける……

秋もふけて山鷸が飛んで來る時分には、かういふ森はいかばかり美しいことであらう！山鷸は森の奧にはゐないので、森の緣に沿ふて探さなければならない。風もなく、陽の目

も見えず、光りもなければ影もなく、動きもなければ、音もなく、やはらかな空氣のなかには酒の匂ひのやうな秋の匂ひが漲つてゐる。淡い霧が遠くの黃いろな野原のうへにかかつてゐる。花も葉もない鳶いろの樹枝の間から、變らぬ空が和やかに白んで見える。菩提樹の枝にはところどころ、名殘りの金色の葉が垂れてゐる。濕つた地面は足もとに彈ねかへるやうだ。丈の高い枯草はそよともしない。長い蜘蛛の糸が生氣のない草のうへに光つてゐる。胸は安らかに呼吸をする、けれども魂のなかには不思議な不安が押し寄せてくる。森のへりについて行く、犬のあとを見まもる、さうしてゐるうちにも、なつかしい人の姿、なつかしい顏、今は亡き人々、今もなほ生ける人々の面影がありありと心にうかんで來る。かなり昔に眠りについて、忘れはててゐた印象が思はぬうちに眼がさめる。想像が小鳥のやうに翼を擴げて駈けめぐる。さうして凡ゆるものが極めてはつきりと動いて、眼の前に立ちどまる。すると、心は急にわなわなと鼓動を高めて、ひたすら前へ突き進まうとする、さうかと思ふと、永劫に數々の思ひ出のうちに沈んでしまふ。今までのあらゆる生活が卷物のやうに、容易にさらさらと繰り展げられる。ありとある自身の過去、ありとある感情、力、ありとある自己の魂に人は想ひ到る。さうして周圍には何ひとつ彼を妨げるものはない——陽もなく、風もなく、物音すらも……

また秋の好く晴れて、薄ら冷たく、朝ごとに霜を見る頃ともなれば、白樺はお伽噺のなかの樹木のやうに、すつかり黄金いろに輝やいて水浅葱の空美しく描き出される。太陽は低くかかつて、もう温い光りを投げはしないが、夏の陽よりも赫々と輝やいてゐる。白楊の小さな林は、裸になつて立つてゐるのが樂しく氣輕ででもあるかのやうに、一帶にきらきらと光つてゐる。凍つた冷たい水蒸氣は谷の底にまだ白々として、爽やかな風が靜かに乾反つた落葉をひらひらさせては追ひまくる。河の流れには青い波が、うつかりしてゐる鷺鳥や鴨を調子よく搖り上げながら、喜ばしげに走つてゆく。遠くの方には、柳に半ば隱れた水車場が音をたてて、そのうへを明るい空氣にちらちらしながら、鳩がすばやく輪を描いては飛んでゐる。

獵をする人たちは好きないけれど、夏の霧の深い日もまた、なかなか嬉しいものである。かやうな日には、銃を擊つことは能きない。鳥が足もとから羽ばたきしながら飛び立つて、すぐに動かぬ霧の仄白い薄ら闇に消えてしまふからである。けれどもあたりのものが何もかも靜かなことは、口に言へないほど靜かなことは何うだらう！　何もかもが眼をさまして、しかもみな聲をひそめてゐる。樹のそばを通り過ぎる——樹はさゆらぎだにもしない。樹は安佚をむさぼつてゐるのだ。空に平らにひろがつた淡い靄を透して、眼の前に長い條

理が黑く見える。それを直ぐ近くの森だと思ふ。そこで行つて見る。すると、森は地境ひに高く積まれた苫蓬に變る。上にも、周圍にも……到るところに霧がある……。けれども、微かに風が動くと見れば、水淺葱の空の一片がうすれゆく煙のやうな靄を透して、ぽんやりと見えて來る。金のやうに黃いろな日ざしがさつと射し込んで、長い川のやうに流れて、野面を照らし、林にあたる。かと思へば、また何もかも霧に蔽はれる。暫らくこの鬪ひが續く。が、遂に光りが勝利を占めて、溫められた霧の最後の波が滑り落ちて、卓布のやうに敷き擴げられ、あるひは、うねりうねつて奧深く、やはらかに輝やく山の中へと消えてゆく時、その日はいかばかり言語に絕して、壯麗な、晴々しい日となることであらう……

また遠く離れた野原へ、曠野へ行かうと考へる。凡そ十露里ほどが間は、村の道を辿つて行く——そのうちに遂に國道に出る。荷車のはてもない列を越えて、檐の下にサモワルがシュッシュッと音を立て、門を開け放して、井戸まで見える旅籠屋を通り過ぎて、村から村へ、涯しもない野原を横切り、綠の大麻の畑に沿つて、長いこと、長いこと馬を驅る。鵲が柳から柳へ飛びうつる。手に長い草搔きを持つた農婦たちは畠の中をさまよつてゐる。すり切れた南京木綿の上衣を着た旅の者が頭陀袋を背負つて、疲れた足を引きずつて行く。丈の高い六頭の足の弱つた馬に曳かせて、がつしりした地主の箱馬車が眼の前にや

つて來る。窓のところからはクッションの端がはみ出てゐる。後ろの馬丁臺の叺のうへには、綱に凭れながら眉のところまで泥をはねあげて、外套を着た從僕が横向きに腰をかけてゐる。やがて小さな郡の町に着く、そこには歪んだ木造の小さな家や、どこまでも續く柵があり、人のゐない石造の商館があり、深い谿にかけ渡した古風な橋がある……。更に更に遠くへ行く！……。すると曠野の地方になる。山の上から眺める——何といふ見晴らしであらう！　上まで耕されて、種をおろされてゐる圓い低い丘は、大きな波のうねりのやうに起伏してゐる。その間を灌木の生ひ繁つた谿がうねつてゐる。小さな林が細長い島のやうに散在してゐる。村から村へ細い小徑が走つてゐる。教會堂が白く見える。柳の生ひ茂つてゐる間に小川がちらちらと光つて、四ケ所ばかり堤に堰きとめられてゐる、遠い野原の中には野雁が一列に並んでゐる。長屋や果樹園、麥打場などのある古い地主の邸が小さな池に臨んでゐる。なほ、もつともつと進んで行く。丘はいよいよ小さくなつて、樹は殆んど見られない。ここに至つて、遂に——きはまるところを知らない廣大な曠野へやつて來たのだ！……

また冬の日には高い雪の堆を兎を逐つて驅けめぐる。嚴寒の刺すやうな空氣を吸ふ。やはらかな雪の眩しい細かな閃めきに、思はずも眼を細くする。紅らみを帶びた森のうへに

かかる大空の緑の色に見とれる！……また早春の頃ともなれば、あたりのものは何もかも輝やき、崩れて、解けた雪の重苦しい蒸氣のなかに、溫められた土の匂ひがする。雪の解けたところに、斜めにさす日ざしをうけて、雲雀が心置きなく歌つてゐる。また、樂しげなざわめきと咆りごゑをあげながら奔流は谿から谿へ渦卷き落ちる……

それにしても、もう終りにすべき時が來た。序でに——私は春のことまで言つてしまつた。春のわかれはいと易い、春は幸福な者も遠くに心ひかれる……。さようなら、讀者諸君、願はくは恒に幸福ならむことを。

終り

解說

ツルゲェネフの最初の詩集「パラーシャ」（一八四三）が出た時、この若き詩人を「嬉しいと思ふよりも、當惑を感ずるほど好意をもつて批評し、熱心に稱揚した」のは、當時の最も偉大な批評家ベリンスキイであつた。そのベリンスキイさへも「パラーシャ」以後の作品に對しては極めて冷淡で、詩人が如何なる精力を傾けようとも、到底この批評家の推奬をうけることは能きなかつた。つひに詩人は自己の創作に何等の滿足をも見出すことが能きず、全く文學者として立つことを斷念して、露西亞を遠く離れ去らうとした。

去るにあたつて、雜誌「現代人」の雜錄欄を埋める原稿を持ち合はさなかつた編輯者パナーエフから切に乞はれるままに、彼の手に殘して行つたものは、九篇の詩、小論文および「ホーリとカリヌィチ」といふ題のついた短篇であつた。名を祕して、ドストイェフスキイの「九つの手紙より成る小說」と共に、文藝欄ならぬ雜錄欄に、編輯者によつて「獵人日記より」といふ、わざわざ讀者に卑下した題までつけられて發表された短篇、「獵人

日記」の最初をなす小さな一篇が、作者の文學者としての位置を決定し、社會史の上にまでも大きな役割を演じようとは、作者すらも思ひがけぬところであつた。まことに「このスケッチに成功して、私はもつと書かうといふ氣になつた。さうして文學に歸つたのだ。」と後年の作者が告白して居るやうに、「ホーリとカリヌィチ」は作者の文學上の位置、乃至は藝術的進路を決定する礎石となつたものである。

この作品が發表されたのは一八四七年であつた。その後五年に亘つて書かれた二十幾篇をもつて遂に一卷をなした「獵人日記」が、その中に殆んど戰鬪的な調子や矯激な反抗的精神は認められず、かへつて溫雅な貴族的精神が著しく眼に立つにも拘はらず、當時の最も大きい社會問題であつた農奴制度に決定的な打擊を與へたことは、餘りにも周知の事實である。

ツルゲェネフは「ホーリとカリヌィチ」が現はれて後、およそ二十年を經て、嘗て二十歳の青年であつた自分が、「露西亞にあつては周圍に見るものの殆んどすべてが忿怒、不安、つひには嫌惡の情すら催ほさせる」のに耐へられず、はるばると獨逸に留學した頃の心境を思ひおこして、次のやうな言葉を述べるのであつた。

私は自分の憎むものと同じ空氣を吸つて、一緒にゐることが能きなかつた。それには恐らく私には相當の忍耐力と強い性格が足りなかつたのであらう。私は敵に對して、より强い打擊を與へるために是非とも自分の敵から遠ざからなければならなかつた。私の眼に、この敵は判然たる形象をもち、一定の名を有つてゐた、――敵といふのは、ほかならぬ農奴制度であつた。

以上の言葉は、後にはあらゆる文學教科書に引用されて、「獵人日記」の題詞とさへもなつてゐた。かくて、農奴制度と何等妥協することなしに鬪はうとした積年の心の誓ひによつて、「獵人日記」が成つたとし、幾多の事實、例へば、アレクサンドル二世がこの書を愛讀して、個人的に「余は『獵人日記』を讀みて以來、農奴を解放せんとするの念を一刻も失ひたることなかりき。」と述べたこと、當時の教養ある知識階級に非常な感動を與へて、或る者は「怖るべき煽動の書」となし、或ひはこの書を寛大に處置した檢閲官が職を免ぜられたといふやうな事實を擧げて、「獵人日記」を農奴制度に對するプロテストと見做し、「農奴解放の拍車」と認める批評は、始んど慣例でもあるかのやうに今日まで屢々くりかへされて來た。

しかしながら、「獵人日記」の作者は、決して鬪士ではなかつたのである。この作者は

穩健な立場、言ひ換へればリベラリズムの立場に立つて、表面から徒らに農奴解放に非難の聲を浴びせることなく、ただ、その當時、ベリンスキイの所謂「今日の露西亞における最も生きた、國民的問題」（ゴオゴリへの手紙…一八四七年七月…）であつた農奴制度の重壓にもがいてゐる農民の生活に、新しい題材を求めて、感じ易い、怜悧な、愛情にみちた農民の生活圖をゴォゴリ的な鋭い眼によつて描き、惡制によつて齎された不合理を一そう明瞭に意識させただけであつた。彼は一度として、搾取的な組織が必然的に滅びなければならないことも、地主によつて日と共に惡用されてゐる農奴制度が革命的手段によつて廢棄されなければならないことも、たとひ容認はしてゐたにしても、決して直接に作品の上に示しはしなかつたのである。ヴーレニンがいふやうに、「たとひリベラリストが何といはうとも、到るところにあるものは露西亞の村落生活に魅せられて、質朴な、溫和な、詩的眞實をもつて讀者の心を充たさうとする藝術家の廣い見聞と、靜かな調子であり、そこにはプロテスタントの狹い見識や惡意のある調子は見當らない。」のであつた。

いかに作者および後年の評家が、作者のかかる意圖のみを誇張しようとも、また、かかる意圖を唯一の大きな原動力と見做さうとも、それ以上に認めなければならないのは、意圖によつて栓を拔かれた現實の形象に他ならないのである。「農奴制度に對する憎惡」の

みによつて「獵人日記」を見ようとするのは、あまりにも公式的な觀念によつて現實を歪曲することを怖れ、つねに「自由で、誠實な藝術家のみが、切實な現實の姿を把握することが能きる。」と言ひ、「內心の自由」をひたすらに重んじてゐたこの作家を、幕を隔てて見ることになるのである。むしろ、藝術的效用によつて、政治的效用を生じたといふことは、作者にとつて豫期しないことではなかつたらうか。とはいへ、「獵人日記」の意義を政治的にのみ見ようとする批評は今日まで續いて居るのである。例へば、フロレンスキイ、ロジデストウェンスキイ共著の「十九世紀の文學」（一九三三年版）のうちに、この書の意義として、當時の反響を述べ、「ツルゲェネフは地主と闘ふ農民を直接は描かなかつたが、別の方法によつて、農奴制度との闘爭に大きな役割を演じた。」と、ただそれだけの結論をなして居るが如きがそれである。

いかなる政治的な效果を收めたにしても、作者が作品のうちに示し、乃至は示さうとしたところのものは、制度や組織に對する闘爭の理論にあつたのではなく、より自由に、廣汎な意味に解すれば、「社會の鏡」（言ひ古された言葉ではあるが）としての自覺をもつた作者が、自身に最も近しい農民の生活を、ありのままに描いて、單に「百姓は道具ではない、百姓は物を思ひ、物を感じ、喜び、怒り、哀しみ、樂しむことの能きる、やはり人間

なのだ、人間も人間、地主よりは更に人間的な人間なのだ。」といふこと――ただ、それを示さうとするところに藝術家ツルゲェネフの努力があつたやうに考へられる。

「エルモライと粉屋の女房」、「苺の泉」、「リゴフ」、「支配人」、「二人の地主」、「あひびき」等のうちに農奴制度に對する反抗の聲が聞かれることは事實である。が、その聲は忽ちにして、樹の葉のそよぎのうちに、昔の日の華やかな思ひ出のうちに、夜うぐひすの聲のうちに、素朴な百姓の微笑まれる話しごゑのうちに、いつ知らず消えて、あとかたもなくなる。更に、右の如き作品のうちに、仄かながらもプロテストの聲を聞きわけたものは、「ビェージンの草原」、「わが隣人」、「郡の醫者」、「タチヤナ・ボリソヴナとその甥」、「チェルトプハーノフとネドビュースキン」、「森と曠野」等にいかなるプロテストを認めるであらうか。そこには何があつたか。讀者は詩を感じ、自然の美を思ひ、地主と農民の生けるタイプの動き、一言にしていへば、村の生活の生きた純藝術的再現に、その靜かな美に打たれるだけではなかつたらうか。

ここで、「獵人日記」の全體の色調が、戰鬪的でないことは、容易に看取されることであり、農奴制度に對する反抗的精神として認められるものは、極めて少いといはなければならぬ。これについては、當時の檢閲が苛酷を極めてゐたといふ事實によつて、一應の辯

解は成り立つであらう。即ち、ツルゲェネフ自身が、三十篇ほどのうち、檢閲を通過する見込のあるもののみを發表し、他は見合はせたと述べてゐたことを引用して、檢閲が寛大であつたならば、「敵」に對する反抗の聲を一そう明瞭しえた筈だ――といふやうなことが考へられるであらう。

しかしながら、コォガン教授のいふやうに、「この作者は最初の作品において、すでに鬪士ではなく、莊園生活に育くまれた魂をもつた藝術家であり」、「彼にとつては農奴制度の崩壞と共に崩壞しなければならなかつた世界が貴く」、「彼は、この世界の友であり、詩人であつたほどには、敵ではなかつた」ことを認めなければならないのである。ツルゲェネフにとつては、鬪志なるものは、内に秘められた力であり、直接、外部にあらはれるやうなものではあり得なかつたのである。私は今、この因つて來るところを先づ彼の貴族としての生ひ立ち、「當代のインテリゲンチャの精華」(コォガン)であつた貴族の家に育くまれたといふ事實に見ようかと思ふ。一個の鬪士となるためには、あまりにも彼は貴族的な魂のデリカシイを有ち、あまりにも詩人であつた。ブランデスが、

作家としての彼は貴族の名殘をとどめてゐた……ツルゲェネフには直ちに貴族主義者と見做される影こそ見えぬが、讀者は彼の作品から、作者が生れながらにして魂のデリカシイを有ち、つ

ねによい社會に暮らしてゐたといふ印象をうける。彼は上流社會の人間であつた。彼の作品には到るところに上流社會の生活經驗が感ぜられる。

といつたやうに、「上流社會の人間」(當時における「上流社會の人間」は、當代の教育と思想と良心との最もよい代表者であつた)として成長した彼には、徒らに矯激な反抗精神が巣を食ふ餘地はなかつたのである。

ここで序でながら、「獵人日記」の作者をよりよく知るために、彼の生ひ立ちをもう一度ここに思ひ出して見よう。

遠く十三世紀の初めに中央亞細亞から侵入して來た韃靼族の一人を祖先とする露西亞貴族、そのうちでも最も古い名門の家にこの作者が生れたのは一八一八年の秋十月であつた。傳記は彼の母が幼にして父を失ひ、繼父のもとに育てられて、醜い容貌と偏狹な性質とをもつて絶えず侮蔑され、虐待されて、十四歳のをり血に繋がる伯父の家に走り、ここでもまた、獨身の伯父の頑迷な性格に苛まれながら、三十五歳に至るまで、恰も囚人のやうな月日を送つたことを物語つてゐる。やがて彼女は伯父の急死によつて、千人の農奴と巨萬の富を相續し、眉目秀麗な夫を得たが、家庭に風波の絶え間なく、放埒な夫に先立たれてからは、いよいよ殘忍な女となつて、農奴に對しては、苛酷な典型的な女地主となり、子供に對しては、峻嚴な母となつた。ツルゲェネフは自

身の言葉をもつてすれば、「何の憐れみもなく、殆んど毎日のやうに鞭うたれて」少年の日を送つた。「嚴めしい、恐りつぽい」、「その躾け方は針のやうにきびしかつた」祖母として小說『プゥニンとバブーリン』のうちに描かれた、母の黑い優し味のない眼に追はれてゐる暗鬱な家庭に、魂を傾けて少年が愛しうるものは農奴ロバノフだけであつた。廣い莊園の靜かな灌木のしげみにかくれて、小鳥に歌をうたはせるプゥニン(ロバノフ)によつて、「ああ、貴族、あんたたちは餘りに外國人を好きすぎた」と嘆息するプゥニンによつて少年は召使すらもが外國語で話をせねばならない自身の家で眞の露西亞語の音を聽かされた。プゥニンは幼い子供に露西亞語を、露西亞の詩や文學を愛することを敎へる。「私たちの家では文學とか詩とかいふものに對しては何等の注意を拂はなつたばかりではなく、詩、わけても露西亞の詩は、全く蕪雜な愚劣なものと見做されてゐた。祖母は詩と呼ぶことすら嫌つて、御詠歌と呼んでゐた。プゥシキンの名だけを辛うじて知つてゐた程の祖母の眼をぬすんで、「いひやうもなくうれしい戯と時代の香ひが鼻に迫つてくる」詩の本をひろげて露西亞の詩をおごそかに流暢に讀んで聞かしてくれるプゥニンに惹きつけれて十二歳の少年が詩を作つたといふ話は、身分の低い農奴が後年の詩人の運命に重要な意義をもつてゐることを私たちに暗示してゐる。かやうな少年時代に自然に對する深い愛と、自由を奪はれた農奴に對する同情と、つひに失はれなかつた哀愁の萠芽が培はれてゐた。

以上のやうな生ひ立ちは、既に疎豪な闘士となるには、あまりにも纖細すぎる魂を育く